

青春8

CHEONGHAK

鶴

青鶴
8

巻頭言

公益財団法人韓昌祐・哲文化財団

韓昌祐 理事長

昨年8月30日に、京都府丹後広域振興局長の山内一さんから紺綬褒章の伝達を受けました。かつて京都府峰山町に13年暮らしていました。京丹後市（旧峰山町）は第二の故郷です。その京丹後市が教育、文化、芸術、スポーツの振興で人材育成を推進し、地域から新しい産業が興ることを願って一昨年5億円を寄附しました。

その後、地域経済活性化のために制定されたのが「京丹後市韓哲・まちづくり夢基金」条例でした。それが今回の紺綬褒章受章の理由です。

韓哲とは、16歳で夭逝した長男の名前です。彼は小学生の時にこんな作文を書いていました。「ぼくは、町のためにやくだつ。ぜつたいに。たとえば小学校を作る、そしてほどうきょうを作る、こうみんかんをたてる。小学校中学校にプール50mを作る。（中略）こうえんを作る、町えいブランドを作る…」（原文ママ）

子供ながら、地域社会のために貢献したいという意欲が読み取れます。社会貢献は、韓家の遺伝子なのかもしれません。

2010年に、生まれ故郷韓国・慶尚南道泗川市に設立した「韓昌祐 祥子教育文化財団」の奨学証書授与式も第7回を迎えました。次男の韓裕理事長の下で運営されています。この財団のユニークなところは、礼儀止しく、成績が優秀で、家庭環境に

恵まれない子供たちに奨学金を拠出しています。額は小学生卒業生に50万ウォン、中学卒業生に100万ウォン、高校卒業生に300万ウォンです。300万ウォンは大学の入学金と1年間の学費に相当する金額です。

奨学金以外に韓昌祐祥子教育文化財団の看板になっている事業が「読書奨励」です。「読書マラソンノート」を参加申請した各家庭に配り、子供だけでなく両親も参加して1ページ読んだら、1m走ったことになっています。フルマラソンコースなら42195ページを読んで、「ここが良かった」「こういうところで感動した」と家族全員が話し合って読書マラソンノートと向き合います。学校別に審査員がいて優秀な家族を選抜します。毎年約100組の家族だけが次のステージの「読書ゴールデンベル大会」に出場できる。中には単身赴任でお父さんがいない家庭や母子家庭もあります。仕事の都合で半年で4万ページの読書が難しい家庭もある。そういう家族にはハーフマラソンコースを選択できるようになっています。

指定された本の中からクイズが出され、外れると1組、1組落ちていきます。ある年、両親のいない子供がお祖父さんと二人で出場した。ところが途中で落ちて悔しくて泣きだしてしまった。応援に来ていた親族も泣きだして、その子にむけて「がんばったよ!」と声援が飛んで、会場が家族愛で満ち溢れたということです。読書を奨励しながら、家族愛を作っていきたいというのもこの財団の目的の一つです。3年前の話ですが、慶尚南道に数ある奨学財団法人の中で、行政から監査を受けて最優秀財団の評価を頂きました。

生まれ故郷の韓国の財団では、奨学金と読書奨励でソウルや釜山の子供に負けない学力を育成したい。他方、東京の（公財）韓昌祐・哲文化財団については、助成受贈者のクオリティを向上させ日韓交流に寄与したいと願っています。

8

巻頭言 韓昌祐……………2

写真集『青鶴——存在する夢』より 柳銀珪……………6

公益財団法人 韓昌祐・哲文化財団 第八回助成金受贈者それぞれの道

金潤妃 ニューイングランド音楽院

人と人の心をつなぐヴァイオリニストに……………10

金煥基 東国大学校教授 東国大日本学研究所所長

コリアンディアスポラ文学が映し出す現代の時代精神……………30

布袋敏博 早稲田大学国際教養学部教授

近代朝鮮を胚胎する朝鮮人留学生を総合的に研究……………46

松谷基和 東北学院大学教養学部言語文化学科准教授

びねくれ研究者が問い直す日本と朝鮮の近現代史……………62

公益財団法人かながわ国際交流財団

地域社会の文化の核、美術館・博物館の活性化を促す「ミュージアム・サミット」を開催……………78

渡邊雄二 九州産業大学芸術学部ソーシャルデザイン学科教授

関野貞の朝鮮時代絵画研究の足跡をたどって……………96

平郡達也

島根大学法文学部人文社会科学研究科准教授

朝鮮半島出土の「磨製石剣」から青銅器時代の文化を明らかに……………112

安田純也

滋賀県立大学非常勤講師

「仏腹蔵」研究で朝鮮半島の信仰の形を明らかにする……………128

生野オモニハツキヨ

在日コリアン女性の日本語識字と生涯学習を支援する……………144

青鶴学術論文集

近代日本における朝鮮時代絵画研究——関野貞の絵画調査とその背景……………162

九州産業大学芸術学部教授 渡邊雄二

研究報告・押川方義と朝鮮——朝鮮伝道計画の前後史……………194

東北学院大学教養学部准教授 松谷基和

磨製石剣からみた韓半島青銅器時代社会……………202

島根大学法文学部准教授 平郡達哉

表紙題字／金周會
装丁・本文デザイン／大石一雄

編集／大田由紀江
校閲／小関恵



青鶴洞 (チョングドン)

青鶴洞とは、古くから朝鮮半島に伝わる理想郷のことです。神仙が青い鶴に乗って遊ぶ地上の楽園、そこは世俗のいかなる混乱とも隔絶した平和な村として、朝鮮民族の心に伝承されてきたユートピアです。

写真Ⅱ 柳銀珪



公益財団法人
韓昌祐・哲文化財団
第八回助成金受贈者
それぞれの道

金潤妃
金煥基
布袋敏博
松谷基和
かながわ国際交流財団
渡邊雄二
平郡達哉
安田純也
生野オモニハツキヨ



人と人の心をつなぐヴァイオリニストに

韓昌祐
特別助成

金潤妃

ニューイングランド音楽院

ヴァイオリニストの夢を追い、
15歳の潤妃は母と共に渡米した。
よき師と仲間を得て、可能性を広げる娘。
身を粉にして働き、支える母。
その熱意と若き才能に、
韓昌祐特別助成が用意された。
「人々と音楽を分かち合いたい」
物語はこれから佳境へと向かう。

文 土方細秩子
写真 押本龍一

金潤妃^{キムユンピ}はとても欲張りだ。ヴァイオリニストとしての将来について語る時も、彼女の望みは大きい。

「オーケストラの一員、コンサート・マスター、室内楽のプロ、ソリスト、私は全てになりたい」

彼女が持っているヴァイオリンだつてそうだ。自分のヴァイオリンは安くてあまり良い音が出ないだから大学に入った年、学内のコンクールに出場して優勝、ご褒美として1年間グアルネリ・デル・ジェスのヴァイオリンを貸与された。貸与期間が終わると今度はロサンゼルスロサンゼルスのコンクールに出場し、同様に優勝賞品としてヴァイオリンの貸与を受けた。彼女が現在使っているのは、この5万ドルの高価なヴァイオリンだ。

ただしその欲は決して利己的なものではない。彼女の目標は「自分の音楽を通して日本、韓国、米国、そのほかの世界中の人々と交流すること、自分の音楽を分かち合うこと」にある。そのためにはまず一流のパフォーマーとして認められる必要がある。だから潤妃は貪欲にならざるを得ない。そのための努力も惜しまない。その姿勢が彼女に大きな運をもたらし、将来への扉を開いたともいえる。

お金はないけど、勉強するならアメリカ

潤妃は1994年、韓国・釜山^{プサン}に生まれた。母親の金聖玉^{キムソンオク}は大学のピアノ科を出て子供相手にピアノ教室を開いていた。父親は日本生まれの韓国人で、幼児の頃の潤妃は父親に習って片言の日本語を話すことができた、という。しかしその記憶は薄い。潤妃が父親と暮らしたのは短い期間だった。

母・聖玉は、潤妃の幼児時代の記憶として印象的なシーンを語る。

「私が子供相手にピアノを教え、生徒が帰ると2歳だった潤妃はピアノの椅子に座ってピアニストの



金潤妃

韓昌祐
特別助成



キム・コンピ©1994年韓国・釜山生まれ。4歳半でヴァイオリンを始め、才能を発揮。釜山芸術中学卒業後2010年に渡米。ロサンゼルス音楽院で学び、ヒューストン交響楽団のフランク・ファンに認められ、個人レッスンを受ける。13年にニューイングランド音楽院に入学、一流のヴァイオリニストを目指して努力を重ねている。

真似をしていた。彼女が文字を覚えたのもピアノの楽譜を通してだった」

4歳半でヴァイオリン教室に通い始めた潤妃だが、当初から他の子供とは違っていた。まだ楽譜を読めないのに、大きな子供が弾く難しい曲を耳で完璧に覚え、家に帰ってからそれを自分で弾くことができた。練習熱心で、他の子供を大きく引き離して上達を続けた。

ただし潤妃は7歳で始めたピアノのほうが本当は好きだった、という。ピアノを本格的にやりたい、と考えていたが、現実的な聖玉にこう諭された。

「ヴァイオリンはオーケストラに入ったりして職業として続けられる。でもピアノで生計を立てるのはとても難しい」

転機となったのは10歳の時。ピアノ、ヴァイオリンの両方でコンクールに出たが、頑張っていたはずのピアノでは賞をもらえず、ヴァイオリンで評価された。そのことが潤妃に「自分はヴァイオリンを続けるべきなのだ」と思わせることになった。

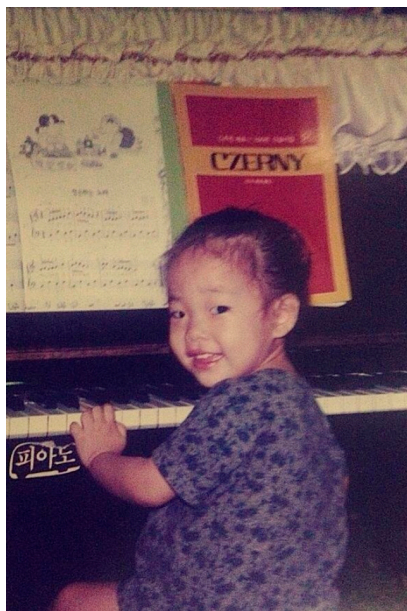
しかし金母娘が住んでいたのは釜山だ。韓国でも一流と呼ばれる音楽学校は首都ソウルに集中している。だから潤妃は「ソウルの学校に進学したい」と考えたが、経済的には厳しかった。同時に潤妃には「いつかアメリカに行つて本格的に音楽を勉強したい」という夢もあった。ソウルからアメリカへ。それはあまりにも遠い夢のように思えた。

それがソウルを通り越していきなりアメリカ、カリフォルニア州に渡ることになった。そこには母聖玉の娘の夢を応援したい、という強い願いがあった。聖玉は潤妃にこう言つた、という。

「ソウルに行つてもお金がかかるのは同じ。いずれアメリカに行きたいのならば今行こう。時間を無駄にしてはいけない」



最愛の母、聖玉と過ごした子供時代。母娘2人だがお互い
支え合い、裕福でなくとも幸せな少女時代だった。



ピアノの前でピアニストを気取る潤
妃。まさに音楽に囲まれて育った幼
少期が潤妃の芯となっている。

こうして15歳でアメリカに渡った潤妃だが、当初は母娘ともに英語は全く話せなかった。その上お金もない。聖玉はベビーシッター、通いの家政婦、韓国料理店のウェイтрレスなど、あらゆる仕事を
して母娘の生活を支えた。夢は世界に通用するヴァイオリニストだから、レッスンも決して安くはな
い。渡米から約1年、母娘は言葉の壁にぶつかり、詐欺師に騙され、経済的に困窮を極めていた。そ
んな折、潤妃はふと韓国では知らない人がいない日本在住の（株）マルハン代表取締役会長韓昌祐に一
通の手紙を投函した。

私の両親は離婚していたので、母は一人で苦勞して生計を立てていました。釜山芸術中学校の時に、実技試験やコンクールが近づくと、まわりの同級生は何回もレッスンを受けていました。中にはソウルまで行ってレッスンを受ける人がいました。私はコンクールの参加費さえまならず、お小遣いを貯めてはコンクールに出場していました。レッスン料も音楽の先生に助けられて、せいぜい週に1回受けるのが精一杯でした。

お金のない時は、本当に何度も音楽を諦めようと思ったことがありました。でも大好きな音楽の道だから、諦めなかったのです。

中学3年の時、将来の進路について悩み抜いた末に、幼い頃からの夢だった米国留学を決めました。それは去年の12月17日、何の準備もせずにヴァイオリン1本だけを持ってお母さんと二人で米国に渡ったのです。

ところが、期待していた米国留学は夢とは裏腹で、言葉の壁にぶつかり、詐欺にも遭って、米国の暮らしは厳しい生活で始まりました。

母は朝7時から夜11時まで食堂で皿洗いをし家計を支え、私は米国で母と一緒に暮らすことができましたことに感謝しながら、真剣に勉強するようになりました。

今年の7月から8月までの1カ月間は、ニューヨークで開かれる音楽キャンプに奨学生として参加できるようになり、そこでオーディションを受けて1カ月間オーケストラのコンサートマスターを務めることができました。

ところが、ある日ニューヨークで、米国の友人たちと楽しく過ごしていた時に、「ビザが切れたのですぐに韓国に帰らなくてはならなくなった！」と母から連絡があつて、母はすぐにでも帰国の準備をしなければならぬし、私は何カ月間もLAで独り暮らしをしなければならなくなりました。

親戚など一人もいない米国で、独りで過ごせるかな…、そんな不安と心配が重なって翌日のレッスン中に意識を失って倒れ、病院の救急室に運ばれたこともありました。

ニューヨークからLAに戻った後、15歳から27歳までの団員で構成されている、米国で最も有名な青少年オーケストラ「American Youth Symphony」のオーディションを受けてパスしました。音楽家の卵300人から応募があつて27人しか合格しない狭き門でした。他には「Colburn School Chamber Orchestra」のコンサートマスターや、「Colburn Honor四重奏」の第一ヴァイオリン奏者として活動しています。

しかし、1日に何回もバスで移動しなければならないこともあつて、夜遅く授業が終わる日は私の代わりに友人にバスに乗ってもらうこともありました。自分の音楽活動を他人に譲るのは悔しいことです。どんなに経済的に苦しくても勝ち抜きたい努力はしていますが、音楽活動を持續させるために、このようなお願いを申し上げることになりました。

幸いにも米国西部の名門音楽大学である「Colburn School Pre-College」から、レッスン費の支援をいただいています。まだ大学課程ではないので高校に通わなくてはなりません。学費の高い芸術高校を諦め、一番学費のかからないカトリック高校を選択しましたが、この高校さえ通い続けることができるのか、どうか。不安と心配ばかりが募ります。

韓昌祐おじさん、いつまでも、いつまでも、お体を大事になさってください。

カムサハムニダ。

2010年11月18日

キム・ユンピ

(翻訳/金 峻培)



한창우 할아버지께 (회장님)

민중화제를 할아버지,

저는 미국 Los Angeles 한 고등학교에 재학중인 만 16세 김윤비입니다.

6살때 문화센터에서 첼로와 바이올린을 시작하였고, 중등학교에 한 콘쿨에서 입상함을 계기로

제가 좋아하는 음악의 길을 선택하게 되었습니다.

부산 고창중학교 영재예천원 수석합창과 교향악 상 당, 부산신곡시제대교향악단 비로동과 오케스트라와

함반, 부산 고문 청학인 오케스트라 수석단원 역임을 맡았고 부산예술대학교 무수중영과

부산예술고등학교 수석합창직을 하였습니다.

저 부모님은 이혼하셨고 어머니를 환경 탓에 어머니 혼자 과잉보호하여 격작 생활을 유지할 수

있었습니다. 예술중학교 재학 중 일때에 주위 친구들은 살기나학과 몸글자가 다가오면

어려버린 데만반과 같이 서둘까지 몰리게끔 배려하는 상황이었던지만 저는 참기바도

저 몸글자 크아 나있고, 레반도 생생함의 도움으로 일주일에 한번 겨작 받을 수 있었습니다.

친동생과 몇번씩 댕나한 실패 사남자 들었지만 제가 너와나도 좋아하는 음악가에게

도저히 포기할 수가 없었습니다.

그러면 중학교 주한년 어느 날 일요일의 진로에 대한 고안글에 어릴때부터 꿈이었던

미국행사를 어렵사리 결정하게 되었습니다. 작년 12월 17일 이튿날 저녁, 동력 업이

유작집 바이올린 하나만 가지고 어머니와 이곳 미국에 오게되었습니다.

하지만 물론 기대와는 달리 전국의 각지에 복악한 사기도 당하고 경제적인 어려움까지

몰래되기 시작되었습니다. 어머니는 아침 기니부터 밤 11시까지 악당의 끝을 앓을 하며

돈을 버텨야하고 저도 마음을 잡고 미국에 어머니와 함께 살수 있는 것 자체가 감사하며

열심하게 노력하고 이번 해 기말부터 모험 한달간 뉴욕에서 열한 한 음악영역에 장학생으로

참여할 수 있게 되었습니다. 그 곳에서 20일을 보고 한달간 오케스트라의 악장역을 맡은

기회가 되어 미국 친구들과 재밌게 지내던 도중 어머니께서 부려 급한편지를 받았는데

어머니의 비자 만을 기간이 다된 거지로 저가 LA 돌아면 어머니는 곧바로 한국을

나타야하고 몇달간 저 혼자 살아가야 한다는 얘기였습니다.

친척 한 분 없는 이혼이며 어떻게 저 혼자 지낼 수 있겠나.. 악악함을 느꼈고

그 마음 날 때는 도중 의사를 일고 반대로 명원음원까지 저의 상황이 별가지고 많았습니다.

LA로 돌아온 후, 15세 2가지의 단편으로 작성되었는 미국에서 가장 유명한 청년 오케스트라

"American Youth Symphony"에 300:27 장편을 들고 합격하여 활동중인

Colburn School Chamber orchestra 악장, Colburn Flavor Quartet 소비올린

주자로 활동중입니다. 그와함께 과정에도 열심히 참여하고 있는 몇몇 친구들끼리 class가

끝나거나 연가 끝나면 2시간 (3시간대)가 있어 친구에게 박연을 하게끔 배려 되어있는

상황도 있지만 어떤 것도 어머니께도 보적중원대 기적할때면 더욱 어려워져 이렇게

도움을 간절드립니다. 이렇게 서브의 명원 동대인 Colburn School Pre-Collegiate 해반비

자원을 받고 있지만 대학교생이 아니기에 고등학교를 다녀야합니다. 여학교 비싼 학비때문에

포기하고 저만 거대한 학비의 한 기들의 고등학교를 선택하였지만 이곳에서도 겨작 다닐 수

있을지 불안 한 이들에게 진정드립니다.

감사드리고, 오케스트라 건강하세요! ☺

2010년 11월 18일

김윤비입니다.

韓昌祐おじさんへ (会長様)

こんにちは、おじさん。

私は米国・ロサンゼルス (LA) の高校に在学中の16歳、キム・ユンビと申します。6歳の頃、釜山の文化センターで趣味としてヴァイオリンを始め、小学校の時にあるコンクールで入賞したのをきっかけに、私は好きな音楽の道を選ぶようになりました。

その後、釜山教育庁所管の英才芸術院を首席で入学して教育監賞を受賞しました。釜山シンフォニーオーケストラ、チェコのヴィルトウオーゾ交響楽団とも共演でき、釜山のキョモン青少年オーケストラでは首席団員、釜山芸術中学校を優秀な成績で卒業して、釜山芸術高等学校を首席で合格した経験があります。

韓会長は潤妃の手紙を読んで「どのような支援ができるか検討しなさい」と経営企画部の担当者に指示を出したという。音楽通の担当者によるリサーチで潤妃と共演した韓国の指揮者、さらに指揮者の弟子が直接潤妃を指導していたことも判明し、潤妃の音楽歴と「粘り強く目標を決めたら必ず初心を貫く性格」という評判も得た。それを韓会長に報告する。

「将来、きつと素晴らしい音楽家になる」

こうして韓昌祐会長の英断で、(株)マルハンは初めて高校生の奨学金制度を立ち上げる。奨学金支援第1号は潤妃になった。高校を卒業するまで(株)マルハンの支援は続く。

潤妃は地元の公立高校に通いながら、放課後は毎日ロサンゼルス市内にあるコルバーン音楽専門学校でレッスンを受けた。それが2年続き、3年目に高名な中国系米国人のヴァイオリニスト、フランク・ファンに師事することになった。しかしファンは当時テキサス州ヒューストン交響楽団のコンサート・マスターだった。そのため潤妃は月に一度、飛行機でヒューストンに通ってレッスンを受け続けた。なぜ、そんなに頑張れたのか。聖玉は当時をこう振り返る。

「世界には私と同じように頑張つて働いて子供を育てている母親は大勢いると思う。潤妃は大事な娘だから、彼女の夢のためにはなんでもしてあげたかった。仕事は重労働で大変だったけれど、潤妃の成長が自分の支えだった」

自分の道を探す、刺激的な日々

そんな努力が実り、クラシック音楽の名門校であるマサチューセッツ州ボストンのニューイングラ



金 潤 妃

韓昌祐
特別助成



ニューイングランド音楽院の練習室の前で。いつも明るく笑顔が絶えないのが潤妃の魅力、と友人らは語る。





カルテットの練習風景。奥で見守るのが講師のニック・キッチン。潤妃にとって刺激となる授業のひとつ。



ボストン交響楽団のコンサートホール前で、友人の久保田なおと。
いつか自分でこの舞台に立つのも目標の一つ。



ンド音楽院（以下NEC）への入学が認められた。しかも特待生として授業料は半額免除、という待遇だった。ただしアメリカの私立大学の学費は年間4万ドル以上、半額でも2万ドルを超える。それに生活費を含めると年間にかかる費用は4万ドルにも上る。必死で娘を支えてきた聖玉にも、それだけの費用を捻出する能力はなかった。

そんな時に目にしたのが、韓昌祐・哲文化財団の助成金制度だった。潤妃は「どうしてもNECで勉強がしたい。だから自分の状況を説明し、助けが必要だ、と助成申請の手紙を書いた」という。

助成金の中でも「韓昌祐特別助成」が認められ、NECへの進学が決まった時は、「信じられないくらい嬉しかった。本当に人生が変わった瞬間だった」

と潤妃は振り返る。韓昌祐特別助成は、申請者のなかで真に独創的かつ優秀で将来確実に有望と認められる者に与えられる助成金のことだ。それが3年前、そして潤妃は順調に大学での精進を重ね、4年生となった。今年夏には卒業だ。

「大学の同級生の中には、学費が続かなくて1年間休学して働いて学費を貯め、また戻ってくる、ということを繰り返している人もいる。そんな中、4年間ヴァイオリンとだけ向き合ってこられた私はとても幸せだと思う」潤妃はそう言つて、目を細めて笑った。

NECでの生活はまさにヴァイオリン漬け。1日に少なくとも6、7時間はヴァイオリンを弾いている。潤妃をボストンに訪ねたのは昨年10月半ばだったが、その日のスケジュールは12時から13時半まで室内楽のレッスン、そこから休む暇もなく14時から16時まで学内オーケストラの練習。夜は家に戻って翌日の個人レッスンのための練習だ。

室内楽は気の合う友人らとカルテットを組んでいて、潤妃は第一ヴァイオリンのポジション。講師

を務めるニック・キッチンが「ボロメオ・ストリング・クアルテット」というプロの楽団に属し、日本やアジアで数々のコンサート活動をこなしている。潤妃にとつては「自分が将来やりたいことの一つを実現している先生だから、とても刺激的」だと言う。

この日はベートーベンの室内楽の練習だったが、その風景は一風変わっていた。キッチンはスクリーンにベートーベンの手書きの楽譜を映し出し、曲が作られて行く過程を学生と一緒に考える、というユニークなレッスンを行う。

「ここ、最初はフォルテとマークして後から消してピアノにしているのが見えるかな？ なぜピアノにしなければならなかったのか、彼の意図を考えながら弾くように」

と指示され、潤妃も熱心に楽譜に見入る。情熱的で早いテンポ、どちらかといえばフォルテのイメージが強いベートーベンだが、だからこそピアノで、とマークされた部分は大事な要素になる。

サントリールホールや第一生命ホールで数多くのコンサートを行ってきたキッチンは、潤妃について「カルテットにはイマジネーションとセンシビリティが大事な要素になるが、彼女はそのどちらも兼ね備えている。また彼女は人の心に響くヴァイオリンの音色を出すことができるが、それは非常に稀有な資質だと思う」

と語る。才能はあるがそれをひけらかすのではなく、周囲と同調して一緒に音楽を作り出すコミュニケーション能力もある。室内楽は潤妃の将来の選択肢として非常に相応しいものになるだろう、とキッチンは考える。

一方、学内オーケストラは12月のコンサートを控え練習に熱が入っていた。ここでは潤妃はコンサート・マスターの位置で、ソロ演奏もある大事な奏者だ。コンサート・マスターは指揮者と一番近くで



金潤妃

韓昌祐
特別助成



オーケストラ練習場を見下ろすバルコニーにて。
大学には本格的な舞台を備えた稽古場がある。



コンサート・マスターとして指揮者と打ち合わせを行う潤妃。その実力は一步抜きん出ている。

コミュニケーションを取りつつ、オーケストラ全体を引つ張って行く重要かつ難しいポジションだが、指揮者の学生からの信頼も厚く、学生の輪の中心で楽しそうにヴァイオリンを弾く潤妃がいた。

翌日は座学の講義の後、潤妃がNECに入る目標だった授業、ボストン交響楽団のコンサート・マスター、マルコム・ロウとの個人レッスンの日だった。ロウは1984年からコンサート・マスターで、小澤征爾おざわ せいじが指揮者を務めた期間も彼の下で演奏していた。

潤妃はロウのレッスンについて「とても率直な先生。厳しいけれど、自分のためになる」と言う。実際レッスン中には「その弾き方は理解できない。何を考えて弾いているのか？」というコメントも聞かれた。教え方は実践的で、何小節かの塊を「1回の弓で弾ききりなさい」といったアドバイスも多い。弓を変えると音の塊に途切れが生じる。作曲家の意図する音楽を作り出すには、そこまで細心の注意を払う必要がある。

一方でロウは決して自分の音楽を押し付けけない。日本の音楽の世界には〇〇門下生という言葉があるが、



アメリカでも「学生の弾き方を見れば、どの教授についているのか分かる」というほど自分のやり方を生徒に実践させる教師は多い。しかしロウは「大事なものは潤妃自身が自分の音楽を見つけ出し、それを深く理解して自分のものにするのだ」と言う。彼女の才能を認め伸ばしたいと考えるが、その将来については「どんなヴァイオリニストになるのかは彼女自身が決めること」と冷静な目で見守っている。

世界へと駆け上がるために

ほぼ休む間もなくヴァイオリンを弾いていて疲れない？と聞くと、

「時々疲れるし、もう辞めてしまいたい、と思うことだってある。でも、どんなに辛い時でも一度ヴァイオリンを弾き始めると、その楽しさにいつの間にか夢中になってしまう。だから辞めることなんてできないと思う」

と潤妃は答えた。

もちろん若い女の子らしい一面もある。NECでの親友は日本人学生、久保田なおだが、彼女とは時々街に出て食事や散策を楽しむこともある。潤妃は「アメリカの食べ物が好き。ハンバーガーは好物」と言う。ただし体重を気にしているのも全部は食べないのだが、痩せているなおが隣で完食するのを見て「不公平！」と笑うお茶目な一面もある。ヴィオラ奏者であるおとは「いつかコンビを組んで韓国と日本に演奏旅行に行きたい」と考えている。

潤妃の今の目標は、卒業後に大学院に進学することだ。テキサスで師事していたファンが昨年からはニューヨーク交響楽団のコンサート・マスターに就任し、ジュリアード音楽院でも教えているため、

ジュリアードへの進学を希望している。1月にはそのオーディションも始まり、練習に余念がない。

「今後の5年間は、とにかくパフォーマーとして認められるためにあらゆることに挑戦したい。チャイコフスキーコンクール、エリザベート王妃国際音楽コンクールといった世界的なコンクールにも出場したい」と潤妃は夢を語る。世界で認められれば、ヴァイオリンを通して人々と交流する、という目標も叶えられる。

母・聖玉は潤妃の将来について「あの子はいとも人々から愛され、周囲からのサポートを受けてきた。だから同じことを人々に返してほしいと思う。経済的に厳しい中で音楽を続ける生徒にとっての希望となり、音楽によって人々の心を癒やす存在になつてほしい」と語る。

潤妃にとって音楽とは、

「自分が持っているものを人々と分かち合うこと。と同時に、自分が持っていないものも分かち合うこと」

なのだと言う。たとえコンクールで優勝できなくても「自分が考える音楽を表現しきつた、と思った時はとても満足する。でも聴いている人たちが私の演奏に満足しなかつたら、それは私に何かが足りていないから。観客はその足りない部分を私に教えてくれる存在」と言う。

まだ22歳の潤妃にとって、世界へと駆け上がるステップは果てしなく思っているかもしれない。しかし私たちはそう遠くない将来、頂点を目指して努力を続ける潤妃の姿を、その演奏を、きつとどこかで目にするだろう。

「エモーションとパワーが私のヴァイオリンの魅力」

と語る力強い演奏が、欲張りな姿勢が、それを可能にしてくれるに違いない。

（文中敬称略）

マルコム・ロウとの充実した個人レッスンを終え、ほっと一息。しかし潤妃の長い1日はまだ終わらない。既に夜6時を過ぎているが、これから再びカルテットの練習に向かう。



コリアンディアス。ポラ文学が映し出す
現代の時代精神



金煥基

東国大学教授 東国大日本文学研究所所長

さまざまな理由から祖国を離れ、世界各地に定住する朝鮮・韓国人Ⅱコリアンディアスポラは、およそ700万人。異国に暮らす困難や葛藤は、それぞれの地で文学作品として結実していく。金煥基は各国を巡り、膨大な資料を収集・分析。『コリアンディアスポラ文学研究』として発表した。個の、あるいは民族のアイデンティティの相克が、グローバル化する世界の実相を浮き彫りにする。

文Ⅱ村尾国土

写真Ⅱ菊地健志

探し当てた幻のアメリカ・コリアン文芸誌

2014年夏、韓国・東国大学教授の金煥基^{キムフンギ}は暑熱のニューヨークを駆けずり回っていた。米国には約170万人の韓国系住民がおり、彼らによる文芸誌が古くから各大都市で発行されている。金はそれらを何年にもわたって収集してきた。地元の韓国系新聞社や韓国コミュニティなどを訪ねて情報を集め、自分の足で探し歩くのだ。

そうして米東部を代表する「ニューヨーク文学」も、1991年の創刊号から最新号まで入手した。だが、その前身である「新大陸」はどこに行っても見つからず、とくに創刊号は幻ともいわれていた。何とか手に入れたいと願った金は韓国文人協会で「1世の彼女なら持つているかもしれない」と教えられた。コリアンタウンの住居を訪ねると、77歳で独り暮らしの老女が迎えてくれ、「残っているかもしれないけど、あなたが探して」と書棚に案内された。祈るような気持ちで探し、古びて薄い一冊の雑誌を見つけた。表紙に「新大陸創刊号」と韓国語で書かれていた。85年発行のその文芸誌に、老女は自作の詩を発表していた。遠い祖国への思いがこめられた詩を読む金に、彼女は「私が亡くなる時、これも捨てられるかもしれないから、差し上げます」と微笑を浮かべながら言った。

東国大学日文学科教授の金は韓国日本文学会会長も務める日本文学研究の重鎮^{じゅうしん}だが、十数年来提唱しているのが「コリアンディアスポラ文学」だ。ディアスポラとはもともと、祖国を持たず各地を流浪するユダヤ民族を指すが、その概念が世界規模に広がり、自主的に、あるいは強制されて祖国を離れ、他国で暮らす人たちが全般を意味するようになった。それらディアスポラのうち、ユダヤ人を除い



金 煥 基



キム・ファンギ◎1964年生まれ。韓国・東国大学校日語日文科卒業。日本・大正大学大学院文学研究科修士・博士課程修了。現在、東国大学校教授、東国大日本学研究所所長、韓国日文学会会長などを務める。在外コリアン文学研究の第一人者として知られる。



左側が「ニューヨーク文学」、右側が前身の「新大陸」創刊号。苦勞の末に入手した。

ニューヨーク、ワシントン、シカゴ、ダラスの各都市で発行されているコリアン文芸誌。





て世界で最も多いのが朝鮮・韓国人である。その数約700万人、韓国の現在の人口の実に14%にも及ぶ。

異国で生活するディアスポラは、様々な悩みや葛藤^{かつどう}をかかえつつ、自己アイデンティティの問題にぶつかる。その思いは文学表現となり、世界各地にディアスポラ文学が生まれた。最大規模のコリアンディアスポラ文学研究は、グローバル化した現在、世界的にも重要な意義を持つ。

金は各地を訪ね資料を収集する計画を立てた。資金・時間・労力のどれもが不可欠な計画だが、大学の休暇を利用してはこつこつと実行してきた。そして今や「世界のコリアン文学研究の第一人者」といわれるようになつた。その歩みをたどってみる。

引き止める家族を振り切つて日本へ

金は慶尚北道聞慶市^{キョンサンブクドモンギョン}の山奥の農家に、8人兄弟の6番目として生まれた。兄たちはみな中学を出て働いたが、成績優秀だった煥基少年は浦項製鉄所^{ポハン}経営の理系の高校に進学した。だが、「人文系を学びたくて」中退、ソウルの工場で働きながら検定試験を受け、高校卒の資格を得て東国大学に入学した。努力の人なのである。

日本文学学科を選んだのは父親の影響だった。戦前の十数年間、九州・博多で働いた父に「日本の町はきれいで、人も親切」と繰り返し聞かされ、日本への好奇心がつつた。文学を学ぶにはまず日本語を習得する必要がある。授業以外にも、同じサークルにいた在日コリアン留学生と親しくなり、金は日本語で、相手は韓国語で語り合った。

こうして言葉をマスターしたが、卒業時に面白いエピソードがある。日本語能力を買われて韓国政府の公務員試験に合格した。安全企画部、いわゆるKCIAだ。一方、東国大学が姉妹校である日本の大学院へ派遣する試験も受けており、そちらも合格が決まった。金は日本留学を選び、KCIAを辞めた。日本へ発つ日、空港で母や兄たちに「今なら安定した公務員に戻れる。飛行機に乗るな」と引き止められたが、金青年はそれを振り切った。

「日本には親戚も知人もいませんでしたが、とにかく一度行ってみたかったです。今思えば、ディアスポラの心境ですね」

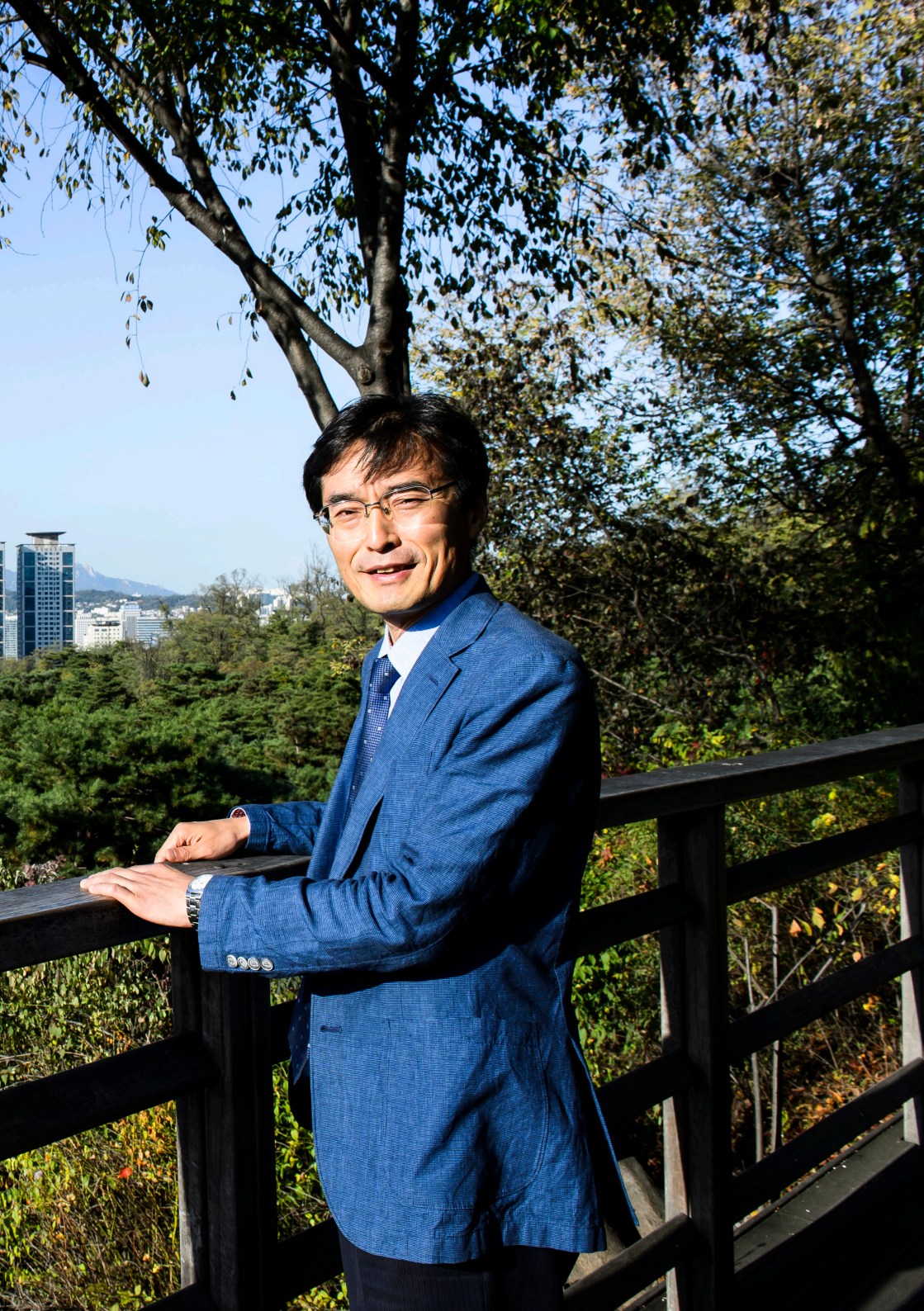
大正大学大学院に入学。自炊生活をしながら日本文学漬けの日々が始まった。志賀直哉や夏目漱石などの講義を受けたが、金が心惹かれたのは山本有三^{やまもとゆうぞう}だった。人道主義的な山本作品が、苦勞しながら努力してきた自分の過去と重なったのだ。一方、民団支部でアルバイトしていたとき、金鶴永^{キムハング}の小説を読んだ。在日コリアン作家との初の出会いである。感動したが、研究の対象にはならなかった。

日本で5年間学び、山本有三研究で博士号を得て帰国。日本学研究所研究員や東国大学時間講師として働きながら、山本や志賀についての論文を発表したが、ほとんど反響がなかった。「韓国と関連のある研究をしなければ」と考えた金が思い出したのが、金鶴永の作品だった。当時の韓国で在日コリアン文学研究者はごく少数しかいなかった。

在日作家の研究を始め、長老格の金達寿^{キムダルス}論など次々に論文を発表した。2000年代初め、高麗^{コリョ}大学教授が『コリアンディアスポラ』と題する本を出版した。韓国でのディアスポラ概念の初導入である。これに触発された金は「異国の底辺で差別を受けながら生き、自らのアイデンティティを問うように書いてきた在日作家こそ、ディアスポラの名にふさわしい」と考え、06年に著書『在日ディアス



週1回の大学院生対象のゼミ。「ディアスポラとしてのコリアン」をテーマに発表と検討。すべて日本語による授業。





大学敷地内の屋上庭園。「ソウル市街が一望できます」。
変化する町並みを見ながら
ディアスポラに思いを馳せる。

ポラ文学』を刊行した。つまり、「コリアンディアスポラ」と「文学」を初めてつなげたのだ。

しかし、在日にとどまらなかった。国際シンポジウムに招かれるようになり、コリアンディアスポラに関する金の視野がさらに広がっていった。旧ソ連圏に移住した高麗人、中国の朝鮮族、カナダ・アメリカの北米、中南米、そして日本と世界各地に散らばっており、それぞれが韓国の近現代史と深く関わっている。植民地期に徴用されたり、貧しさから逃れようと日本へ渡った人たち、スターリン政権下で中央アジアへ強制移住された高麗人。1960年代には朴正熙政権が外貨獲得のため移民政策を進め、農業移民が南米各国に渡り、ドイツへは若い炭鉱夫や看護婦が送られた。彼らの中にはカナダやアメリカへ再移住する者も多数いた。また朝鮮戦争に参加した米軍将兵と結婚した女性らの渡米、さらにアメリカンドリームを求めて家族ぐるみで移住した人もいる。

背景がそれぞれ異なる海外韓国人たちは、移住先で韓国語の文芸誌を作った。アメリカだけでもニューヨーク、ワシントン、シカゴ、ロサンゼルス、ダラスと各都市に及ぶ。2世、3世と世代が進むにつれ、韓国語を知らず、最初から英語で書くコリアンが増えた。その中からアメリカのリ・チャンレのようにヘミングウェイ賞を受け、ノーベル文学賞の候補にあげられる有名作家も現れた。日本でも李恢成^{りかいせい}をはじめ4名が芥川賞受賞、日本国籍に帰化したコリアン作家4名が直木賞と、在日文学が確固たる位置を占めるようになった。

まさに多種多様である。それらコリアンディアスポラ文学の全体像をとらえる。そのために資料を収集する。途方もなく壮大な計画に挑んだのが金煥基なのである。

北米コリアン・在日コリアン文学を比較研究



2013年、金は新たな計画を立てた。これまでの資料収集をさらに進めるとともに、カナダ・アメリカの北米地域と日本のコリアン文学に焦点を絞り、草創期から現在にいたるまでの流れを比較分析しようという試みである。各地を訪ねる資金を得るため、かつて南米での共同調査を行った法政大学教授で文芸評論家の川村^{かわむらみ}湊らに勧められ、(公財)韓昌祐・哲文化財団に研究助成を申請、認められた。

大学の夏休みや冬休みを利用し、2年間にわたって各地へ足を運んだ。冒頭のニューヨーク行きもその一環で、西部のロサンゼルス、カナダへも赴いた。カナダでは、鍼夫や看護婦としてドイツへ送られ再移住してきたコリアンたちの、これまで未発掘だった文集などを探し出した。日本へは毎年のように訪れていたが、大阪・東京を中心にさらに資料収集を進めた。すべて金一人の調査行である。「スケジュールは全部こなし、収集予定の70%を達成しました。現地コリアンの意見の対立などの苦勞もありましたが、得たものが大きくそこから新しい視点が生まれました」

2016年夏、金は調査に基づく長文の論文「コリアンディアスポラ文学研究」をまとめた。最初にコリアンディアスポラ文学の地形図を紹介し、ついでカナダ・アメリカ・日本におけるコリアン文学の形成過程や展開様相を詳細にたどり、最後に北米地域・在日双方の比較考察が行われている。論文全体を通じて、移住先で差別や困窮に苦しみ、祖国への複雑な思いをかかえながらアイデンティティを自らに問う、ディアスポラの多様な姿が浮き彫りになってくる。

韓国の日本学会に発表予定のこの論文で金が提示しているのが「グローカリゼーション」である。これはグローバリゼーション(世界化)とローカリゼーション(地域化)の合成語で、近年になって

注目されている新概念だ。世界のコリアンディアスポラ文学にとって、これがキーワードになると金
は語る。

「グローバル化している世界の中で、自分の武器、アイデンティティを持たなければいけません。そ
のアイデンティティはローカリズムです。在日であれ在米であれ、コリアンとして力になるものを悩
みこだわって見つけ、その力を活かせば世界に通じる価値、普遍性につながるはずです」

韓国は金泳三^{キムヨンサム}政権時代、少子化を見込み移民受け入れ政策をとった。その結果、現在では国内の多
民族化・多文化化が急速に進んでいる。異なる民族間の混種化は在外コリアン共通の現象だが、同じ
課題をかかえる韓国本国にとつても、コリアンディアスポラの生き方は合わせ鏡になっている。金の
強調するグローカリゼーションは、文学のみならず韓国の将来をも左右するキーワードになるかもし
れない。

大長編『火山島』を全訳し、日韓で話題に

こうした地道な調査研究の傍ら、金煥基は別の大きな仕事も成し遂げている。在日作家・金石範^{キムソクボム}著
『火山島』の翻訳である。1948年4月3日、米軍政下の単独選挙^{チュンジュド}に対して、済州島^{済州島}で勃発した武
装蜂起^{ボウボウ}、いわゆる「四・三事件」を題材にした小説『火山島』は執筆期間20年、原稿用紙1万3千枚
にも及ぶ大長編だが、金はその韓国語全訳に挑んだ。

多忙な日々の合間をぬっての翻訳作業を始めて7年、ようやく作業を終えた。初校のゲラを携えた
金は渡日し、著者の金石範を訪ねた。石範は開口一番、「こんなに大量のゲラを持つてくるバカは世



金 煥 基



韓国語訳した『火山島』全
12巻。新聞や雑誌に取り
上げられ話題になり、翻訳
本として異例の重版に。



2006年刊行の金煥基著
『在日ディアスポラ文学』。
在日作家とディアスポラを
初めて結びつけ評価された。

界に君しかない」と言った。満面の笑顔だった。1枚ずつチェックし、誤りを指摘してくれた。2015年10月、『火山島』全訳12巻がまとめてソウルで刊行された。韓国の新聞が書評で大きく取り上げるなど評判になり、日本でも話題を呼んだ。

その数カ月後、金は東京の石範を訪れた。『火山島』の韓国語訳は私の夢だった。君とは飲まなければいけない」と石範は言い、上野の韓国料理店に誘った。90歳の石範は語り続け、2人は朝まで飲み明かした。それはディアスポラ作家と研究者との、熱く至福の時間だったのだろう。

取材の最後、金は大学敷地内にある日本学研究所へ案内してくれた。万葉集を全訳した韓国の碩学^{せきがく}が設立したこの研究所で、金は5年前から所長を務めている。日本関連の書籍がぎっしり並ぶ書棚の前でこう語った。

「世界に散らばったコリアンたちの本や雑誌は貴重な財産です。それらを一カ所に集めた施設は、まだどこにもありません。在外コリアンの世代交代が進み、資料もなくなりつつある今こそ、それらを集める作業に取りかかるべきなのです。将来、この研究所をベースに、世界コリアンディアスポラの図書館を作る、それが私の夢なんです」

刻苦勉励^{こつくべんれい}、努力のこの人なら、いつか夢をかなえるに違いないと思った。

（文中敬称略）



研究室の机の上に置いた少年像の
人形。「あどけない笑顔を見
ると心が癒やされます」。頭を
なでてからパソコンに向かう。

近代朝鮮を胚胎する
朝鮮人留学生を総合的に研究



布袋敏博

早稲田大学国際教養学部教授

1910年の日韓併合前、

日本に学ぶ大韓帝国の留学生はおよそ1000人。

学問を通して得た知識を母国に還元し、

独立を守り、近代化を遂げようとの自負心を抱いていた渡日である。

が、彼らは植民地化という歴史の中で翻弄され続けることになった

留学生の活動を研究する布袋敏博は、

中でも数奇な運命をたどった朝鮮近代文学の祖・李光洙に着目する。

それは今なお揺れる日韓関係を映す鏡となるのかもしれない。

文 西所正道

写真 渡辺 誠

日本が仕掛けた朝鮮開国の幕開け

日本における最初の近代小説といえ、ふたばていしめい二葉亭四迷『浮雲』うきぐもといわれるが、では、朝鮮近代文学で『浮雲』に相当する小説とは何だろうか？

朝鮮近代文学に詳しい早稲田大学国際教養学部教授・布袋敏博はていとしひろによれば、李光洙イ・グン・スの『無情』ム・ジンだといふ。

李光洙は1905年に留学のため来日。長編小説『無情』を、朝鮮総督府機関誌「毎日申報」に連載したのは17年、早稲田大学に在学中であった。二葉亭四迷が言文一致の新しい文体にしたのと同じように、李光洙も漢文崩しのような文体から、近代的なそれへと変革した。

「朝鮮近代文学の祖」でありながら、三・一独立運動後には大韓民国臨時政府樹立に関わったにもかかわらず、解放後は「親日」、いわば「売国奴」よばわりされるといふ数奇な人生を歩む。

程度の差はあれ、当時の留学生の多くは、歴史に翻弄ほんろうされ続けたのである。

近代、日本に渡った朝鮮人留学生たちの背景には何があつたのだろう。それについて詳細に研究を続けている布袋に、朝鮮人学徒の歴史を聞くと、いわゆる「黒船来航」から説明を始めた。

「ペリー来航によって江戸幕府は無理やり鎖国を解かれ、福沢諭吉などが咸臨丸えんりんまるでアメリカに派遣されたことは、ご存じのとおりです。実はその後日本は、アメリカにやられたことを、そのまま朝鮮王朝に対してしているのです。明治政府が、日米和親条約という不平等条約を締結させられたように、朝鮮王朝を無理やり開国させ、日朝修好条規を締結する。1881年には、朝鮮は60数名の紳士遊覧



ほてい・としひろ◎1952年生まれ。78年、明治大学卒業。労働法令協会を経て、90年からソウル大学校人文大学国語国文科修士課程、博士課程。99年、早稲田大学などで非常勤講師を務めた後、2003年、早稲田大学語学教育研究所教授、04年より現職。大村益夫との共著で『近代朝鮮文学日本語作品集』（全6巻）など。

団を日本に派遣します。その中の3人はそのまま日本に留まり、うち2人は慶應義塾で、1人は中村正直の私塾・同人社で学びます。この3人が朝鮮史上最初の海外留学生となるわけです」
当時、朝鮮には「開化党」という勢力があった。独立を守るためには、近代的改革が不可欠だと考え、そのモデルの一つとして、明治維新後の日本における独立と開化政策を学ぶべきだ——そう考えた若者たちは続々と日本へ渡ってきたのである。

しかし1884年、そんな動きに水を差す事件が起きる。開化党が仕掛けたクーデター「甲申政変」が失敗に終わるのである。福沢はそれを受けて「脱亜論」を唱える。

「脱亜論というのは甲申政変を見て、朝鮮に見込みはない、朝鮮を切り捨てよという福沢の主張なのです。『脱亜入欧』とセツトで捉えられがちですが、違います。脱亜論に朝鮮人留学生が憤激したのと言うまでもありません。多くの学生が母国へ帰ったのですが、彼らを待ち構えていたのは保守化した母国でした。そして無惨にも多くの留学生が処刑されてしまうのです」

その後、一時日本への留学熱は衰えるが、日清戦争の帰趨がつく1895年に、日本と朝鮮、清国の3国で留学生に関する取り決めがなされ、留学が再開。1905年に日露戦争に勝利すると、さらに日本への留学生は増えた。

かつて慶應義塾一辺倒だった留学先は、前記の脱亜論により、趣を変えた。慶應は数を減らし、代わって早稲田大学が増加。明治大学や日本大学への入学者も増えた。1910年の日韓併合前の、朝鮮人留学生の数は、一説によると1000人ぐらいはいったともいわれる。

「日韓併合前、留学生はみな、心のどこかに国の独立のために勉強をするのだという思いを抱いていました。学問を通して得た知識などは、すべて国に還元するという自負心をもっていたわけです。し



韓国に早稲田の学生を連れて行くと大歓迎されるという。サムスンの2代目
李健熙イ・ゴンヒはじめ各界トップに早稲田出身者が多いからだ。

かし日本の植民地になり、自分たちは責任を果たせなかったわけです」

植民地化の流れを止められなかったのは、留学生たちが、各学校ごとにグループが分かれ、一致団結できなかったからだと反省。1912年、大同団結を果たす。「東京学生会」を結成し、2年後の14年、雑誌「まごのひかり学之光」を創刊するのである。

「日本から本国へ新しい知識を発信しようという意識で雑誌がつくられていました。朝鮮総督府の準機関誌ですから、日本側の検閲けんぎょうがあり制限もあったのですが、1920年代に入るまで、朝鮮にそうした媒体はなかったので、新しい知識の窓口として機能していました。発行に関わる学生も自負心を持って編集していました。10年代までの留学生のこうした活動は特筆すべきです」

啓蒙家・李光洙の葛藤

実は、「学之光」には、一人の「スター留学生」が寄稿していた。前記した李光洙である。

すでに彼の略歴については簡単に触れたが、1905年に来日し、日本の中学校を経て07年に明治学院普通学部に入編、日韓併合前に本国に帰り、ロシアを放浪したりしたのち、15年に再来日し、早稲田大学高等予科を経て、同大学文学部哲学科に入学する。2年後、前述の通り、「毎日申報」に代表作『無情』の連載を始めるのである。

実はこの小説、ストーリー自体は若者の三角関係なのだが、その物語の裏には、言論の自由が許されない状況の中で、日本によって行われていた武力による「武断政治」に対する不平や、民族の憧憬どうけいが、文学の形を借りて、さりげなく描かれていた。



布袋によれば、「李光洙は、当局とはつかず離れずという姿勢で、どちらかといえば緊張した関係を保っていた」という。

「李光洙は、まぎれもなく文学者なのですが、本人は啓蒙家^{けいもうか}といっていました。つまり民族全体を引き上げる義務を自分が負っているという意識を持っていたのです」

つまり、機関誌に書くことで、総督府側に巻き込まれながらも、我が方に利用するという活動家、啓蒙家の一面が垣間見える。

李光洙は『無情』の連載終了後、あまり間を置かず、朝鮮半島を歩いてルポする『朝鮮半島五道踏破』を「毎日申報」に連載し始める。当局の方からすれば、人気作家としての李光洙に、朝鮮総督府の朝鮮半島統治はうまくいっているということを書かせたかったのであろうが、彼はそれに利用されることのないような筆運びだったという。

19年、日本の武断政治に反対する三・一独立運動が勃発^{はつぱつ}するや、李光洙はそれに参画し、大韓民国臨時政府の内務総長（内相）・安昌浩^{アンチャホ}を手伝って独立計画を作成するなど、本国のために活躍する。しかしその後、彼が深く関係する修養同友会によって、人生は変転^{へんてん}を遂げていく。

この会は「いますぐ独立しようとしても武力で日本にかなわない。したがって全民族が人格形成をして人間を高めた上で、朝鮮の独立を目指す」という目的の団体だが、当局から目をつけられるようになる。ついに37年、逮捕される。

「この逮捕は当局のでっち上げだったわけですが、その後に彼がとる行動は、裁判を有利にしようという意図が感じられます」

それまで、当局とはときに対峙^{たいじ}しながらも、つかず離れずのスタンスだった李光洙だが、逮捕以降、

若き日、クラシック音楽やフランス文学の研究をしたかったが、仏文学者・二宮敬に「食えないよ」と言われ断念し就職。





「転向」を余儀なくされる。

布袋によれば転向には2パターンあり、転向したように見せかける「偽装転向」と、転向したことを周囲に認めさせるために、極端な行動をとるパターンがあるという。後者は、たとえば左翼だった人が、「ウルトラ右翼」のような過激な言動をするパターンを指すが、李光洙はそれにやや近いのではないかという。

それをうかがわせるいくつかのエピソードがある。

たとえば創氏改名、1939年に交付され運用が始まるのは翌40年2月なのだが、李光洙の反応は早かった。39年12月20日付「京城日報」に、こんな見出しが躍る。

〈半島文壇の大御所 李光洙さん氏へ名乗り 一家揃って「香山」姓へ〉

李光洙は、香山光郎と名乗ることになる。

40年に書いた『内鮮一体随想録』にも、スタンスの変化がみてとれる。

「内鮮一体とは、日本と朝鮮は一つだということです。日本がそれを求めていることを逆手にとり、だから朝鮮人も日本人と一緒に扱ってくれ」という主張を盛り込んでいます。また別の文章では、自分たちはこれまで二等国民として扱われてきたけれども、たとえば志願兵という制度のもとでは、われわれも日本人と同じ一等国民になれる。だから志願兵に喜んで応じるから、約束通り一等国民として扱ってくれ」と書いています

こんなエピソードもある。

植民地末期に、大東亜文学者大会の集会が東京で開かれた。大東亜共栄圏を文学的に実現するため

に結成された会だが、そこに出席した李光洙は、小林秀雄を見つけると、「私は、天皇を信奉して日



本人になる」と大まじめに言った。しかし小林からはまったく反応がなかったという。

小林も咄嗟とっさにどう言葉返しているのか、考えつかなかった可能性が高いが、反応してくれなかったことに李光洙は落胆らくたんする。

「天皇陛下萬歳」と言っている日本人以上に、萬歳の姿勢を強く示しているようにも受け取れます。李光洙の場合、ある程度計算をしながら発言しているようにもみえますが、実はかなり本気で言っている。基本的には非常に真面目な性格だったようです。ですからその胸中を察すると、非常に複雑で、彼の書いた文章を読むと、胸が痛みます」

文学から見る朝鮮人留学生の心

布袋の朝鮮人留学生に関する研究はいくつかあるが、文学的な切り口から分析していくところが興味深い。それについて布袋は、

「韓国人の心の奥底に入るには文学がふさわしいと思ったのです」と言う。

それは布袋がアカデミズムの世界に入った経緯とも関係する。

布袋はもともと、クラシック音楽やフランス文学に興味があり、それにまつわる研究を手がけたかった。だが、ある人物から「フランス文学では食えないよ」と言われ、いったん出版社に就職し編集の仕事に10年以上携わった。

仕事柄、朝鮮関係の研究者と知遇ちぐうを得る中で、次第に朝鮮問題に興味を持つようになり、36歳でソ

ウル大学に留学する。

師事したのは、韓国における近代文学研究の第一人者・金允植^{キムユンシク}ソウル大学教授（当時）現同名誉教授）。偶然、最初に購入した研究書が金の書いた『李光洙とその時代』だったという縁もあった。

修士課程2年、博士課程3年を終えて、1999年に帰国、早稲田大学で教鞭^{キョウベン}を執ることになる。

布袋は、(財)韓哲文化財団（当時）が発行していた『青丘学術論集』（19集、2001年発行）の中にも寄稿したことがある。金史良^{キムサリョク}という芥川賞にもノミネートされるほどの作家について、それまでほとんど手つかずだった「解放（1945年）以降の作品研究」を行った。

実は、同学術論集用にもう一つの論文を準備していたという。それは植民地時代に、日本語作品を書いて活動していた朝鮮人作家が、解放後どうなったかという内容である。

調べてみると、行方知れずになっている作家が少なくないことに気付いた。なかには、日本語が使えるというだけで、作家としての実力が足りない人もいて、解放後は活躍の場を失う人もいた。日本語の作品を書いていたというだけで、後ろ指を差されたりもした。そういう人たちの行方を追うと、北朝鮮に行っているケースが見えてきた。

「当時は調べきれずに完成しませんでした、いずれは『北朝鮮文壇形成に関する研究』という形でまとめたと思っています」

実は、李光洙も朝鮮戦争のさなか、北朝鮮へと連行されている。

解放後、彼は社会主義に反対の立場であったので、大韓民国を支持するが、親日派であったことが悪い影響を及ぼす。

1949年から始まる反民族行為処罰法による対象者の検挙が始まると、李光洙も処罰を受けるこ



研究室の書棚には書籍・雑誌がぎっしり。「いただいた助成金は、主に資料と調査に使わせていただきました」

とになった。彼は尋問で、「私は民族のために親日をしました」と反論するが、聞き入れられず収監。のちに健康を理由に保釈される（のちに不起訴確定）が、朝鮮戦争が運命をまた違った方向に変えていく。

北朝鮮軍がソウルを占領したとき、自宅で寝ているところを、同軍によって連行され、消息が途絶えてしまう。墓も北朝鮮にあるといわれる。

ことほどさように、朝鮮人留学生のその後の人生は多岐にわたる。未解明な部分も多いが、今後、布袋によって明らかになるだろう。

参考文献 『李光洙——韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』

（波田野節子著 中公新書 2015年）



書棚から溢れた資料が部屋全体に増殖。体を斜めにして歩くのがやっと。奥にある机の一角にかろうじて執筆できる空間がある。

松谷基和

東北学院大学教養学部言語文化学科准教授

松谷基和は、朝鮮半島の近現代史を専門とする気鋭の歴史学者だ。

常識や通説を疑う。実証に徹して人物を追う。

近年の研究に、明治期のキリスト者で

朝鮮伝道に尽力した押川方義の論考がある。

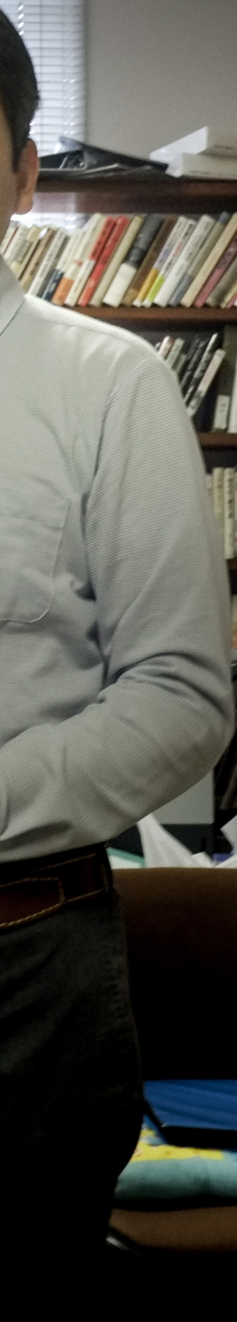
『日帝の手先』と通称された男は

朝鮮の人と文化に心を寄せる

真摯な教育者であった。

文 村尾国士

写真 渡辺 誠



「びねくれ研究者」が問い直す
日本と朝鮮の近現代史



常識や通説を疑う、ひねくれ研究者、

東アジア学博士にして東北学院大学准教授・松谷基和^{まつたもとかず}。20、30歳代の経歴を見ると、国際基督教大学（以下ICU）卒→三菱商事勤務→東京大学大学院修士課程→ハーバード大学大学院博士課程と、絵に描いたようなエリートコースである。近寄りがたい学者のイメージを抱いて対面した松谷は、「どれも成り行きです。僕はひねくれ者ですから」と、よく通る声で言い、快活な笑顔を見せた。

キリスト教を軸にした朝鮮半島の近現代史を専門にする松谷は、これまで既存のさまざまな歴史通説に対し、独自の検証のもと異議を唱えてきた。周囲の研究者から嫌われることもあるが「大好きなんです、嫌われるのが」と言うのだから、まさに「ひねくれ者」だが、根底には反骨精神がうかがえる。それを如実に現すエピソードが若い頃にある。

ICU3年生の夏から1年間、松谷は韓国・延世大学^{ヨンセ}に留学した。「初めての韓国が肌に合い」勉強に励んでいた松谷青年は、4年生の春、日本の友人から電話をもらった。就職先が決まったと告げる友人に啞然とした。家族や親戚に会社員がほとんどおらず、実情に疎^{うと}かった松谷は、就職活動は卒業後に始めるものと思い込んでいたのだ。友人は「3年生の時から始めて4年生になった時には決まる。これが一般の流れだよ。今から始めたのでは絶対に不可能」と断言した。

普通ならめげるところだが、「そんな理不尽なことがあるか」と反骨心が頭をもたげた。延世大学のコンピュータ室で、英語で社員募集を行っている日本企業を検索、3社に手紙を添えて履歴書を送った。夏に帰国、少人数の入社試験を受けて合格したのが三菱商事だった。だが、この名門商社を



まつたに・もとかず©1975年生まれ。国際基督教大学教養学部人文科学科卒業。東京大学大学院修士課程、ハーバード大学大学院博士課程修了。早稲田大学講師、東北大学准教授を経て、現在東北学院大学准教授。キリスト教を軸にした朝鮮半島の近現代史が専門で論文多数。歴史通説に異を唱える気鋭の研究者として知られる。

松谷は2年足らずで辞めてしまう。その理由を「就活の常識に反発してたまたま入社できたものの、何の専門性も持たず、ただ言われたことをこなすだけの自分が悲しくなった」と語る。

常識や通説を常に疑い、それを実証的にくつがえす。歴史研究者としてこの基本姿勢を貫く松谷基和は2013年、(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成を得て、東北学院大学創立者・押川方義研究^{おしかわまさよし}に取り組んだ。

「押川については『クリスチャンでありながら政治に関わり、日本帝国主義の手先となつて動いた』という通説がありました、本当にそうだったのかを疑つたわけです」

後述するように通説に修正を迫る発見をするのだが、まずはそこに至るまでの、この「ひねくれ研究者」の足跡をたどってみたい。

志高きクリスチャン家庭に生まれ育つ

1975年、福島市に生まれた。父親がプロテスタント牧師であり、開拓伝道に携わっていた。これは教会のない地域で自ら伝道しながら拠点を作るもので、自宅を集会所として使っていた。若い頃にイギリスで神学を修めた父と英語教師の経験を持つ母が開く英語塾で生計を立て、傍ら、アジアからの留学生のために自宅の一部を宿舎にするなど、志の高さがうかがえる家庭であった。

聖書と英語がごく身近にある環境のもと、幼児洗礼を受けた松谷は高校3年時に信仰告白を行いクリスチャンになっているが、韓国との接点もこの少年期にあった。自宅の宿舎に韓国人留学生がおり、また父から、先の戦争で日本が韓国をはじめアジア諸国に与えた深刻な被害について十分な謝罪と反



省を行っていないと教えられた。歴史問題に関心が向いた松谷少年は「将来はまず韓国に渡って現地のことを知らなくては」と思い至る。

東京のＩＣＵ進学。実家が裕福ではないため学費は奨学金に頼り、さまざまなアルバイトで生活費を稼いだ。韓国語を学ぶため自費で語学学校にも通い、延世大学との交換留学生になった。渡韓前、松谷は韓国関連の本を貪り読んでいた。日本の戦争責任問題や韓国の民主化闘争が書かれており、松谷青年も韓国のキリスト教は進歩的なりべラル勢力が多いのだろうという思いを抱いていた。

「それがだいぶ違うことに気づいたんです。日本で流されている韓国情報^{かたよ}は政治的に偏りすぎ、それが大いなる誤解を生んでいると、実際に行ってみてわかったわけです」

通説を疑う最初の経験である。また延世大学には、韓国系アメリカ人や、若い頃養子としてヨーロッパに渡った韓国系留学生が数多く、大学寮での松谷のルームメイトもオランダ人家庭に育った韓国系オランダ人だった。

「韓国にとって外国は日本だけじゃない。そんな当たり前のことが実感としてわかり、広い視野を持たなければ韓国全体を理解できないことも学びましたね」

充実した留学生生活を送っていた松谷青年に降ってわいたのが前述の就活騒動であった。三菱商事を辞めた松谷は、「何か専門性を持たなくては」と考え、東大大学院を受験。合格したが、研究者としてやっていこうという強い意思はまだなかった。「南朝鮮における米軍政の確立と宗教政策」のテーマで論文を書き修士号を得たが、政治史のみならず、幅広く社会史や宗教史を学びたいとの希望が強まった。折よくハーバード大から客員教授として東大で教鞭^{きょうべん}を取っていた歴史学教授に「君の研究は面白い。アメリカでやってみたら」とアドバイスされた。そこでハーバード大大学院に応募すると、

これも合格。

文字通り成り行き任せだが、アメリカでの研究が水に合った。狭く深いところを研究する日本とは異なり、広く多様な視点で研究を進めるのがアメリカ。松谷は堪能な英語と韓国語を駆使して膨大な資料に当たり、19世紀末から1920年代までの韓国で、アメリカ宣教師がどうキリスト教を布教していったのかを研究した。5年後に帰国し、早稲田大学助手（のち講師）として働きながら博士論文をまとめ、ハーバード大学の博士号を得た。

大震災を機に「東北での研究」を目指す

博士論文執筆の一方、松谷は日本で歴史論文を発表し始めた。これがどれも、それまでの通説に異を唱えるものばかりなのだ。

たとえば韓国でなぜキリスト教が普及していったかについては諸説があったが、松谷は一つずつ取り上げては矛盾を指摘した。布教法についても、アメリカ人宣教師による方式が成功したという定説があったが、実際はそうでなかった具体例をあげ反論。さらに日韓関係においても「植民地期にキリスト教が民族運動に参加することで、韓国のナショナリズムと一体となつて普及した」とする通説に異論を唱えた。どれも通説を疑う持ち前の反骨精神から出発し、アメリカで培った幅広く多様な研究視点から生まれたものだ。

こうして気鋭の歴史研究者として知られ始めた松谷は、北海道大学（現・立教大学）教授で政治学・歴史学者の松浦正孝が主宰していた「アジア主義研究会」に誘われた。この研究会参加によつて松谷



異論をととなえ反駁を受けると「手応えを感じますね、いい線を行ってたんだなって」。熱い講義で学生の人気も高い。





場所 胡同

로
엔

이 주소로 보아서
여행을 갑니다.

장년에 걸친 활동

나

韓国人同僚教師と學生に韓国語の補講。「私の留學時に比べると、日本の學生の韓国への関心は革命的に変化」



福島県いわき市から仙台の大学まで通う日々。大震災からの復興
途上にある郷里への思いを胸に刻んで研究に励む。



の中に「明治期のアジア主義とキリスト教」というテーマが芽生えた。草創期の日本人クリスチャンたちを研究した松谷は、松浦編著『アジア主義は何を語るのか』（ミネルヴァ書房）に論文を寄せた。ここに「押川方義」の名が初めて登場する。

その論文を書いてまもなく東日本大震災が発生。壊滅的な被害を受けた東北、とりわけ原発事故で未曾有の被害を受け、放射能汚染による風評や社会的差別に直面した故郷福島の状態を前に、松谷は「福島人である自分は、できるだけ故郷に近い東北で研究したい」と心に決め、仙台の東北大学准教授として移った。仙台には押川が創立した東北学院大学がある。明治期クリスチャンの代表的人物の一人であり、朝鮮にも関わった押川をより身近に感じたが、既存の研究によれば「押川の朝鮮関与は、日本帝国の対外膨張に触発されたものであり、日本の朝鮮支配と表裏一体で展開していった」というのが通説だった。

つまり「日本帝国主義の手先」である。しかし、そんな単純な話なのかと、例によって疑念が生じ、東北学院大資料室を訪ねると、折しも押川家から寄贈された膨大な資料を整理中だった。ここに通説をくつがえす根拠となるものがあるかもしれない。そうひらめいた松谷は、本格的な研究を開始した。

激動期人物の初志をたどって

押川方義は1850（嘉永3）年、四国・松山藩の士族に生まれた。17歳のときに明治維新、幕府側だった松山藩は負け組となった。没落士族の押川は横浜の宣教師バラの私塾で英語とキリスト教を学び、22歳の時に受洗した。この時期の日本人クリスチャンには没落士族が多く、彼らは侍として

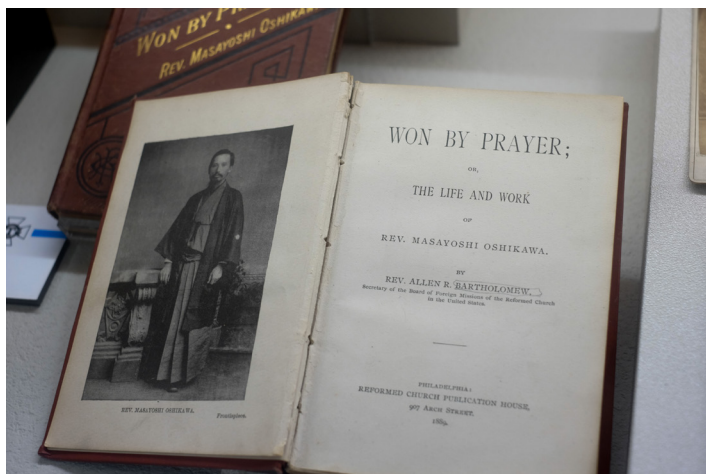
の誇りと反骨精神を併せ持っていたが、その代表格が押川だった。25歳、自ら志願して新潟の伝道に赴いた。

「浄土真宗の牙城である新潟で、押川はキリスト教排斥運動に屈せず熱烈な布教活動を行いました。つまり武闘派なんです。そういう性格や行動が、のちに帝国主義の手先と見られる要因の一つになったのですが、クリスチャンとしての初期の押川の純粹な情熱は疑いようもないと思います」

幕末から維新、そして日清・日露戦争と、押川は近代日本の激動期を生きた。後半生には大物の政治家とともに朝鮮国や清国の諸問題に関わり、衆議院議員にもなった。そんな行動が歴史学者に、前半生の布教・教育活動をも色眼鏡で見られるようになったのだ。それを正そうとして松谷は、日清戦争前までの押川に研究の焦点を定めた。いわば激動期を生きた人物の初志をたどる研究である。

新潟から仙台に布教の拠点を移した押川は、米国のドイツ改革派教会の宣教師とともに仙台神学校を設立、1892年に東北学院と改称し初代院長に就任した。同じ年、神学校の1期生で押川の愛弟子・島貫兵太夫が朝鮮に渡り、帰国後、朝鮮伝道の志を同じくするクリスチャンらと「東京同志会」を立ち上げた。さらに同年、押川と島貫は日本基督教大会において重要な建議を行っている。日本人宣教師による朝鮮伝道計画と、朝鮮人を日本のキリスト教学校へ留学させる活動の建議だが、これは教会内の反対で却下された。

しかし押川は屈することなく、2年後に「大日本海外教育会」を起し、会の最初の事業として朝鮮に2つの学校「京城学堂」「三南学堂」を設立した。京城学堂からは有為の人材が育ったが、問題は「海外教育会」設立の3カ月前に日清戦争が勃発したことである。そのため「日清戦争に便乗して教育事業を始め、日本の朝鮮支配の先兵となった」という見方が生まれた。教育会設立賛同者として



東北学院大学資料センターで。創立者押川方義をはじめ明治期の日米クリスチ안의苦闘の歴史が展示されている。

大隈重信、板垣退助、渋沢栄一など当時の超大物政財界人が名を連ねていたことが、その見方に輪をかけた。

松谷は日清戦争が大きな契機となったことは認めつつも、その設立賛同者たちを調べ直した。数多くのクリスチャンがあり、その中核メンバーに朝鮮伝道の立役者が含まれている事実を突きとめた。それまでの研究では大物政財界人の名に目を奪われ、朝鮮伝道・教育のネットワークがすでにできていることを見落としていたのだ。松谷の研究調査はそれにとどまらなかった。教育会設立直後に押川は自ら朝鮮に渡り、2名の朝鮮人留学生を連れて帰国、彼らの世話を島貫に託している。島貫は自らが発行する伝道雑誌に朝鮮の文化や文学を紹介し、朝鮮人留学生も寄稿しており、押川や島貫らの朝鮮への関心が伝道と関係を保ち続けていたことがうかがえる。

その根拠になるものとして、松谷は押川の朝鮮視察時の資料を探し求めた。ただ押川家の寄贈資料は膨大すぎ、まだ整理作業中で発見には至らなかったが、ここまでの研究によつて、朝鮮伝道・教育が日清戦争前にすでに計画され、それが人脈や内容面で一定の継続性を有していたことが証明された。その研究成果を松谷は、2016年3月発行の「東北学院史資料センター年報」創刊号に、(公財)韓昌祐・哲文化財団研究助成論文として発表した。

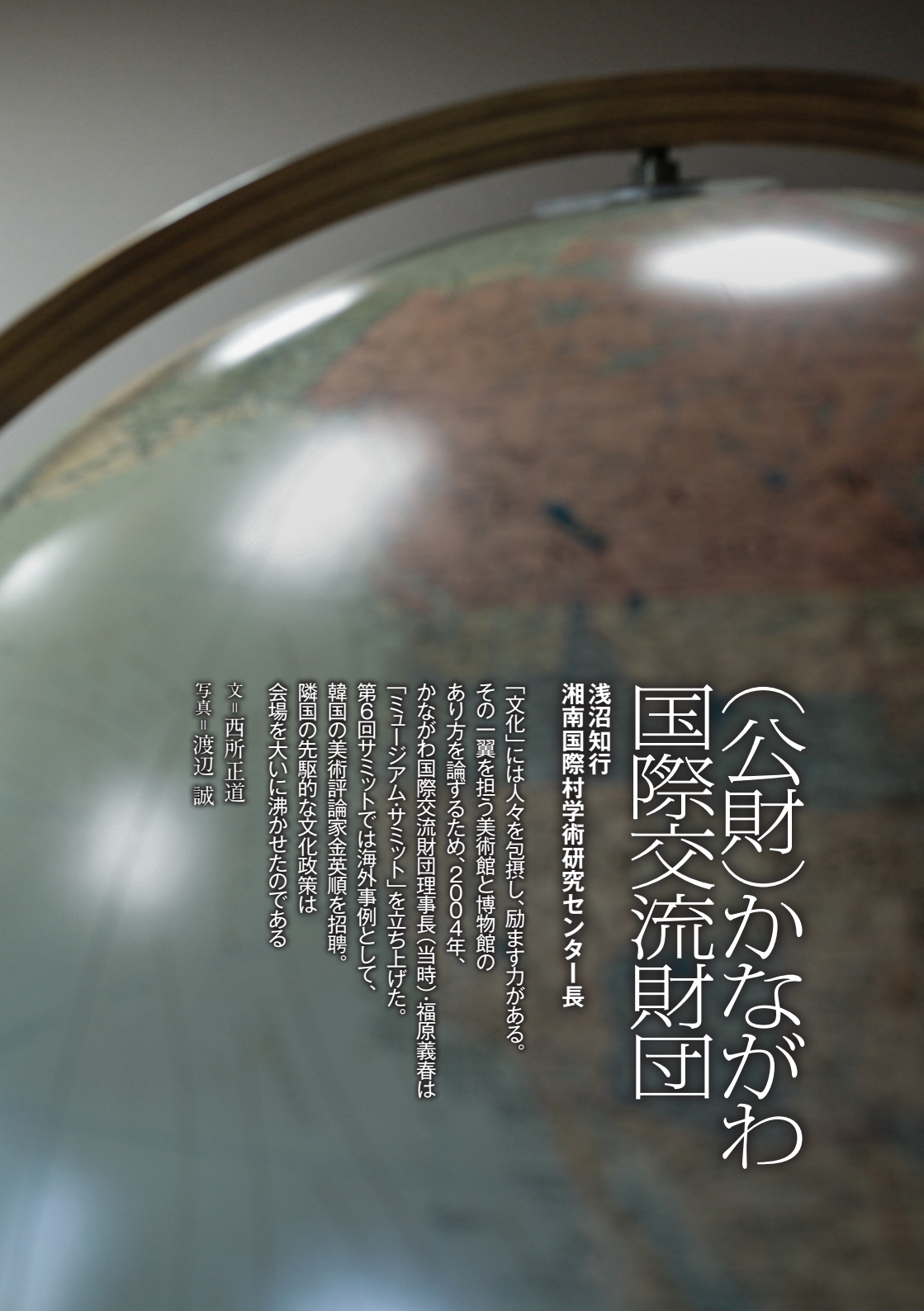
押川研究が縁となったのか、松谷は16年4月、東北学院大学教養学部准教授に就任。

韓国に関する書籍が天井近くまで埋まった研究室で、学生に韓国語の補講をする松谷も取材したが、ひねくれ者どころか、真摯な教育者の姿そのものであった。

(文中敬称略)

次なる課題は「英文の博士論文を日本語で出版したあと、韓国でキリスト教が急速に普及した1960年代を検証していきたい」





(公財)かながわ 国際交流財団

浅沼知行
湘南国際村学術研究センター長

「文化」には人々を包摂し、励ます力がある。

その一翼を担う美術館と博物館の

あり方を論ずるため、2004年、

かながわ国際交流財団理事長(当時)・福原義春は

「ミュージウムサミット」を立ち上げた。

第6回サミットでは海外事例として、

韓国の美術評論家金英順を招聘。

隣国の先駆的な文化政策は

会場を大いに沸かせたのである

文Ⅱ西所正道

写真Ⅱ渡辺 誠

地域社会の文化の核、美術館・博物館の活性化を促す
「ミュージアム・サミット」を開催



問われる国としての文化政策

2020年のオリンピック・パラリンピック（以下、オリンピックと略）の開催地が東京に決まったのは2013年のことだ。以来、ニュースを賑わすのは開催施設の規模や予算のことばかりである。ところが決定の翌14年に開催された「第6回21世紀ミュージアム・サミット」の冒頭で、主催者の福原義春（公益財団法人かながわ国際交流財団理事長）が当時、資生堂名誉会長）は、重要な指摘をしている。

「オリンピックのための文化プログラムをこれから創らねばなりません。政府はオリンピック開催までに『日本を世界でもトップクラスの文化大国にする』と宣言しておりますが、それをどう実現するかというのはこれからの課題です」

五輪に付随する文化プログラムというのは、ほとんどの日本人にはなじみのないものだろうが、オリンピック憲章には、スポーツの祭典であると同時に、文化の祭典であるということが謳（うた）われている。つまり、スポーツと文化は、オリンピックの車の両輪であるというわけだ。

サミットの事務局責任者の武藤誠常務理事（当時）を補佐した同財団湘南国際村学術研究センター長の浅沼知行は次のように付言する。

「文化とは美術館や博物館で展示される作品だけでなく、ミュージカルや演劇などの表現活動も含んでいます。そうしたものを通して、開催都市の文化や民族の理解をうながすことができるというわけ。ロンドンオリンピックが成功したと評価されるのは、その文化プログラムが充実していたか



(公財) かながわ国際交流財団



あさぬま・ともゆき◎1952年生まれ。1977年、神奈川県庁に入庁。自治総合研究センター勤務の時「国際化に対応した地域社会のあり方」研究チームを担当。その後、日本貿易振興会へ出向。県に帰庁後、湘南国際村推進室、県立図書館等を経て2013年3月神奈川県庁退職。同年4月から現職。

らだと言われています。オリンピックを真の意味で成功させるには、文化プログラムについても、しっかりと準備していかなくてはいけないのです。本来ならばリオオリンピックが終わった時点で、すぐにも文化プログラム作りに着手しなければならぬのですが、遅れ気味なのが気になります」

こうした指摘はもつと知られていいはずなのだが、そうなっていないのは、文化の価値が、経済波及効果とくらべて数値化しにくい面もあるからだろうか。

しかしこのミュージアム・サミットにゲストとして出席したフランスのジャック・ラング元文化大臣はこう言っている。

「文化への投資は100倍になって戻ってきます」

ラングといえば、ヴァレリー・ジスカル・デスタン大統領時代に半減した文化予算を、倍増させた凄腕である。なかでもルーヴル美術館の大改革「大ルーヴル計画 (Grand Louvre)」に大きく貢献。財務省に独占されていたルーヴル宮の建物を立ち退かせ、宮殿施設全体を美術館にしたほか、周辺の道路、景観整備をした結果、美術館はよみがえった。2012年の入場者数は、改革前の250万人の4倍、1000万人に達したという。

あらためて「文化の力」を再認識させられるエピソードだが、福原がラングをはじめとする美術界の重鎮じゅうしんを招いてミュージアム・サミットを催すことになったきっかけは、日本がフランスのようにポジティブな方向に向かつていないと感じていたからである。

美術館の行く末に、福原が危惧を抱き始めたのは、特に文化芸術振興基本法が制定された2001年以降である。基本法の前文には「文化芸術の振興は21世紀の緊要な課題である」と謳われているのだから、本来ならば、喜ばしいはずである。



(公財) かながわ国際交流財団



2004年から2年置きに行われている「ミュージアム・サミット」。
毎回、講演や会議の内容などを収録した詳細な書籍が発行されている。

ところが、現実には美術館や博物館にまつわる予算は削減される事態となった。シンボルとしての国立博物館が独立行政法人化されるに至り、予算もマイナスシーリングが続いた。さらに追い打ちをかけるように、03年には、美術館や博物館、図書館などの運営を民間に委託することを可能にした指定管理者制度が始まったのである。浅沼は言う。

「美術館は何十年も先のことを見通して、美術作品のストックを考えたり、長い時間をかけて展示の準備をしたりするわけですが、指定管理者というのはどうしても5年、10年といった短いスパンでしか考えない。国や地方公共団体のさまざまな文化政策に助言するとともに、自らも請われて東京都写真美術館館長を務めていた福原理事長は、その動きに強い危機感を抱いたのです」

そこで04年、「ミュージウム・サミット」を立ち上げた。文化の担い手としての美術館や博物館のあり方について、徹底的に論じ、発信する場としていくことを目指した。

同サミットは隔年で開かれ、初回から3回目までは、ルーヴル美術館館長をはじめ、欧米の美術館館長クラスだけでなく、アジアからも著名な美術館館長を招き、さまざまなテーマで議論を重ねた。4回目からは、国内外の事例を持ち寄って、参加者が議論する試みもなされた。

「ただ、個々の美術館の努力だけでは十分ではなく、国や地方政府レベルの文化政策が不可欠であるという議論に至りました。そこで第6回サミットでは、海外の取り組み事例をもとに議論することにしたのです」（浅沼）

設定されたテーマは「国の文化政策と政治家の役割」。国家の文化政策が如実にあらわれるのが、国家予算に占める文化予算の割合だが、日本はわずか0・1%である。ドイツは0・4%、フランスにいたっては日本の10倍の約1%を占める。ジャック・ラングとともにフランスから出席した元駐日大



使のドウ・モンフェランの話を聞いた浅沼によると、こんな話をしていたという。

「フランスには、“*France*” という芸術文化振興のための組織があり、全国を23の地域に分けています。それぞれの地域の芸術文化振興資金のうち、半分を国が拠出きょしゅつしているといえます。興味深かったのは、資金の使い方です。有名な作家の、価値が確定しているような高価な作品を買うのではなく、無名の芸術家の作品も買うというのです。お金の無駄遣いなのではないかと批判されたこともあったようなのですが、30年近くたった今日、その作家は有名になり、資産価値が何倍にも増えているようです」

韓国の文化プロジェクトと市民の声

実はもう一つ、国家予算の1%を文化に投入している国がある。お隣韓国である。

いかに文化施設の充実度が違うか一例を挙げよう。たとえば国立の中央博物館を比較すると、東京国立博物館の年間予算規模が21億円（2012年度）なのに対して、韓国の国立中央博物館は77億円（2011年度）と3.5倍強。国立博物館の数を比較すると、日本が4館に対して韓国は12館、職員数は東京国立博物館が101名に対して韓国国立中央博物館は250人。入館料は、日本が有料なのに対し韓国は無料など、歴然とした違いがある。

韓国はどんな文化政策をとっているのか——。それを聞くにあたってベストな識者は誰かを、福原と同サミットの4人の監修者で検討を重ねた結果、浮上したのが、韓国の美術評論家・美術史家として著名な金英順キム・ヨンジュンであった。





財団の事務所は、神奈川県相模湾を一望できる「湘南国際村」の一角にある。周辺には学術機関、大学、企業研修所などが立地。



上)「ミュージアム・サミット」の会場、湘南国際村センター国際会議場。下)美術評論家・美術史家の金英順による講演の様子。招聘には金の恩師・高階秀爾が尽力した。
(写真提供 浅沼知行)



金は、1952年生まれ。永殷美術館の館長や、光州ビエンナーレ組織委員、世宗大学大学院兼任教授なども歴任している。なかでも永殷美術館は、美術品の保存と展示というこれまでの美術館像から脱皮し、画家たちの集団創作スタジオを兼ねた複合文化施設としての機能も併せ持つユニークなミュージアムである。東京大学大学院では、同サミット監修者の1人、高階秀爾のもとで研究し、のちに同大学院で客員教授を務めるなど、日本の文化政策やミュージアム事情にも詳しい。(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成金も一助となり、金の招聘が実現した。

講演のテーマは、2014年3月にオープンした「東大門デザイン・プラザと公園」(以下、DDP)にまつわるもので、演題は「場所の文化政治」。

植民地時代にできた東大門運動場と、そこに隣接するサッカー場を撤去した跡地を中心に、韓国デザインと世界トレンドを発信するミュージアムや、大型イベントを開催できるアートホール、デザインビジネスセンター拠点となるデザインラボ、そして文化体験やショッピングが楽しめるデザインマーケットの4施設が完成した。予算規模約4800億ウォン(約470億円)のビッグプロジェクトになった。

規模は当初の倍に膨らむものになったが、歴代のソウル市長がリーダーシップを発揮して実現した。市長らは、これにより、ソウル市のブランド価値を高める「デザインソウル計画」を伸展させる狙いがあった。ちなみにDDPの設計者は、日本の新国立競技場の当初の設計者、ザハ・ハデイドである。金によれば、ミュージアムの建設予定地に、城郭や水門、軍營の跡が見つかったり、朝鮮時代の遺跡が出土したりした。そうした発掘品を収蔵した施設も整えた。「場所に記憶された記憶と精神」をソウル市民に喚起させるきっかけとなったという。

一方で、新しいミュージアムができることで、空間デザイン学会、公共デザイン学会、文化地理学会などができたという。「ミュージアムは新しい知識を創造するきっかけをつくる可能性を持っている」と金は指摘した。

ただ、「いかに進歩的なミュージアムが完成しても、市民がついてこれないものでは、せっかくの空間が無駄になってしまふ」(金)という問題意識から、その対策として、景福宮キョンボクンの正門「光化門グンファムン」から地下道でつながるように設計した。その途中には、ファッションタウンを含めた文化・観光施設が建ち並ぶエリアがあり、アクセスしやすい環境になっているという。

金是这样話したという。

「韓国の良いところは、市民の大きな声があると計画を変更できることです。民主主義が確立されているから、有権者がデモンストレーションすれば必ず反映されることです。そこが日本と違うところですね」

金はもう一点、最近の日本に対して次のように言及している。

「2000年ぐらいまで日本の文化政策はものすごくうらやましかった。しかし、横浜トリエンナーレが、光州ビエンナーレをマネした頃から日本の文化政策は後退していったと思います」

韓国が文化関連予算を国家予算の1%まで増額してから十数年経過するが、その影響が現れているのだろうか。

違った文化をもつ人がともに暮らす



(公財) かながわ国際交流財団



「金英順先生からは、韓国の文化人の奥深さと緻密さを感じた。日韓両国の芸術家を幅広く知悉し、歴史的な位置づけも理解が深い」

さて、ここへ来て、ミュージアム・サミットは、前記したように、全国それぞれの地域の美術館が、いかにして文化の担い手としての役割を果たしていくかというテーマにシフトしつつある。そのヒントとして重要な話をしたのは、かつてスウェーデン・ストックホルム国立近代美術館館長やロンドンのテート・モダンの館長を歴任し、当時香港・M+美術館館長だったラース・ニッティヴである。

浅沼にとって印象深かったのは、ロンドンに住む移民への美術館の働きかけだった。ロンドンには、旧植民地国からたくさんの移民が流入しているが、英語のスキルが十分ではないためにコミュニケーションが取れず、社会から疎外されている。就ける仕事も限られてくるため、経済的にも厳しい生活を送っている。やがて、そういう人たちが集中して住む地域が形成されるに至る。そこに住む人たちに働きかけたのが、地域の美術館だった。

「美術館が移民向けにさまざまなプログラムを用意したのです。絵画や映像などをつくるワークショップ的なものも含めてですが、そうした催しに参加してもらったところ、若者たちがイキイキとしてきた。考え方もポジティブになり、自分はこういう分野で働きたいなどと語るようになったというのです。芸術というものは、分断された人、疎外された人を包摂する役目とともに、癒やしたり、励ましたりする力もあるということを改めて教えられました」

違った文化をもつ人がともに暮らす――。

じつは浅沼はこの問題意識をずっと持ち続けてきた。

浅沼は、神奈川県職員として、長らく国際交流関係の仕事に携わってきた。入庁した1977年、配属されたのは、前年に新設されたばかりの国際交流課だった。長洲^{ながす ながす}一二知事^{ちし}が公約の一つに挙げていた「民際外交」を実現するための重要な部署であった。民際外交とは、国家間の外交とは違った、



国際交流課職員などで構成する自治総合研究センター研究チームが、
神奈川県内の在日韓国・朝鮮人に聴き取りした報告書が書籍化。

民衆や地域同士による外交を意味する政策である。

長洲知事から県と市の職員で構成する自治総合研究センター研究チームに与えられたテーマがあった。それは、「県内に住む外国人が過ごしやすい地域とは何か、を考えよ」ということであつた。浅沼ら7人のチームは、県内に多く住む在日韓国・朝鮮の人たち100人に聴き取り調査を始めた。

日本に住むことになった経緯、就職や医療を受けるとき、日本人にくらべて障害があるのではないか、権利がどうなっているのか……などを聞くために、県内を訪ね歩いた。いろいろなことがわかった。

日本に住まざるを得なくなった背景には、母国で土地を奪われてしまったことがあったり、携わった仕事内容を聞くと、微用による京浜工業地帯の形成、鉄道敷設工事、相模湖ダム建設などに携わっていたりした。話の中

から、工事の事故などの犠牲になった人がいることもわかった。

「神奈川の礎^{いしづ}を築くために、多くの朝鮮半島出身の人たちの汗と血が流された。そうしたご苦労の上にわれわれは暮らしているのだと実感しました。在日一世の方にもたくさんお話を聞いて、家系の記録である族譜^{チヨボ}を大切にしておられたのが印象的でした。話を聞き、暮らしについて振りかえつてもらうにつれ、彼らがどうすれば暮らしやすくなるのか、就職差別をなくすにはどうしたらいいのか、県の条例で何とかできないのか、など何から手をつけていいのかわからないぐらいたくさんの課題が見つかりました。これらは県など行政の責任として解決していかなければならないとレポートには書きました」

その後、浅沼は県を退職してから、2007年に統合したかながわ国際交流財団に勤めている。

同財団の事業は、「多文化共生の地域社会づくり」、「県民・NGOなどとの連携・協働による国際活動の促進」、「国際性豊かな人材の育成」、そして「学術・文化交流の促進」と多岐にわたって展開されているが、ミュージアム・サミットは4つ目の事業として実施されてきたものである。

浅沼は言う。

「今の仕事には、入庁間もなく携わった『国際化に対応した地域社会のあり方』を考える仕事を通して在日の人たちに出会った経験が生かされているかもしれません。とくに海外から来た多様な文化を持つ人たちがコミュニティの一員として共に生きることの大切さをいつも考えています。そこに美術館やアートがどう関わっていくかを、今後も考え実践していきたいと思っています」

(文中敬称略)



福原義春は『ミュージアム・パワー』の中で、競争が激化する世界において、「国力も文化の蓄積なくしては存在しない」と指摘。

関野貞の朝鮮時代絵画研究の足跡をたどって



渡邊雄二

九州産業大学芸術学部
ソーシャルデザイン学科教授

もともと研究対象は日本の水墨画だった。

しかしひょんなことから、日本統治下に行われた

朝鮮時代絵画の研究カードの山に出合う。

高名な建築史家だった関野貞。

彼は朝鮮総督府の依頼によって、朝鮮総督府博物館、

李王家博物館、さらには個人コレクターが所蔵していた

朝鮮時代絵画の名品を整理・分類していたのである。

渡邊は関野を追って韓国にも通うことになった。

文＝千葉 望

写真＝菊地健志

九州産業大学教授の渡邊雄二^{わたなべゆうじ}を訪ねた日、彼が開いて見せてくれたのは立派な美術書『朝鮮古蹟図譜』だった。そこにあつたのは見慣れた山水画や花鳥画。しかし、よく見るとなんとなく、中国や日本のもとは趣が違う。これまであまり目にしてこなかった朝鮮時代絵画の世界が、目の前に開けていた。

私が目にしてきた韓国美術は、茶道をやっていることもあつて、主に李朝白磁や高麗青磁などの陶磁器である。私に限らず大方の日本人にとつては、朝鮮美術の中で親しんだ分野とそれほどでもない分野とがあるだろう。たとえば古代史が好きなら、日本に渡来した新羅^{しらぎ}や百濟^{くだら}の金の装飾品や、鏡や銅鐸^{どうたく}などの青銅器類。仏教研究者なら経本や仏像。茶人であれば李朝や高麗の茶碗や菓子器、酒器。書が好きな人なら水滴^{すいてき}などの文具。安定した人気を保つ李朝の家具。近世のユーモアに溢れた民画を愛する人もいる。最近では、江戸時代までは大事にされていながら忘れられがちだった高麗仏画の展覧会が開かれるなど、新たに光が当てられた分野もある。

その中で注目されているとはいいがたいのが、文人による山水画や花鳥画ではないだろうか。江戸時代には日本人が朝鮮の絵画に強い関心を持ち、日本に渡ってきた作品を取り上げた『古画備考』「高麗朝鮮書画伝並印譜」など書画家伝が残されているが、現代では強い関心が寄せられているとはいえない。

ところが、朝鮮半島が日本の統治下にあつた時代、熱心にこれらの絵画を研究した人物がいた。建築史家として知られる関野貞^{せいのたけ}である。関野は慶応3年（1867）生まれ。辰野金吾の指揮下で日本銀行本店の建築に参加し、のちに日本の古い寺社建築の調査に当たった。その後朝鮮総督府の依頼を受け、日本統治下の朝鮮で建築や古墳のほか、さまざまな美術品の調査に携わったことはあまり知ら



わたなべ・ゆうじ◎1956年生まれ。東京大学文学部美術史学科卒。
テレビ局を経て福岡市博物館学芸員、福岡市美術館学芸員として勤務後、2012年に九州産業大学芸術学部教授に就任。現在は同大図書館館長も務める。

れてこなかった。実は、関野は朝鮮総督府が発行した『朝鮮古蹟図譜』（大正4年から刊行が始まり、全15巻）の調査と編集に携わり、絵画の調査も手がけていたのである。その成果は第14巻にまとめられており、私が渡邊から見せてもらったのは昭和40年代の復刻版である。復刻版の『朝鮮古蹟図譜』は重要な資料として大学や研究機関が購入したが、現在でも古書店では高く取引されている。

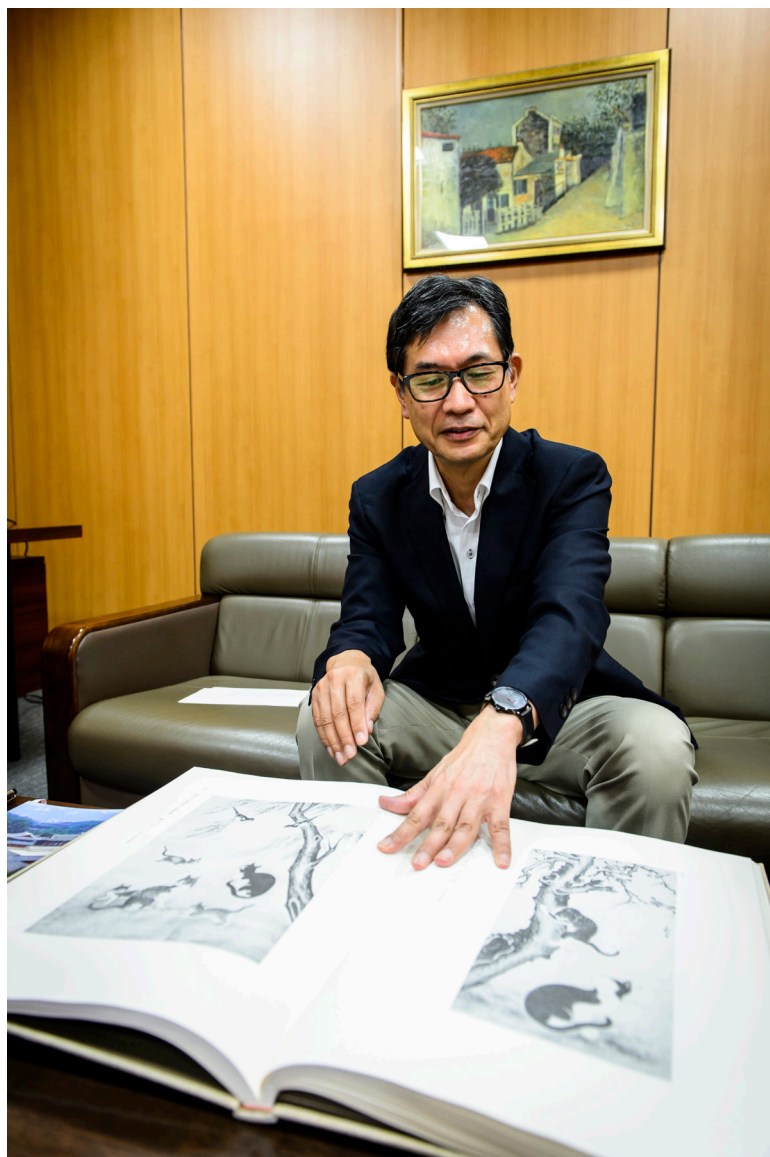
「大型の図版をふんだんに使っていて、朝鮮総督府としては相当力を入れて作ったと言つてよいでしょうね」

朝鮮時代絵画の調査記録をほぼ一人で担った関野貞

渡邊が関野の仕事を知ったのはまったくの偶然だった。FBS福岡放送から福岡市博物館と福岡市美術館で学芸員を務め、学芸課長を最後に2012年九州産業大学へ。学芸員時代には日本の水墨画を中心に研究を続けてきた。あるシンポジウムに参加する際、韓国と日本の水墨画や文人的絵画活動を比較検討してみようと思ひ立ち、『古画備考』の「高麗朝鮮畫畫傳並印譜」の内容を細かく分析することから始めた。

「この調査を進めていくうちに、東京文化財研究所から所蔵している韓国絵画写真カードのほかに、関野貞先生の調査カードがあると教えていただき、どちらもこれまであまり研究者が調査してこなかったということがわかったため、私自身は門外漢ではありますが、自分で調査してみようと考えたのです」

カードは研究所のキャビネットに収められ、誰かがきちんと調べた形跡がなかった。カードが作ら



『朝鮮古蹟図譜』を開いて高麗・朝鮮時代絵画の特徴を語る渡邊。関野貞の活動がなければ日本に伝えられることもなかっただろう。

れて以降、第二次世界大戦も終わったが、日本は隣国の近世美術にふつつりと関心を失ったか、これらのカードを誰も研究しようとしなかったようだ。おそらく関野が作成して、その没（1936年）後、80年ほどそのままだったのではなからうか。

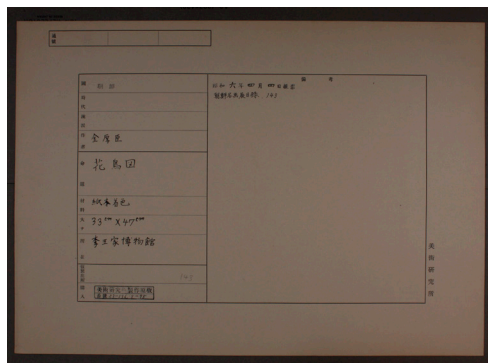
「もつといういろいろな人と共同で調査をしたものだと思うのですが、開けてみればそれらのカードはほとんど関野先生が一人でおやりになったようです。先生の本業は建築や古墳の調査ですから、美術はいわば副業なんですけれど、すごいとしか言いようがありません」

渡邊はカードを調べながら、『関野貞日記』の該当する箇所も参照した。日記には美術品を見て回った箇所がメモとして残されており、渡邊が同じ研究者として見た関野の活動は「とてつもない」と驚くほどのスピードだった。

関野はカメラマンとともに朝鮮総督府博物館（1915年設立）や李王家博物館（昌慶宮内帝室博物館として1908年に設立。1938年に「李王家美術館」を徳寿宮新館へ移転開設して、多くの資料はそちらへ移管した）をはじめ、個人の所蔵家も訪ねて、1日に何カ所も朝鮮の絵画を見て歩き、撮影した写真を貼ったB6判のカードに、・作品の所蔵・銘文・調査期日を鉛筆で書き込んでいる。そのカードは160枚に及ぶ。

「朝鮮時代の絵画については当時多くの点数を所蔵した李王家博物館、朝鮮総督府博物館の調査をはじめとして、1930年10月からさらに積極的に調査に取り組みました。それは、その年10月17日から東亜日報社で『古畫画珍藏品展』を見たことが影響していると考えられます」

日本の水墨画は、中国に渡って水墨画を学んだ雪舟せつしゅうをはじめ、禅僧が成立に深く関わってきた。絵を描くことがそのまま禅の修行であるという考え方もあるし、禅僧が東アジアの文人文化の担い手で



1表

東京文化財研究所に所蔵される朝鮮時代絵画関係写真カード

(調査資料カード1、2と写真カード3、4)

この作品を調査した関野貞自筆の調査カード5

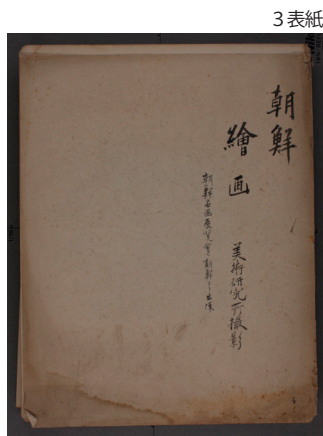
(写真提供 渡邊雄二)



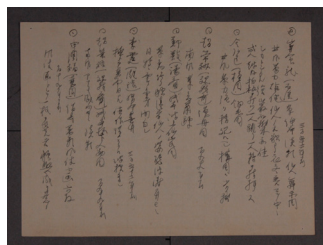
2裏



4



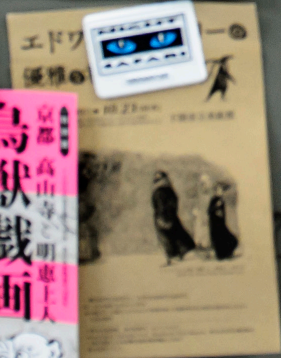
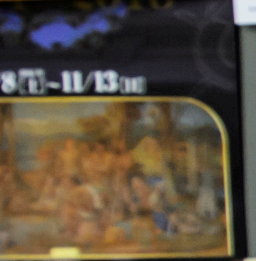
3表紙



5

大学の研究室にて。展覧会のチラシの多さが美術史研究者らしい。図書館長も務め、業務は多忙を極める。





あつたと考えられよう。だがお隣の朝鮮王朝では、僧侶ではなく文人士大夫が中心となつてきたという違いがある。

儒教文化が日本よりもはるかに強く根づいた朝鮮では、両班を中心に「士大夫」であることが非常に重視されてきた。詩を読み、書をよくし、絵を描くバランスのとれた教養人が尊ばれたのである。

無論、中国同様、宮廷画家（画員）や仏画師が朝廷のために絵を描く制度があつたが、彼らはあくまで職人としての地位しか与えられなかつた。

「朝鮮の水墨画の多くはあくまでも文人士大夫の『趣味』として描かれたものです。そもそも画家の社会的地位が非常に低く、彼らと同様に描くことは退けられました。士大夫たるもの、絵のようなものに血道をあげてはいけなさとされ、あまり上手に描いてはいけなかつたのです。人格がにじみ出ればよい。技芸に没頭することは、かえつてバカにされたのかもしれない」

絵の描ける士大夫であれ、しかしあまりうまく描くな。矛盾しているようだが、それが文化の違いなのだろう。日本の狩野派のように流派の型があつて、その方向性の中で自分の画業を極めていく道とは大きな違いがあるが、それ自体がおもしろいことである。

日本は朝鮮半島を統治下に置き、朝鮮総督府を置いた。1915年、始政五年記念朝鮮物産共進会という博覧会会場の美術館を朝鮮総督府博物館として開設した。そこにさまざまな、考古資料、美術品を集めた。このほか李王（李朝第27代の王・純宗^{スジョン}）の退位を機に移設された李王家博物館（現・国立古宮博物館）もあつた。

「おそらく当時は日本と同じで西洋美術への関心が高まり、伝統的な作品は顧みられない時期だったでしょうから、絵画資料については当初は収集しやすかつたのではないのでしょうか。今見ても、いい



ものが集まっています」

渡邊が解説をしながら見せてくれた絵は、型があるようでいて、どこかのびやかな個性が見て取れるものが多かった。これほどの腕がありながら、「あまりうまく描いてはいけない」という枷^{かせ}がはめられるのはどういう気持ちだったろうか。苦しいのか、それともすぐにはわからないようなところに技術の冴え^さを見せることに喜びを見出したのか。

特徴的なのは、あまり女性が登場しないことである。山水画や花鳥画はもちろんのこと、人々の生活を描いた絵の中にもめったに女性の姿はない。これも儒教の影響だという。日本の浮世絵のように女性の風俗がいきいきと描かれたものは好まれなかったという。たまに描かれるとしても多くは働いている場面であるが、よく見れば画家の高い技量や個性がうかがわれる。

もちろん「春画」のようなものはご法度で、版木でたくさん刷られて広く流布した日本とは文化の成り立ち自体が違うという気がする。

「それでも、こっそり描く人はいたんですよ。妓生^{キセイ}を描いて画員をクビになった申潤福^{シンユンボク}や金弘道^{キムホンド}（役人に見つからないように両班を批判した内容の春画集『雲雨図帖』がある）のように、風俗画で知られる画家もいました。彼の絵は民衆の暮らしを伝えるものとして有名です」

近代における朝鮮時代絵画理解の研究はまだこれから

関野は、1931年に東京府美術館において大規模に開催された「朝鮮名画展覧会」にも深く関わっていた。日記にもそれが記されている。送られてきた絵画の荷解きから陳列作業、関係する講演会、

さらには李王と王妃の来館に作品の説明まで行った。忙しい日程をやりくりして、朝鮮からやってきた個人の収蔵家を連れて東京案内までしている。関野の調査活動は個人との人間関係にも支えられていたのであろう。

渡邊は関野のカードを手掛かりとして、近代、とくに京城（ソウル）における朝鮮時代絵画の収集や展示を調べ始めた。助成金を得て、東京出張4回（東京文化財研究所・東京大学東洋文化研究所・東京国立博物館など）、韓国出張3回（国立中央博物館・国立王宮博物館・東国大学校・国立晋州博物館など）への調査旅行を行った。韓国へ行かなければ手に入りにくい図録などの資料も入手できた。その成果は『九州産業大学芸術学部研究報告書』（2016年3月発行）に論文として掲載され、リポジトリによって、ネットで容易に閲覧できる。

渡邊の研究は日韓併合と日本の敗戦、朝鮮半島の二国の独立という激動の中で、日本が一体どのような文化活動を行ったか、そして、何が埋もれていったのか考える契機ともなっている。戦後独立を果たした韓国では、朝鮮総督府博物館はもとより、李王家博物館にあった収蔵品を国立中央博物館へ移し、建物は解体してしまった。「博物館施設までそうする必要があったのか？」と思うが、渡邊は、「日本に併合され、李王家が日本の一華族という立場に置かれた時代のことは韓国にとって『負の歴史』であり、できれば思い出したくないことでしょう。それでも韓国の文化財局は丁寧な解体の記録を残しています。私たちはほかの事象と同様、記憶をたどる作業をしないといけないでしょう」

という。日本の中で朝鮮時代の絵画に対する関心がなかなか芽生えなかったのも、どこかに我が国の複雑な感情を映しているのかもしれないと思う。関野のカードについても韓国の研究者や留学生に話をしてみたが、それほど関心は示されなかった。



長く学芸員を務め現在では研究者となった渡邊は、隣国である朝鮮半島の文化や伝統に対する強い敬愛の念を抱いているという。

隣国の文化を知るといえるのは絶対に必要なことである。古代から文物や人の交流があり、お互いに切っても切れない関係にあるが、ときにぶつかりあう。だからこそ、それを持ち越えるちからとして、互いの文化の理解が必要であると渡邊は考える。

陶磁器については、日本で高い評価を得て、茶道のなかでは最高の茶碗とも扱われる高麗茶碗を韓国の陶磁研究者は研究の対象としてこなかった。このようなことも次第に克服されてきているようだ。若い研究者たちは屈託がない。ソウルでの知り合いが増えるにつれ、いろいろなことが見えてきた。「若い人の中には日本美術に関心を持つ人も増えていて、勉強したがつています。日本統治下の時代も『時効』ではないのですが、研究の上ではそれよりもこれまで避けてきた空白を事実として埋めていこうとする前向きな研究が盛んになっていますよ。新たに確認される研究資料もたくさん出てきているようですし、日本の研究者も共に研究する段階に來ています」

互いに顔を合わせて研究を深めることのメリットは、渡邊が語るとおり皮膚感覚で相手の空気を知ることにもある。関野貞が残した成果は、まだ発掘しきれない豊かさを隠し持っていると言えるのだ。

（文中敬称略）



九州産業大学の同僚で陶芸家の梶原茂正教授と。陶芸の盛んな九州にある大学らしく、キャンパスには本物の柿右衛門窯を正確に写した登り窯があった。

平郡達哉

島根大学法文学部人文社会科学科研究科准教授

朝鮮半島の考古学資料に「磨製石剣」がある。

およそ3000年前の青銅器時代、

各地に展開した集落のリーダーの大きな

石の墓から副葬品として出土するものだ。

平郡達哉の研究は、その詳細な調査と

型式を分類した編年の作成である。

そこから浮かび上がるのは、南北共通の

文化圏の存在。当時を生きた人々の

交易の軌跡が、古代史に新たな光をあてる。

文Ⅱ高瀬 毅

写真Ⅱ菊地健志

朝鮮半島出土の「磨製石剣」から
青銅器時代の文化を明らかに



豪族の墓から出土する権威の象徴

朝鮮半島には、青銅器時代という時代区分がある。今から3300年から2500年くらい前だ。日本では縄文時代の終わり頃から弥生時代に当たる。国家や王朝がまだ成立しておらず、朝鮮半島の各地に農耕社会が成立・展開し社会が複雑化していったとみられている。

そんな時代の重要な手がかりとなるのが「磨製石剣」といわれる考古学の資料である。島根大学法文学部准教授、平郡達哉^{ひらね たつや}は、磨製石剣を研究する数少ない考古学者の一人である。

磨製石剣とは石を磨いて作った短剣だ。だが剣の形をしているものの刀ではない。武器として用いられたというより、ほとんどが支石墓^{しせきぼ}という墓の副葬品として作製されているという。ある地域のリーダーが死んで墓に葬られる。その時に遺体とともに入れるのが副葬品だ。長さは10数センチから30数センチぐらいのものが多く、中にはその倍以上の長さの石剣もある。

「これが韓国で一番大きい磨製石剣です」

そう言って見せてくれたのは、長さ70センチ近くある磨製石剣の資料だ。

「剣としては使えないんですよ。薄くてペラペラです。でも石なので重たすぎるんです」
なぜ、そのようなものが必要だったのか。平郡はこう説明する。

「リーダーは、集落内や集落間の葛藤^{かつとう}の仲裁もしないといけないなかったので、そのような場合に、武器としてというよりも、武威の象徴として持っていたのではないのでしょうか。ですので、最初から墓に副葬するために作っていたと考えられます。剣を持っていること自体が、何か権威の象徴だったので



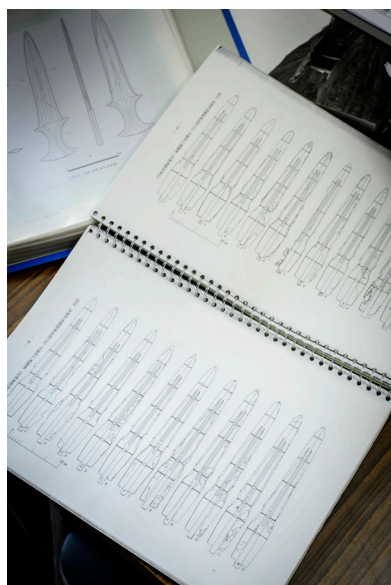
ひらごおり・たつや◎1976年生まれ。島根大学法文学部准教授。
99年花園大学文学部卒。2001年滋賀県立大学人間文化学部地域文
化学科修士課程修了。04年木浦大学校考古人類学科修士課程修了
後、釜山大学校考古学博士課程。13年より現職。『墳墓資料からみ
た青銅器時代社会』（著書）や磨製石剣、墓制の論文多数。

はないかと思われます」

平郡は、墓の中から見つかる磨製石剣は、おそらく生前の故人の持ち物だったのだろうとみる。朝鮮半島では基本的には一つの墓には1人しか埋葬されないからだ。そこに副葬されている磨製石剣は原則1点だけ。2点ということも例外的にはあるが、出来のいい石剣は一つで、もう1点は作りかけだったりするらしい。ただ時代が下れば、一つの墓に何本かの鉄剣を入れたりするケースも出てくる。その前段階の剣が磨製石剣だ。剣は腰に差すもので、副葬品の位置も、死者の体の腰の横あたりに埋葬されていることが多い。

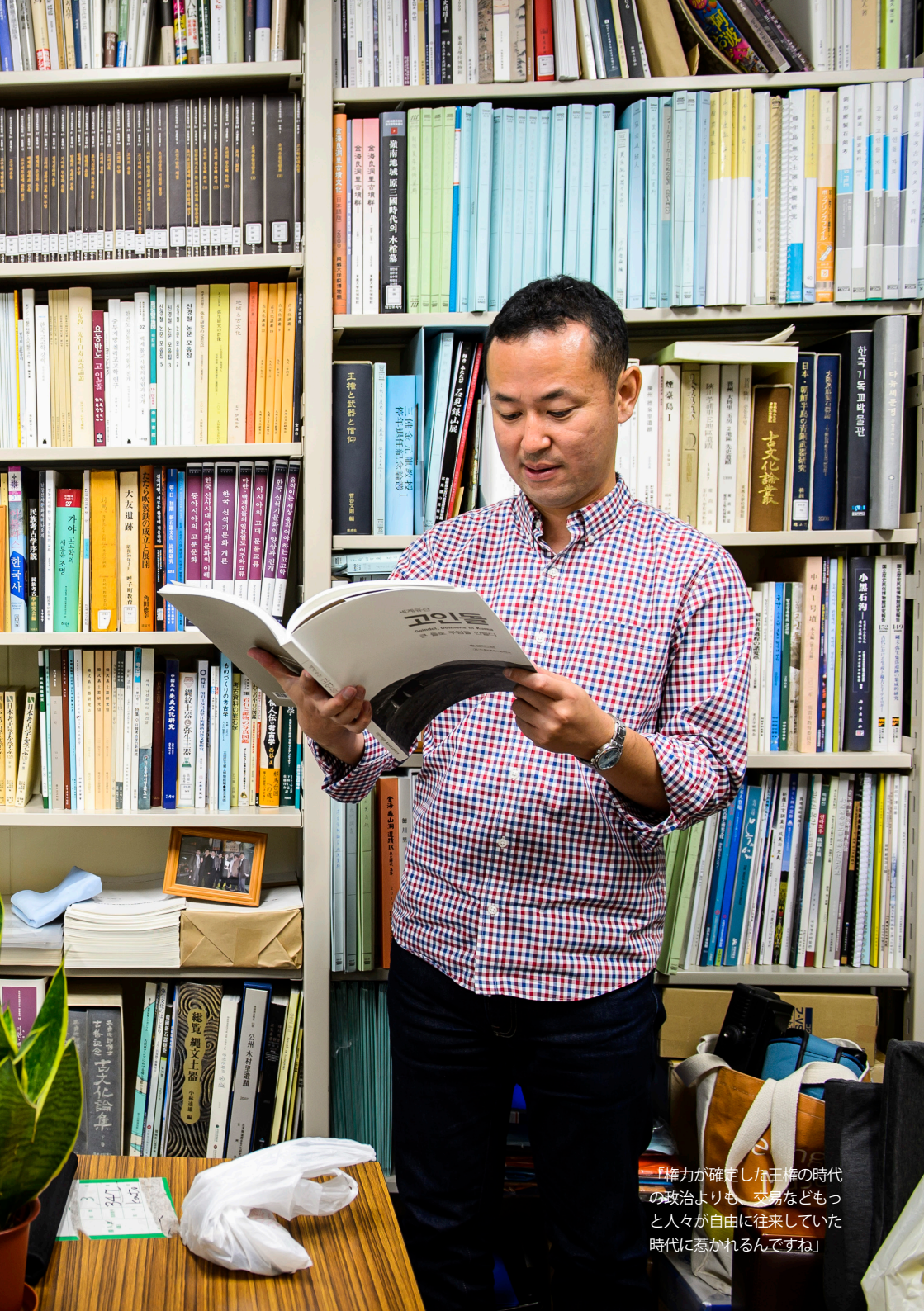
石剣は大きく分けて2種類ある。一つは木製の柄のついた「有茎式」^{ゆうけいしき}。もう一つは、剣身と柄を同時に表現した「有柄式」^{ゆうへいしき}である。ほぼ同時代のものと考えられている。主に出土する場所は、日本の弥生文化の形成に大きな影響を持つとされる朝鮮半島南東部^{ヨシナム}＝嶺南地域が多い。いまの韓国・慶尚北道^{ナムド}から南道^{ナムド}にあたる一帯である。

これまでに出土したのは約700点。考古学研究の基礎的作業である資料の集成は未だできていないのが現状だという。研究の歴史が新しく、朝鮮考古学の大家・有光教一^{ありみつきいち}（京都大学名誉教授）による1959年からの研究が本格的な研究の始まりだ。その後、日韓両国の研究者による型式分類や編年の大枠が作られてきた。そうした現状を踏まえ、平郡は、資料の集成作業と、それを通して磨製石剣について検討することを目的に、2013年に、（公財）韓昌祐・哲文化財団の助成金を申請した。資料を集めるといっても、現物を収集・保存することはできないので、主に韓国各地の磨製石剣所蔵機関を訪ねるという方法になる。財団の助成金で訪ねたのは、京畿道^{キョンギド}・ソウル、江原道^{カンウォンド}、忠清北道^{チュンチョンブクド}・南道^{ナムド}、さらに全羅北道^{チョルラブクド}・南道^{ナムド}、慶尚北道^{キョンサングブクド}・南道^{ナムド}の各地域の大学の博物館などの機関である。実地



北朝鮮が発行している専門誌『朝鮮考古研究』。石剣の写真もある。北朝鮮は調査ができないため、こうした資料は貴重だ。

磨製石剣の図面。各地の博物館などの報告書から引用し、形としてわかるように石剣の図面を集めた資料を作成している。



「権力が確定した王権の時代の政治よりも、交易などもっと人々が自由に往来していた時代に惹かれるんですね」



の調査にあたり、釜山^{プサン}大学校博物館（釜山広域市）で発掘調査報告書や文献を調べた。そこにはどの機関が、どのような磨製石剣を発掘したということが記録されている。それに基づいてメールなどで所蔵機関に問い合わせ、足を運んで調査した。財団の助成金による調査の前から、それまでに発掘された現物の資料を見て、データを集積、出土一覧表として作成、ファイルにまとめていたが、今回の調査でわかったデータも新たに付加した。新しい資料が出てきたら、そのつどアップ・トゥー・デートしていくことにしている。

一覧表には、遺跡所在地、遺跡名、遺構番号、磨製石剣型式、副葬の位置、全長と剣身の長さ、柄（茎部）の長さ、剣身と柄の長さの比率などの項目があり、出土番号順に細かく記録されている。図面も入手し、得られた図面をデジタルトレースして統一感のある図面を作成。これらを基に、磨製石剣の型式分類の全国的な編年を作るのだ。それを根拠に、地域別・時間別の副葬風習の特徴や、磨製石剣の社会的意義、朝鮮半島の青銅器時代の文化の特質を明らかにする考えだ。まだ比較的新しい研究分野だけに、集積データの一つひとつが学問の基礎を形成していくことになる。

磨製石剣が納めてある墓は、ドルメンという巨大支石墓である。

奈良^{なら}県^{けん}明日香^{あすか}村^{むら}にある蘇我^{そが}馬子^{のうまこ}の墓ではないかとされる「石舞台古墳」のような、巨石が支石の上に載っている形のものだ。それは、北朝鮮の支石墓なのだが、そういう墓は誰でも造れるものではない。それなりの力や地位を持っていた者の墓だったことは確かだ。墓の副葬品として磨製石剣が入っているが、珍しいところでは青銅の剣が入っているケースもある。こうした支石墓は約3万基ほどある。こうした磨製石剣を研究している学者は韓国考古学の世界でも少なく、5、6人ぐらいだという。日本でも数人しかいない。



モニターに映し出された磨製石剣。大きさはさまざまだが、石剣に魅せられた理由の一つは、その美しいフォルムにあるという。

平郡が考古学と出合ったのは京都の花園大学文学部でのこと。漠然と弥生時代に関心があり、考古学研究室に入った。大学の学内には平安京（右京）の遺跡があり、陶磁器の破片も出てくるような環境でもあった。授業で、弥生期の近畿地方の墓で、「方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}」というのがあり、その起源が朝鮮半島にあるのではないかという話を聞き、墓に興味を覚えた。朝鮮考古学の集中講義があるというので聞きに行き、韓国への関心が急速に高まった。

1997年、夏休みを使つて韓国のソウルと扶余^{フヨ}、公州^{コンジュ}を一人で訪ねた。いずれもかつての百済^{くだら}の都のあった所である。遺跡も多く、しつかりした博物館もあった。その旅行で体験した韓国の人たちの親切さに感激した。道がわからないので通りがかりの中年の女性に聞いたら、手を引つ張つて連れていってくれた。遺跡も日本では出合えないものをたくさん見ることができた。韓国との距離が一気に縮まった。滋賀県立大学大学院に進み、人間文化学部地域文化学科修士課程を卒業。論文は朝鮮半島の支石墓についてだった。支石墓のことをもつと深く学ぶため、専門の教授のいる韓国の木浦大学^{モプポ}校の修士課程に留学。さらに釜山大学大学院の博士課程へ進んだ。そこで支石墓のことを研究する中で磨製石剣について書いた。

「最初韓国に行ったときには、言葉もろくにわからなかったのに、とてもよくしてもらいました。韓国の方たちには本当に感謝しています」

平郡は、研究者になる大きな基礎を作ってくれた韓国留学時代をそう振り返る。

美しいフォルムが秘める朝鮮半島の文化と歴史



ところで、磨製石剣のどこに惹かれるのだろうか。

「一つはモノとしての美しさです。左右対称ですごくきれいですね。なおかつ縞模様がある。穴を開けて飾りをつけたりもするんです。中国にある青銅剣を模倣したりしていると思いますが、完全に真似るのではなく、自分たちのアイデアや技術で作っています」

平郡が見せてくれた、ある磨製石剣は、長さ66センチに対して、薄さは1センチもない。「この技術はすごいですね」。

石剣を作る石は、ホルンフェルスといわれる比較的硬く、その加工には技術を要する石が多く、風化して灰白色を呈する。ただ、それをどういう道具を使って、どんな方法で製造したのか詳細はわからない。工房のようなものも、いまのところ確実なものは発掘されていない。痕跡が見つからないのは、小規模か個人レベルで作られていた可能性も考えられる。

ただ、これまで700点以上の磨製石剣が発掘されていることから考えて、共通の文化圏が存在していたのではないかと想像されるという。一つの例として、石剣の外側の線をトレースすると、ほぼ似たような形になっているのだ。とすると何らかの設計図がないといけない。その設計図を共有し、似たようなものを作っていた可能性はある。それだけではなく、埋葬の仕方の情報も併せて、朝鮮半島の南北で共有するネットワークがあったのではないかとも言う。

「面白いのは、似たようなものが何百キロも離れた遠隔地に出たりするんですね。おそらく、古い時代から人の行き来が行われていたことも考えられます」

平郡は、山口県立山口博物館（山口市）にある北朝鮮の平壤周辺で発掘された磨製石剣の資料を見せてくれた。非常に珍しい資料だが、石剣の出来は非常に良いと話す。

考古学実習室で学生に土器の寸法の測り方を指導する。縁の厚さや深さを計測し、方眼紙に図面として落とし込む。基本の技術だ。





「刃をきれいに立ててあります。それと溝が彫つてあるんです。これは血溝といって、剣を刺して抜くときに、溝から血が流れて剣を引き抜きやすいからです」

もちろん、その石剣は実用ではなく、青銅剣を模した副葬品なのだが、リアルな石剣だった。北朝鮮の石剣が山口県に所蔵されているのは、戦前、日本が朝鮮を植民地にしていた時代に収集したからだ。当時、日本が京城（ソウル）に置いた朝鮮総督府は朝鮮支配のために歴史研究を行っていた。植民地事業の一環として考古学はもちろんのこと、民俗学なども体系的に調べていたのである。北朝鮮の資料も、そんな中で見つけられた可能性が高いという。磨製石剣の先駆的な研究者として先述した有光教一も、朝鮮総督府に奉職していた。日韓の歴史が磨製石剣の研究に深く投影されているといつていいだろう。

平郡によると、磨製石剣は青銅器時代が終わると、ぱったりと作られなくなつたという。それ以降は鉄器が入ってきて、大きく時代が変わつたことを示しているのではないかとみる。そういう意味では、磨製石剣が作られていた青銅器時代は、国の形がいま一つはつきりせず、イメージが湧きにくい印象もある。だが、平郡は、その後、王が出てくる時代や、日本でいえば古墳時代のような権力が確定、国が固まつていく時代よりも惹かれるのだという。

「そもそも弥生時代に関心を持ったのは、政治云々ではなく、交易などをもっと自由にやっていた時代の方が面白いと思つたからです」

朝鮮半島が地理学上の特徴として、鴨緑江・豆満江を中心にした国境が定まつたのは朝鮮時代になつてからだ。それまでは国境を意識しないような人々やモノの行き来が、先史時代といわれる旧石器時代以降ずっと続いてきた。そこが朝鮮史の一番面白いところなのではないかと、平郡は語る。研究を

深めていくうちに、日本列島から朝鮮半島、中国へとテーマも関心分野も広がってきた。磨製石剣の場合でいうと、模倣の対象となつた青銅の剣についても研究したいと考えている。

「中国、朝鮮半島、日本列島と来た文化の流れを、いま逆に遡さかのぼっていることになります。でもそれだけでなく、土地、土地で、それぞれの地域の特徴を持ちながら、在地化する過程を遡さかのぼっていくのも面白いと考えています」

在地化というのは、おなじ剣でも、それぞれの土地（国）に伝わっていく中で、形状や特徴が変化していき、その土地なりの物になっていくことだ。

「韓国と日本は、実は似ているようで似ていないことが多いと感じています。その違いを大切にしたいほうがいいと思いますね」

（文中敬称略）



島根大学ミュージアムにある、
縄文時代前期（約7000～
5000年以上前）の泥炭層か
ら出土した最古級の櫓。

安田純也

滋賀県立大学非常勤講師

高麗時代の朝鮮半島で

仏像の中に納められた数々の奉納物。

そこには当時の人々が仏教に寄せた

素朴で篤い信仰の形がある。

安田純也は韓国へ足を運び、

現物を自分の目で確かめながら

手薄だった分野の研究を進め、

人々の心に思いを寄せてきた。

文 千葉望

写真 菊地健志



「仏腹蔵」研究で朝鮮半島の信仰の形を明らかにする



仏像を好きな人であれば、像内にさまざまな納入品が入っているものがあることを知っているかもしれない。納入品とは、仏像を制作・修理した時に納められた経典や願文、織物などのことである。このような品々を日本では「像内（胎内）納入品」、朝鮮半島では「仏腹蔵」という。この品々を一つひとつ丹念に見ていくことにより、当時の人々が仏像に何を託したのか、また当時の信仰のかたちとはどのようなものなのか、さらには当時の人間集団のありさまを理解する手立てとなる。

時には大切なものであるはずの納入品が流出して、古美術商で売られていることがある。私自身、京都府南部の名刹・淨瑠璃寺の仏像に納められていたという「摺仏」（阿弥陀如来）の断片を入れた額を自宅に飾っている。いつの頃から大酒飲みの住職が金に詰まって売り払ったというのだが、本当かどうか。事実とすれば罰当たりな話と思いつつ、版木で刷られた阿弥陀仏が並ぶ素朴な味わいを楽しんでいる。

安田純也は滋賀県立大学などで教鞭をとるかたわら、高麗時代（918～1392年）を中心とする朝鮮半島の仏教史について研究を続けてきた。大学入学以来、現在に至るまで主たる研究テーマは一貫して高麗仏教史だった。東洋であればインドや中国の仏教史、さもなくば日本仏教史の研究者は多いけれども、朝鮮半島の仏教史の研究は手薄な状態が続いてきた。そもそも『日本書紀』や『上宮聖德法王帝説』には、「日本に仏教をもたらしたのが百済の聖明王」と記録されているにもかかわらず、である。

静岡県に生まれた安田は、昔の城跡や古い寺院を訪ねるのが好きな少年だった。私立中学に進んでからは修学旅行で京都や奈良に行くのを楽しみにしていたが、ちょうど1988年に開催されたソウルオリンピックの直後で、行き先が韓国へ変更になった。



やすだ・じゅんや◎1973年静岡県生まれ。滋賀県立大学大学院博士後期課程修了。博士（人間文化学）。大学入学時から高麗仏教史を中心に研究を続ける。現在、滋賀県立大学非常勤講師。

「行く前に何か文献を見ていこうと地元の公立図書館へ行つたときに、白旗史朗しらはたしろうさんの本に出合いました。白旗さんには『韓国的美歴史をたどる』など韓国の文化に関する写真集もあつて、それをずいぶん熱心に見ました」

現地への旅行でも強い印象が残り、安田は「大学に進んだら朝鮮半島の歴史を勉強したい」と思うようになった。

仏教史への興味がわいたのは、浪人時代にたまたま出かけた新宿の紀伊國屋書店で、黒田俊雄くろだとしおの名著『寺社勢力—もう一つの中世社会』（岩波新書）を見つけてからである。ずいぶん渋好みの浪人生だと言うが、結果的にはこの本を読んだことで、仏教を手がかりとして当時の国家や社会のあり方を探究する仏教史研究への関心を抱き、のちの高麗仏教史研究につながっていった。ちなみに『寺社勢力—』は現在でもロングセラーとして読み続けられている。

大学生の安田が漢文で書かれた史料を読むのに悪戦苦闘していたころ、中国仏教史の輪読会で、中国の遼の時代（916～1125年）に編纂へんさんされた『三宝感应要略録』という説話集を読む機会を得た。『三宝感应要略録』は、日本の『今昔物語集』こんじやくものがたりしゅうの種本たねほんとなったことでも知られているが、輪読会を通じて、仏教文化圏の広がりや学ぶことができた。信仰を媒介とする仏教史の史料では特に言えることだが、歴史学の史料は作成者のある種の「意図」に基づいて生み出され、伝えられてきたものである。安田は『三宝感应要略録』に収録された説話を読むことで、作者がなぜそのような史料を書いたのか、常に考えながら読み込むことの大切さやおもしろさも学ぶことができたという。

朝鮮半島の歴史研究に欠かせない仏教史の研究



朝鮮半島における仏教史の中で、安田は高麗時代（918～1392年）にターゲットを定めた。高麗が朝鮮半島を支配していたのは約500年間。この時代は国王から庶民までが仏教を篤く信仰しており、仏教振興政策が進められていた。都の開城には大寺院が建設され、巨大な仏像や仏画なども制作されて仏教美術が花開いた時代である。

高麗前半期の東アジアは、南の宋と北の遼・金という二つの大国が対峙していた時期であり、高麗は二つの大国や日本から仏教文献を収集して刊行し、さらに再輸出していた。二度にわたり高麗版大藏經の版木が刻まれ印刷されたことも、仏教政策の一環と位置づけることができる。

さらに、王宮の正殿である会慶殿において仁王会や藏經会といった仏教行事が開催され、特に仁王会の際には全国各地で3万人の僧侶に食事を施す飯僧も行われていた。仏教教団にかかわる国王の命令は、僧侶が所属した役所である僧録司を通じて伝達され、僧録司所属の僧侶は王宮内に設けられた寺院にも出仕していたという。

安田によると、仏教教団にかかわる制度や慣習を研究することにより、高麗の国家や社会の特質も明らかにするという。歴史研究はさまざまな角度から行うことができるが、安田の場合は「仏教」というはつきりとした視座を持ったのである。大学時代を京都で過ごしたことも影響があつたのかもしれない。

「古い時代の朝鮮半島の歴史では、仏教が大きな比重を占めています。それは今に残る文化財の多くが仏教文化財であることから明らかです」

大学の卒業論文は『「通度寺事蹟略録」の一考察』。通度寺といえど、現在では韓国の三大寺院の一つとされ、多数の朝鮮時代の仏画を所蔵することでも知られている。高麗時代の通度寺も広大な領地

（寺領）を持つており、周囲には長生標ちやうせいひょうという標識が立てられていた。安田は寺の歴史を記した史料の読み込みを通じて、寺領支配の変遷へんせんについて考察して論文にまとめた。

安田が「仏教史を専攻している」と言うのと、「お経を読んでいる」と思われることが多いらしい。ところが実際には、文人の詩文を集めた文集や石などに刻まれた金石文、地誌など、仏教史の史料は政治史や経済史のそれと比べても豊富に残されている。安田はこれらの史料を駆使して、当時の制度や慣習を復元する研究を進めてきた。

また、朝鮮半島の研究のためには朝鮮語の習得が必要である。安田は大学の学部時代からコツコツと勉強したほか、大学で教えるようになってから、半年ずつ2回韓国へ留学し（1回は語学留学）、語学力を磨いた。半年ずつになったのは、講師としての仕事に差し障りさわが出ないようにと考えたからだ。「最初の語学留学の時は、ソウルにある開運寺ケウンサの境内の建物に下宿していました。安い下宿先を探していたら、たまたまお寺の中にある考試院に行き当たったのです。もともとお坊さんの養成機関の図書館か寄宿舎だったものを営利目的で転用したらしいのですが、この時は開運寺に、その後の研究テーマとなる高麗時代の仏像があるとは知りませんでした（笑）。いちばん安い部屋の家賃は2万円弱でしたが窓がない。さすがにそれでは耐えられないだろうと思い、窓のある部屋にしたら2万円とちよつとしましたね。机に本棚と寝台があり、勉強目的の留学には十分でした。まわりは韓国人と中国人ばかりで、日本人は見かけませんでしたね」

春から半年間の留学生活。ソウルの夏の暑さにはさすがに参ったが、境内での生活はなかなか経験のできないものだった。

2度目は日韓文化交流基金の支援を得て国民大学校クンミンに派遣された研究留学で、図書館にこもって史



講師控室で講義の準備をする安田。学生にわかりやすく伝えるために工夫を凝らす。





歴史研究の中でも「仏教」を
テーマに選んだのは、学生時
代京都で過ごしたことが大き
く影響しているかもしれない。

料を読みふけったり、各地の史跡を探訪したりする毎日だった。当時教えていた大学での仕事と両立できるよう半年間の滞在だったが、充実した時間を過ごした。

「仏腹蔵」に込められた人々の願いとは

安田は高麗仏教史の研究を進めるうちに、仏腹蔵へと行き当たった。高麗時代に納入されたと考えられる仏腹蔵は十数例確認されており、研究史料としてはまたとないものでもある。

インターネットなどである程度の情報を確認することができたものの、可能な限り、現地へ向かい、現物を自分の目で見る必要がある。幸い韓国では、ソウルにある仏教中央博物館をはじめ、各地の拠点寺院に聖宝博物館などと呼ばれる博物館が建てられ、仏教文化財の収蔵・公開が進められている。近年発見された高麗・朝鮮時代の仏腹蔵遺物もこれらの博物館に収蔵され、現物の公開はもちろん、図録や報告書の形で情報が発信されつつあった。

安田は全国で公開されている遺物の実見や文献の収集を含めた渡航計画を立てて申請書を提出し、助成金を受けることができた。

「助成金を活用して、史料収集のために3回韓国へ行くことができました。遺物が公開される展覧会の時期に合わせてそれぞれ1週間ぐらい滞在し、各地のお寺や博物館へも足を延ばして現物を見、図録や報告書を集めたのです。現地では駅やバス・ターミナルからタクシーで移動すれば楽ですが、あえて路線バスなどの公共交通機関を使って旅することになりました」

日本とは異なり、韓国の古いお寺は山寺が多い。まだのどかな景色の残る韓国の地方へ行き、路線



歴史好きな少年が韓国への修学旅行をきっかけに研究者を志した。
強い知的好奇心は当時と変わっていない。

バスを乗り継いで旅をする。現地の空気を肌に染み込ませる体験である。バスを降りて数キロの道のりを歩いていると、しばしばお寺に参拝する人の車に便乗させてもらえることもあったという。

地方で図録などを集めてソウルに戻ると、国立中央図書館などの図書館に立ち寄った。丸一日以上かけて史料や研究書をコピーしたり、一部の電子化された文献をプリント・アウトしたりするためである。この作業は毎年渡韓して続けてきたが、旅費や本代の心配をせずに渡航を重ね、研究をだいた前に進められたことは、安田にとつて大きかった。

現地で収集してきたという図録を見せてもらった。私は日本の像内納入品は何度か見たことがあるけれども、朝鮮半島の仏腹蔵を見たのは初めてである。願文や経典、陀羅尼^{だろに}のほか、人々がふだん着ていたのと同じ衣服が納められているのが目を引いた。麻織物が多く、もちろん天然染料で染められている。長い間仏像の胎内にあったため酸化がそれほど進んでおらず、色は鮮やかだった。これを納めた人はどのような願いを託したのだろうか。子供サイズの小さな衣類もあった。もしかすると幼くして亡くなった子供が浄土へ行けるよう、あるいは転生を願って親が納めたものだろうか。想像が広がっていく。

願文とは、私財を出してくれた人々が願いを書いた文章のことである。たとえば開運寺の阿弥陀仏には、「中幹願文」^{ちゅうかんがんもん}（1274年）、「崔椿願文」^{さいちんがんもん}（1322年）、「天正恵興願文」^{てんしやうえいこうがんもん}（1322年）という3種の願文が納入されている。安田は私たちの取材当日、2回生の大学生を対象とする授業で、助成金を利用して得られた研究成果の一端を示す授業を見学させてくれた。3回生になって研究テーマや所属するゼミを選択する前に、参考となりそうな材料を示す目的もあるという。そこでこれらの願文を取り上げた。



助成金を使って韓国へ何度も渡航。
現地の博物館で買い集めてきた図録
は貴重な研究資料だ。



ソウルの開運寺。この寺の仏
像にも「仏腹蔵」があった。
(右2点の撮影 安田純也)

日本でもそうだが、一口に仏教信仰といっても時代によってそれぞれ特徴がある。「商売繁盛」などの現世利益よりも、仏教信仰に基づいた切実な願いが中心である。「中幹願文」が書かれた頃、日本では鎌倉仏教が盛んになっていた。なかでも私は、法然や親鸞ら浄土教の流れをくむ宗派の思想と、朝鮮半島の人々が仏教に寄せていた素朴で力強い思いとの間に、どこか共通するものを感じる。

安田は、「中幹願文」と他の二つの願文は年代的に50年近い隔^{へだ}りがあるものの、仏像修理自体は一連の事業であり、1322年に完了したものと考えている。このように願文を検討していくことで、仏像の成り立ちから修理の過程までが見えてくるのである。

安田の研究は決して華やかな分野とはいえないが、日本にも常に影響を及ぼしてきた朝鮮半島の研究である。日本の仏教や美術を研究する際に、同時代の中国や朝鮮への目配りを欠かすことはできない。残念なことに、近年日本の大学では、漢文文献を利用した東洋学は人気がなくなってきた。長い伝統を持つ日本の東洋学は、かつて世界的な水準を誇ってきたものの、研究職のポスト確保を含めた後継者の育成が困難な状況になりつつあり、安田も非常勤の仕事が続けている。

このような環境の中でも、安田は高麗仏教史を中心とする朝鮮史の研究をコツコツと続けていこうとしている。彼自身が先駆者となって、今後は後進を育てられるようになることを願ってやまない。

(文中敬称略)



地味な分野ではあるが、朝鮮半島での仏教信仰の形を研究することは、同時代以降の日本のそれと対比させ、理解を深めることにもつながる。

生野オモハツキヨ

大阪生野区に、40年の歴史をもつ

民間の識字学校「オモハツキヨ」がある。

日本語に訳せば「お母さんの学校」。戦前から戦後、在日コリアンの中には満足に学校に通えず、日本語の読み書きのできない女性が多かったのだ。不自由な思いを強いられた生活を支援しよう――。有志の活動はいつか教師と生徒の垣を超え、互いに学び合い、心の絆を深めていく。

文Ⅱ歌代幸子
写真Ⅱ菊地健志





在日コリアン女性の日本語識字と
生涯学習を支援する

オモニたちのおしやべりは尽きることがない。毎週、同じ組とともに日本語を学ぶ仲間と過ごすひと時は笑い声もはずむ。

「漢字を覚えたいと思ってここへ来たけど、読み方がいろいろあるから本当にむずかしい。もう20年以上になるけど、昔は仕事しながら子育てもして必死だったから、休んではまた来たりしてな。しんどいこともあったけど、おばちゃんもつと前からおったものねえ」

3人の子を育てあげた韓在花^{ハンジェファ}は7人の孫がいて、今も仕事を続けながら週2日通っている。そんな韓が慕うのは、この学校でも最高齢87歳の玄斗^{ヒョド}現^{ヒョ}だ。昭和4年生まれの玄は3歳のときに済州島^{チョジュド}から日本へ来ていた。小学校へ通う歳になっても、家が貧しかったのでメリヤス工場で夜遅くまで働いたという。

「小学校には夜間もあったけど、工場は約束した時間に帰らせてくれへん。それが辛くて学校をやめてしまい、ほんまに悔しかったわ」

やがて父親は病気になって済州島へ帰り、まもなく訃報が届く。4人兄弟の長女だった玄は一家の生活を支え、戦時中は疎開先を転々とした。戦後、大阪へ戻ると、ゴム工場を営む夫と娘4人を育てながら働きづめの毎日を送る。50代を終える頃、近所の人から日本語を学べる学校があると聞いた。

「私らは子どもの時分から落ちて暮らしてないでしょ。ずつと苦労ばかりで勉強もできなかったもの。でも、ここではひらがなや漢字も覚えられて、それは嬉しいなあ」

カラオケへ行っても、歌詞を見ながら歌えるのが嬉しいというオモニたち。かつては我が子を通う学校や病院などでも、日本語の読み書きができないことで辛い思いをした。それゆえ子育ての手が離れた後、自分のためにと学び始める。まもなく80代になる洪弘子^{ホンホンジャ}も週1度の授業を楽しみにしている



いくの・おもにはっきょ©1977年、大阪市生野区の地域問題懇談会に1人のオモニが「文字を学ぶ場所がほしい」と要望し、大阪聖和教会で「生野識字学校」が誕生。半年後にオモニの数が30名を超え、独立して運営される。今日まで延べ1000人以上のオモニたちが日本語を学び、ボランティアのスタッフも200人以上におよぶ。

という。

「やっぱり言葉遣いは大切やし、日本の常識も覚えなあかん。私は一人暮らしだから、家にいてぼつとしてるのはあかんしね。今はダンスをして体を動かすのが楽しいし、プールにも毎日通ってる。おかげですつと健康です」

日本語の読み書きを覚えたい

大阪市生野区^{いくの}にある「生野オモニハッキョ」は、民間の識字教室である。オモニは朝鮮語で「お母さん」、ハッキョは「学校」を意味する。生野区には数多くの在日コリアンが住んでおり、戦前から戦後へと様々な事情で日本を訪れ、日本語を学ぶこともなく生活してきた女性が多かった。

夜間中学へ行く余裕もなかったオモニたちは、「子どもが学校から持つて帰るプリントを読めない」「駅の標示が読めなくて困る」といった悩みを抱え、日本語の読み書きを覚えたいと切望していた。その願いを受け、1977年に生野区の大阪聖和教会で始まったのが在日コリアンのための識字教室だ。日本でも初の取り組みとして注目され、小・中学校の教師を中心に生徒も40、50人ほど集まる。やがて教会では手狭になって隣の聖和社会館で授業をするようになった。だが、当時は指紋押捺など社会的な問題が表面化するなか、教師どうしの軋轢^{あれき}も生じ、4年目に空中分解の危機に陥る。人手が足りなくなり、「手伝ってもらえないか」と頼まれたのが、後に30数年のスタッフになる金野昌子^{こののまさこ}だ。大阪府外郭団体の職員だった金野は猪飼野朝鮮図書資料室^{いかいの}へ通っており、そこで知り合った女性からオモニハッキョを紹介された。



5年に一度、「作文はいややなあ」と言いながらも、オモニたちは自分の思いを綴る。子ども時代や戦争のときの辛い記憶……遠足や孫の話など楽しい思い出も増えている。

全クラスのオモニが集まる「みんなの会」では、七夕の短冊に願い事を書いたり、夏には暑中見舞い、12月にはカレンダーを作る。

ル て
行い かつ
に ち
有 あ
有 あ

年 ち
前 え
し
い

で た お す い い
す り 茶 す い
。 お を 。 す 。 ま
有 し の 今 月 事
馬 や かん 今 曜 し
温 べ だ 二 け ぐ
泉 リ ソ 十 孫 ま
ニ を づ 三 と て う
三 さん け 日 暮 く
年 ち ん 結 け ら す
前 え 女 氏 こ し
し を 婚 と し
い 食 し て 棄 た
ブ ま いた 曜





昭和4年生まれの玄斗現は30
数年通い、今や最高齢の87
歳。「家におってもテレビだ
けやから」と週1度の授業を
楽しむ。

「最初は自分も朝鮮語の勉強ができるかなと思ってたんです。でも、オモニたちの姿を初めて見た時の衝撃は忘れられません。学校へ行ったことのない人たちばかりで、それはもう真剣に勉強している。私もお手伝いしたいという気持ちになりました」

金野が生まれ育った東成区（あしなり）も在日コリアンが多く暮らし、不当に差別されている人たちを見てきた小・中学校のクラスでも3分の1ほどが在日の生徒で、ひそかに恋心をつのらせた男の子もいた。彼のことを知りたい一心で朝鮮語を勉強したいと思い、祖国へ帰る友だちも相次いでますます関心がつくる。

就職後、ようやく朝鮮語を習い始め、その縁でオモニハッキョを手伝うようになるが、日本語を教える教育を受けたこともなかった。「あいうえお」も書けないオモニたちと向き合い、自分も学び直すような日々だった。

「オモニたちは常に一人で行動できず、人に騙だまされることも多かったようです。買い物やお医者さんへ行くとき、バスや電車に乗っても駅名や標示が読めるようになって、行動が広がったと言います」
初めの頃は金野もオモニの真意を理解できず、きつい言い方をされたり、怒られて帰りに駅で泣いたこともあると洩もらす。一人悩んだ時期もあったが、新たな人の輪が広がっていく。会社勤めをしながらか手伝う人、大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）や大阪女学院短期大学の学生ボランティアも加わり、意欲あるスタッフに助けられた。

その一人、木下明彦（きしたあきひこ）がオモニハッキョへ来たのは83年2月のこと。猪飼野朝鮮図書資料室で朝鮮語を学ぶ仲間に誘われ、初めて訪ねたときの緊張感と覚悟は鮮明に覚えているという。木下も教員免許などなかったが、翌週から8人の組を一人で受け持つことになる。広告代理店で多忙な業務に追われ



教室は「あ」から「き」まで7組に分かれ、二人のスタッフが交代で指導。各自の学習レベルに合わせた教材を用意して授業を行う。

ながらも、週2日の授業は欠かさず通い続けた。

「オモニと過ごすのは楽しいし、授業の内容を考えるのも面白かった。児童文学作家の灰谷健次郎はいたにけんじろうの本を読んだり、新聞のコラムを切り抜いて用意したり。会社でこそつとコピーしてました（笑）。オモニたちも、新聞を読みたい、カラオケの歌詞の意味を知りたいとか、何をしたいかわかってくるし、長く付き合っていれば家族の様子もわかる。途中で来られなくなる人がいても、また通い始めた時に『あら、先生はまだ居てくれたん？』と喜んでくれますから」

木下にとつても心の拠り所と感じられたのは、95年1月の阪神・淡路大震災の時だ。当時は神戸支社勤務だったので、仕事を終えてから駆けつけても授業には間に合わない。それでも「オモニの顔だけでも見たい」と通うことが3カ月ほど続いたと木下は懐かしむ。

ボランティアスタッフとオモニたちの絆

毎週月曜と木曜の夜7時半から始まる授業では、40人ほどのオモニたちが学ぶ。ボランティアで関わってきたスタッフは200人以上にのぼり、家族ぐるみの絆も深まっていた。長年、オモニハッキョの代表を務めた金野にとつて、夫の恒実つねみは頼もしい同志でもあった。「オモニハッキョ手伝ってくれへん？」と頼むと、「うん、行くよ」と即答。オモニたちには、こうすれば字を覚えらるだろうか、こんなことに興味を持ってもらえるんじゃないかと、テキスト作りに情熱を燃やした。

料理をふるまうことも好きな人で、ボランティアの学生を家に招いてご馳走し、夜遅くまでおしゃべりしたこともある。20周年記念パーティーの前夜には、準備に追われるスタッフのために食事を作っ



てくれた。

「彼はすごく熱心で、家でもオモニハッキョのことを話し合うと、互いに真剣になって喧嘩したこと」と苦笑する金野。その夫ががんで闘病し、48歳で先立った時もスタッフが揃って別れを惜しんだ。ほどなく43歳の若さで逝った女性スタッフもいた。自身も在日コリアンとしてオモニたちと親身にふれあつてきた文幸子は、亡くなる1カ月前、「オモニハッキョに行つてみない？」と姪を誘つていた。それまで幾度誘われても、まだ20代の姪は「在日」の活動に参加することに抵抗があり、「今はちよつと……」と曖昧に断つていたが、余命わずかと知らされた叔母の頼みを受けようと決めたのだつた。

2001年1月、その文の姪である文岩優子はオモニハッキョを訪れ、スタッフの一員となる。だが、心に引つかかる違和感はいばらく消えなかつたと顧みる。

「在日韓国人3世である私が、自分のハルモニと同じ1世のオモニたちに日本語の読み書きを教えるということは、何かとても奇妙な歴史の歪みであるように思えてしまうのです。オモニたちが一生懸命に学ばれている姿を見れば見るほど、違和感はどうどんふくらみ、自分自身でも抱えきれないほど大きなものになっていきました。なぜ、歴史のはざままで教育を受ける機会を失い、日本語の文字がわからず苦勞をされてきたオモニたちが、こんなに大変な思いをしながら日本語を学ばなくてはいけないのか……自分のやつていることは、かつて日本が行つた同化政策と同じことをしているのではないか……と苦しくなつたのです」

ある日、先輩の木下にふと苦しさを洩らすと、数日後に自宅へ招かれた。実は木下も同じ葛藤を抱え、オモニに聞いたことがあつた。するとオモニは大笑いしてこう答えたという。

「何、言うてますの、先生。私らはなんぼ日本語覚えても、朝鮮人やで」

その言葉を聞いて、文岩はずっと苛まれてきたものから解放たれる気がした。それは日本の社会で「在日」であることを隠して生きている自分を許し、肯定されるような言葉でもあった。その後はオモニたちと積極的に話し、済州島の話や方言などを教えてもらうことも楽しくなったという。「今は私にとって生活の一部。オモニたちに教える立場ではなく、私自身も本当にたくさんの方を学ばせてもらっています」

未来に向けて40年の活動を振り返る

在日1世のオモニを対象に始まった教室だが、高齢で施設へ入る人、亡くなる人も多くなってきた。一方、結婚や仕事を機に日本へ来たという60代以下の参加者も増えつつある。春と秋には遠足や焼き肉パーティをして親睦をはかり、そうした行事を率先して企画するのはスタッフ歴25年の坂口美知枝だ。「オモニが喜ぶならええやん!」とフットワークが軽い坂口は、(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成金申請にも尽力した。

オモニから集める20000円の月謝は寄付として全額を聖和共働福祉会へ納め、テキストや教材印刷などの費用はスタッフが負担してきた。助成金で少しでも快適な学習環境を整えたいと、インクジェット複合機や文具を購入。「オモニハッキョ」のネーム入りスリッパも揃えた。

なにより喜ばれたのはバスによる日帰り旅行が実現したことだ。2014年には滋賀県米原市の醒井宿を訪れ、ぶどう狩りも楽しみ、翌年には和歌山県の湯浅醤油蔵を見学。さらに北九州で20年続く識字教室「青春学校」にも有志のオモニたちと訪れた。積極的に交流しようとする姿を見て、「さら



和歌山県の湯浅町へバス旅行。醤油蔵を見学し、干物の買い物を楽しんだオモニたちは、「小学生が遠足へ行くみたいにワクワクしました」。(写真提供 金野昌子)

助成金で購入した「オモニハッキョ」のネーム入りスリッパはオモニたちに喜ばれた。



に頑張ろうという気持ちになった」と同行した坂口はいう。

スタッフはオモニたちが世代を越えて主体的になっていく様子を感じてきた。今、2017年に迎える40周年行事の準備に励んでいる。これまで5年ごとに大きな催しを行ってきたが、スタッフの年齢も高くなり、いつまで続けられるかという危惧もあつた。そこで「生野オモニハッキョ」の40年を振り返ろうという声があがり、年表作成やオモニの合唱団など新たなアイデアも次々出てきた。

5年に一度、オモニたちも自分の思いを作文に綴り、文集にまとめている。1982年に作つた初の文集にはこんな作文があつた。

「私はオモニ学校に来てもうすぐ一年になります。最初は住所と名前が書けるぐらいだったけれど今は大分なれて、小学校の本を読めるようになりましたので、主人も、子どもたちもよるこんでいます。お母さんは、はやいねえ。一年もたたないのに三年の本も読めるね」と言ってくれて本当にうれいす。これからもいっしょけんめいがんばって、子供のプリントもスラスラ読めるくらいになつたらもつとうれしいです。先生も休まず、雨の日も、寒い日も、暑い日も、勉強を教えにきていただき、本当に心から感しゃしています」

そんな思いを受けとめながら35年、オモニたちと歩んできた金野は、この数年、母親の介護にも明け暮れた。96歳で逝つた母は、娘がオモニハッキョと関わることを誇りに思っていたのだと知る。「こは私の人生そのもの」という金野とともに30数年、オモニたちと向き合ってきた木下も変わらず心がけていることがある。「僕はただ笑わすのが好きなんやね。まあ大阪人やな（笑）」と。

今なお熱意あふれるスタッフのもとへ、オモニたちも頑張つて通い続ける。誰もが言う。

「ここへ来たら面白い話が聞けるし、いい友だちもできる。それが楽しいの！」（文中敬称略）



オモニハッキョの“長老コンビ”と慕われる金野昌子と木下明彦。授業後、スタッフ同士の飲み会も楽しみのうち。

青鶴8 學術論文集

渡邊雄二

松谷基和

平郡達哉

近代日本における朝鮮時代絵画研究

——関野貞^{ただし}の絵画調査とその背景

九州産業大学芸術学部教授

渡邊雄二

はじめに

第二次大戦前、日本の美術史研究では韓国絵画の研究は個々の作品を紹介することが主で（注1）、それらを系統だつて位置づけることや全体像を描くことはほとんど行われなかったといえよう。本論ではそうした近代の韓国絵画の研究のなかで、建築史家・関野貞^{せきのただし}（1867—1935）による調査の足跡を取り上げて、それが美術史研究や韓国美術理解において、どのような意義を持つのかを考察したい。関野はよく知られるように明治末期から国内、そして朝鮮、中国に赴いて、建築、遺蹟調査

を積極的に行つた（注2）。その活動は日本の大陸進出のなかで、当地の文化財を確認し、その文治政策の一端を担つたとされる。ただし関野は調査活動などを示す日記（注3）を残しているが、そこには調査や研究についての考えを表明することなく、日々の公務のスケジュールを克明に示すのみで、その調査の目的性や自身の動機については殆んど語られない。

1910年、日本が朝鮮を統治し始めた前後に日本主導により李王家博物館（1909年）や朝鮮総督府博物館（1915年）などの博物館施設が開設され、調査によつて発掘された資料や購入による美術作品が収集された。東京文化財研究所に保管される関野の朝鮮時代絵画

の調査カードはそうした博物館施設をはじめ、京城（ソウル）を中心とした個人、日本の施設、寺院など所蔵者を関野が訪ね、日に数十件というように迅速ではあったが、自身で調査したことを示す（注4）。その成果が自著『朝鮮美術史』（1932年）の絵画編の記述や、『朝鮮古蹟図譜十四』（1934年）の朝鮮時代絵画についての編纂になったと思われる。関野は本来、美術史の門外漢でありながら、この時代の日本における韓国絵画調査を推し進めた研究者であった。そして、東京文化財研究所の朝鮮時代絵画の調査写真を検討していくとそれらは、ほとんどが関野の調査の成果と考えられる。すなわち近代において関野ほど朝鮮時代絵画を調査した日本人はいなかったようだ。

関野のほかには日本植民地期において朝鮮の文化に関心を示した柳宗悦が、工芸品をはじめ美術品についても収集、言及していることが、わずかな認識であったと思われる。しかし、柳の視点は実用的で工芸的な美術、民意を反映した素朴ないわば「民芸」的な作品に関心が集中し、韓国絵画の系統的な理解、あるいは作家ごとの作品の検討などは行わなかった。これには柳自身の思想、志向のほかには当時の韓国絵画の流通や収集の事情もあつ

CHEONGHAK

たものと推察する。

また、李王家博物館や朝鮮総督府博物館の運営に関わった学者が、雑誌コラムに投稿するなどわずかであるが朝鮮時代絵画への言及があった。そのなかには注目したい内容もあるが、彼らも美術史、絵画史の研究者ではなく、研究を継続、発展させることはなかった。

その後、朝鮮総督府博物館に勤めた熊谷宣夫（1900—1972、1940年に朝鮮総督府博物館嘱託へ1944年3月まで）が第二次大戦後、とくに仏画を中心に韓国の絵画について論文を発表し（注5）、1960年代から70年代に次第に韓国の仏画の研究がさかんになり認識が深まるまで、日本での韓国絵画への関心はまことに薄かったと言えよう。

関野の植民地期朝鮮での美術資料調査では絵画の調査が多く、なかでも画員や文人画家の山水、翎毛、風俗図などを数多く調査しており、戦後の絵画史研究ではまず仏画から韓国絵画に関心が持たれたことは異なる。これも関野の時代の絵画収集の傾向をあらわしているものと思われる。

本論では東京文化財研究所に残される関野の絵画調査のフィールドノートと関連の写真カードが関野の調査の

状況を示すことに注目し、そうした関野の調査をとりま
く植民地期朝鮮における朝鮮時代絵画を中心とする文化
財の収集や展示活動を概観し、関野の絵画についての調
査や研究を位置づけたい。関野の韓国絵画史における業
績はこれまで触れられることがほとんどなかったが、本
論によりその活動を認識し、近代日本における朝鮮時代
絵画研究の様相を垣間見ることができればと考える。

また、日本の植民地期朝鮮での調査活動や博物館活動
については植民地統制のための装置（注6）などという
位置付けがなされるが、具体的な調査活動の様相やその
意義など、さらに解明する必要がある。それについても
関野の調査活動をめぐる同時代の背景をさぐり、そうし
たいいわゆる日本の植民地への文化政策のステレオタイプ
的な意義付けのなかで、具体的な活動事例を探索する機
会になろうかと思われる。なお、本文中の日本年号は史
料に記されているものについて表記した。また、本論で
は韓国の近世絵画について朝鮮時代絵画と総称する。

本研究は平成25年度の（公財）韓昌祐・哲文化財団の
研究助成により、基礎的な調査を行い、その後、調査を
重ねたことにより報告するものである。

1 関野貞の絵画調査

1 関野の古墳壁画への関心

関野は1902年より東京帝国大学工科大学長・辰野
金吾の命を受けて、慶州、開城の建築、古蹟の調査を行っ
た。その後、1909年には大韓帝国の事業として韓国
古建築物調査が依頼され（注7）、1910年には社寺古
蹟等芸術に関する調査を朝鮮総督府より依頼された。こ
れ以降、関野は朝鮮全土の古墳の調査を行うが、絵画と
しては古墳内部の壁画の調査を行った。これは無論古墳
調査の一環であり、のちの絵画のみに関心を持つて行う
調査とは異なる。関野はこれらを絵画資料として、『国
華』などの美術雑誌に発表する（注8）。

関野は1912年10月に平壤遇賢里の三大古墳に至り、
情報を得たが内部まで確認できず、12月に美術学校日本
画科生徒太田福蔵が6年前に郡守古墳の壁画を写した摸
写図を見て、翌年9月、総督府の事業として発掘し、郡
守二墳の古墳から壁画を見出した。李王家博物館を通じ
て東京美術学校助教授・小場恒吉、太田両氏に摸写を託
した。

関野は克明に調査の経緯を記し、その記録として壁画

写本を作成した。東京大学工科大学では模写画あるいは実際に古墳から壁画を模写し記録した。これらを高句麗時代古墳と位置づけ、古いものは中国北魏以前、新しいものは北魏式の感化を示し、日本の飛鳥式との連鎖が見られるとする。これにより「高句麗時代の絵画文様の真相を知るべきのみならず、以て支那六朝時代の芸術の一斑を推すことを得べし」とし、「是れ蓋し今日までに知られたる東洋の最古の絵画なるべく、依りて以て当時の絵画の様式の如何なる者なりしやを窺ふに足るべく、東洋の芸術史上多大の光明を吾人に寄与する者と謂ふべきなり（傍線渡邊、以下同様）」（注9）と結論付けた。すなわち、中国やアジア全体の中で最古の絵画ではないかと関野は推察した。これはもともと韓国の成り立ちを中国楽浪郡に置くなど、中国を主体とした文化観からこうした視点が生まれている。

これら壁画のうち梅山里四神塚玄室壁画、安城洞双楹塚玄室および前室壁画、遇賢里大墓玄室壁画、同天井図様の東京大学工科大学模写本は、1931年の朝鮮名画展覧会に出品された。関野の報告によるとこの模写本は李王家博物館で模写したものをさらに写したものである。『朝鮮古蹟図譜』にまとめられた記録は、第二次大戦前

の古墳の状況を伝え、考古学的に重要な価値を持つ。

2 初期の朝鮮時代絵画調査

関野の朝鮮時代絵画調査については、東京文化財研究所に調査カード（フィールドノート）154枚および関連の写真カード294枚が残される。写真カードに記入者は記されないが、その内容は関野の調査カードの調査内容と一致し、それらが関野の調査の成果であることが判明した。調査時期については彼の日記の記述に等しく、動向とその内容を伝える。

関野貞の絵画についての調査カードは、明治44年（1911）12月29日付けの「愛媛・石手寺地藏菩薩并十王像」を最初とする。この日は日記の記述はない。（写真1）このカードには昭和7年（1932）5月29日に再見したことを記す。そのおり晋州の朴在杓氏所蔵仁斎（姜希顔）と李上佐の絵との比較を行っている。

その後の調査の状況をカードと日記の記述によって列記する。

（カードの調査日付）（調査作品）（日記記述）

（1914）大正3年3月23日 埼玉・法恩寺釈迦三尊阿難迦葉画像（日記）古社寺保存会出席

大正5年3月24日 長崎・最教寺涅槃図

(日記) 古社寺保存会出席

大正5年8月31日 三重・西来寺円覚曼荼羅

(日記) 現地調査

大正6年4月12日 香川・屋島寺観音画像

(日記) 現地調査

大正9年12月24日 愛知・大恩寺応供曼荼羅

(日記) 現地調査

大正10年9月4日 和歌山・高野山円通寺薬師図

(日記) 現地調査

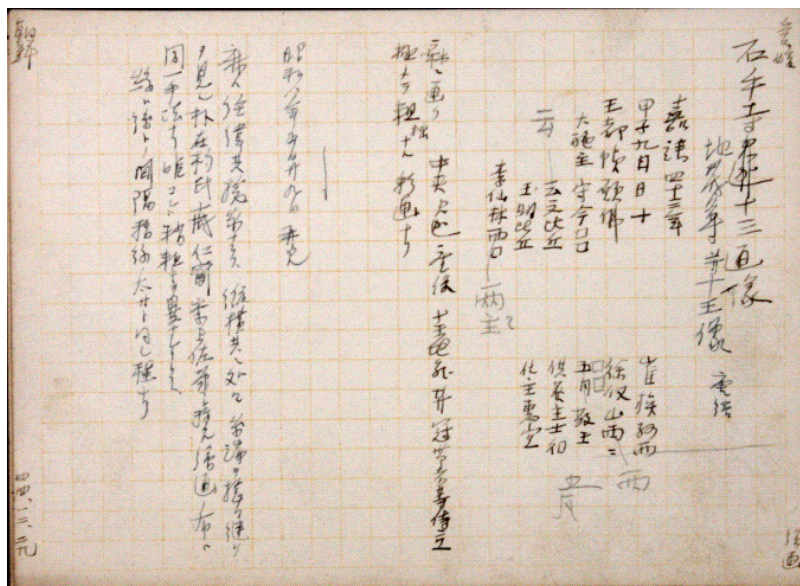
大正12年4月13日 愛知・大恩寺王宮曼荼羅

(日記) 記載なし

大正12年8月17日 岐阜・秀文岳陽樓図

(日記) 記載なし

など国内の仏教絵画を中心に調査を行っている。関野の日記の記述から、作品は東京の古社寺保存会に作品を持ち込んだものや、日本国内の地域調査の折に調査しており、絵画作品は地域での総合調査の一部であった可能性が高い。これら関野の初期の朝鮮時代絵画調査は、ほかの調査目的に伴って行われたもので、もっぱら絵画を中心に調査したものではなさそうである。



1 関野貞調査カード(東京文化財研究所)



2 東亜日報社旧社屋（2016年10月）

CHEONGHAK

こうした記述を含む絵画調査カードは関野が総合調査全体の中から韓国の絵画作品について選び出し、東京文化財研究所の前身である美術研究所に保管したのではないかと考える。このような個々の調査から、まとまった数の絵画調査を行うようになったのは1930年からである。その大きな契機となったのが、京城（ソウル）での「古書画珍藏品展」であったと思われる。

3 京城の「古書画珍藏品展」

この展覧会は1929年に吳鳳彬^{オボンビン}が設立した朝鮮美術館が主催となり、1930年10月17日から22日にこの展覧会の後援をした東亜日報社（光化門通り^{グシファモン}）で開催された。新聞の告知に場所は「東亜日報社楼上」とある（『東亜日報』1930年10月10日告知）。また、同じく「出品期限十月十五日」（『東亜日報』10月14日、10月16日告知）とあることから、自主出品の可能性がある。さらに、10月20日の記事には「古書画珍藏品展第二回新出品」とあり、出品が追加されたようだ。

出品作品は目録が印刷され、それを見ると98件出品があり、その内訳は晋州の朴在杓^{パク・サギョク}以外は朝鮮美術館をはじめ京城の個人所蔵者（李淳命、李漢福、李道栄、咸錫泰^{フシソクテ}ほか、日本人森悟一、和田一郎^{ケンワン}）である。権幸佳氏は

彼らの多くが「朝鮮美術館の顧客であり、代表的収集家」とする(注10)。権氏も示すように、この展覧会はこの時代の京城の美術収集家の趣味を大いに反映していたといえよう。すなわち大部分が朝鮮時代の書画、「とくに阮堂(金正喜)をはじめ、鄭敼、金弘道、張承業、崔北など朝鮮後期から末期の書画が大半をしめている」(権氏)ことが特徴であった。書も多く出品され、本来の朝鮮時代文人の余技としての書画観をよく表しているといえよう。出品目録である「朝鮮古書画珍藏品展覧会出品目録」には「正廟朝御筆帖正祖、東賢珍墨李退溪等、行書帖石峰韓濩、行書帖阮堂金正喜、写経帖安平大君」ほか近代の金玉均などの書が出品されたことを記す。

これには呉鳳彬が朝鮮美術館(権氏によれば美術館といっても大型の展示会場を備えたものではなく、画廊程度のものであったようだが、ゆくゆくは展示場を備えた美術館を計画していたらしい。場所は光化門ビルディングとし、現在の世宗文化会館の裏にあったと伝え、東亜日報に程近い)は、消え行く古書画を収集し人々の鑑賞に努めた、すなわち朝鮮時代の文化を顕彰するために収集・展示活動を行ったとされる。これに東亜日報による民族主義的文化運動の応援や、呉鳳彬と韓国で最初の書

画人伝『權域書画徴』を公開した呉世昌との交遊、そして、この時代にさかんになった古書画の流通などが展覧会を開催した要因と考えられる。権氏が紹介する三星美術館所蔵の呉鳳彬の書画の出納リストからは購入価格、売却価格、それぞれ相手を丁寧に記載していることから、単に伝統的文化を朝鮮の人々に認識させることが目的でないと考えさせる。したがって展覧会活動も商業的な目的も含んでいると見たほうがよい。

注目すべきは関野が、こうした植民地期朝鮮の人々の書画収集活動や展覧会活動の輪に加わっていたことである。関野の調査活動は日本政府による朝鮮の文化的統治の先鋒となつて、いわば官の立場で遺蹟や文化財を調査したことが、民間で活動したとする柳宗悦と比較されがちだが、絵画の調査では現地の人々に学ぶ点が多かったのではないかと考える。

それはまず、関野が呉鳳彬の開催した「古書画珍藏品展」を実際に京城で観覧し(日記の10月17日と21日に観覧が記される)、呉鳳彬と日本での朝鮮書画展の開催を画策、もつといえは約束したことである。関野の調査カードのなかにこの展覧会での調査リストもあり、この展覧会を契機に朝鮮時代絵画への関心を高めたと思われる。

このリストを見るとすでに絵画のみをリスト化しており、書を対象としなかったことがみてとれる。

4 東京の「朝鮮名画展覧会」

このち日本で開かれた「朝鮮名画展覧会」が呉鳳彬と関野の合意で計画され、1931年3月に東京上野の東京府美術館で開催の運びとなった。主催は国民美術協会で、東京朝日新聞社が後援した。展覧会目録も展覧会にあわせて公開されたが、それには255件の作品が掲載されている。しかし、実際には追加出品も加えて400件以上の出品という、それ以降にも例を見ない大規模の展覧会として開催された（注11）。前年の京城での「古書画珍藏品展」との大きな違いは、前者が京城を中心とした個人所蔵家の作品を展示したのに対して、東京の「朝鮮名画展覧会」の出品所蔵者は李王家博物館、朝鮮総督府博物館や東京美術学校などの朝鮮と日本の公的な施設の所蔵品が多いことである。この展覧会の広報にも「この二つの博物館（李王家博物館、総督府博物館）が作品の価値を内外に知らしめるため3月に東京で展覧会を開催することにする」と『東亜日報』（1931年1月17日）に掲載された。また、朝鮮での展覧会が多く書を飾るのに対して、日本では基本的に書のみ作品は含まれな

CHEONGHAK

かった。ここに関野ははじめ日本の朝鮮時代美術の理解の傾向と限界が感じられる。

5 「朝鮮名画展覧会」前後の関野による調査

先述したように1930年10月の京城・東亜日報社屋で「古書画珍藏品展」が開催され、これを契機に関野は朝鮮での所蔵者の調査を行ったと思われる。以下、調査カードと『関野貞日記』による調査箇所を挙げる。

昭和5年10月27日 京城・高木徳弥氏

昭和5年10月28日29日 晋州・朴在杓氏

同年帰国して

昭和5年11月14日 大阪・園田方治氏安堅筆夢遊桃源図

昭和5年12月15日 愛知・七寺地藏曼荼羅

昭和6年3月8日 小宮三保松氏

これら調査された作品の多くは朝鮮名画展覧会で展示されている。この展覧会が国家ぐるみで日本が朝鮮の美術、絵画を日本国民に周知させようと目論^{もくろ}んだ（権氏）とするのは、このやや個人的な関野と呉鳳彬のやり取りからすると私見では違和感がある。たしかに「朝鮮名画展覧会」は、名譽総裁に李王^{イイ}垠殿下を戴き、国民美術協会、李王家博物館、朝鮮総督府博物館の関係者などを委員として掲げるが、朝鮮側委員の前朝鮮商業銀行頭取・

和田一郎や総督府博物館鑑査委員・鮎貝房之進あゆかいふさのしんは作品の所蔵者でもあり、委員のなかには呉鳳彬の名も見える（同展覧会目録）。展覧会に関わった関係者の多くは関野の京城での書画を通じた交友関係の人物たちと思われる。

展覧会目録の緒言には「（関野）博士によつて先づ口火が切られ、次いで和田一郎氏の介による総督府の協賛となり、朝鮮側委員会の組織となり、李王家総督府両博物館其他諸蒐集の出品となる」というように呉鳳彬との約束を果たすかのように関野の投げかけに関係者の賛同が広がったようだ。また、その緒言中に「此陳列によつて人は朝鮮画の決して必ずしも稚拙ならず、或年代に於ては日本画に劣らぬ程のものさへ作られたことを知るであらう」とある。この言葉を讀むに「朝鮮名画展覧会」は朝鮮の絵画文化を貶めるおとしようなものではなく、関野が知る日本と朝鮮に所在する名作をできる限り集めたものといえるだろう。

無論、国家的な後押しなくして、この展覧会は成立し得なかったと思われるが、残念ながら日本国民の支持を得ることなく、入館者は限られた人数であつた（注12）。また、関野自身もその日記を追つてみても、多忙な中、この前後に中国作品の展示を行つていた。3月17日、東

京府美術館にて支那工芸展覧会開催、前日、関野は陳列し、夜11時半に帰宅している。18日には「伊東（忠太か）、奥田誠一」、19日には「阪谷（芳郎か）、香取秀真、六角紫水」が講演した。関野も20日に「支那ノ瓦塼」について講演するなど、朝鮮名画展覧会のみに関わることができなかつた。

しかし、関野の展覧会あるいは朝鮮時代絵画への関わりは、単に興行として、あるいは日本国内への文化的啓蒙としてではなく、作品自体への関心も高かつたように思われる。それは、作品調査のために出品作品の写真撮影を丁寧てに会期中に行つてることが文化財研究所の写真カードからうかがえる。写真カードには会期中の日付が記されているカード72点があり、美術研究所の写真カードとして残した。

さらに関野はこの展覧会以降、京城において積極的に朝鮮時代絵画の調査を行つた。この目的は大正時代初頭から責務となつている『朝鮮古蹟図譜』の刊行とも思われ、そうした国家的な事業としての責務もさることながら、研究者としての関心もあつたのかもしれないと思うようになった。この絵画編ともいえる14編はおそらく当初の計画にはなかつたと思われる。それは図譜14編に掲

[illegible]

(表)



(裏)

3 朝鮮時代絵画写真カード(東京文化財研究所)

載された絵画の多くは、刊行された昭和9年の2、3年前に調査された作例だからである。関野にとって「朝鮮名画展覧会」は、彼の朝鮮時代絵画調査の経過のうちの一部で、さらに調査を行ったと思われる。

以下、関野の絵画調査の足跡を追う。関野の京城での朝鮮時代絵画の調査は李王家博物館と総督府博物館の作

品調査が数量として突出している。

○李王家博物館の調査

大正10年（1921）8月5日にすでに32件を調査しているが、昭和7年（1932）には、7月16日（31件）、18日（14件）、19日（14件）、昭和8年には8月16日（16件）、9月1日（70件）、2日（20件）である。さらに日

付がないものが76件で、あわせて273点である。大正元年の李王家博物館の書画目録に記される点数が420点である。そのなかから選り出して調査したものである。

○朝鮮總督府博物館の調査

大正15年（1926）6月9日にすでに14件調査し、そのほか10月10日、13日、17日（3日間合わせて125件）という日付があり、これらは日記から昭和7年と推察する。

昭和7年の調査については写真撮影も丁寧に行い、調査した作品の写真カードが東京文化財研究所の写真カードのなかに含まれる。すなわち東京文化財研究所に残される朝鮮時代絵画関係の写真カード、調査カードのほとんどが関野の調査の成果によるものであったことが判明した。「昭和7年9月1日」の日付の写真カードは49件ある。

「朝鮮名画展覧会」に関連して1934年に刊行された『朝鮮名画集』（脇本榮之軒編）も、これらの関野が撮影した写真を使用したものと考ええる。

○京城個人所蔵品の調査

関野が調査を盛んに行ったのはこの昭和7年から同9

年の時期であった。したがって、関野が調査したのは博物館ばかりでなく、京城や晋州の個人蔵の作品も多い。日記とファイルノートから関野の調査先を日程の順に見る。

昭和8年8月16日（日記）（午）前、李博平田君ノ案内ニテ李朝絵画調査。后二時、鮎貝氏訪問、自（巨）然万叡図巻ヲ見ル。（調査カード）金明国達磨像鮎貝房之進氏ノ話、阿部充家氏所蔵（麻布三軒家）、鮎貝氏蔵巨然萬叡図

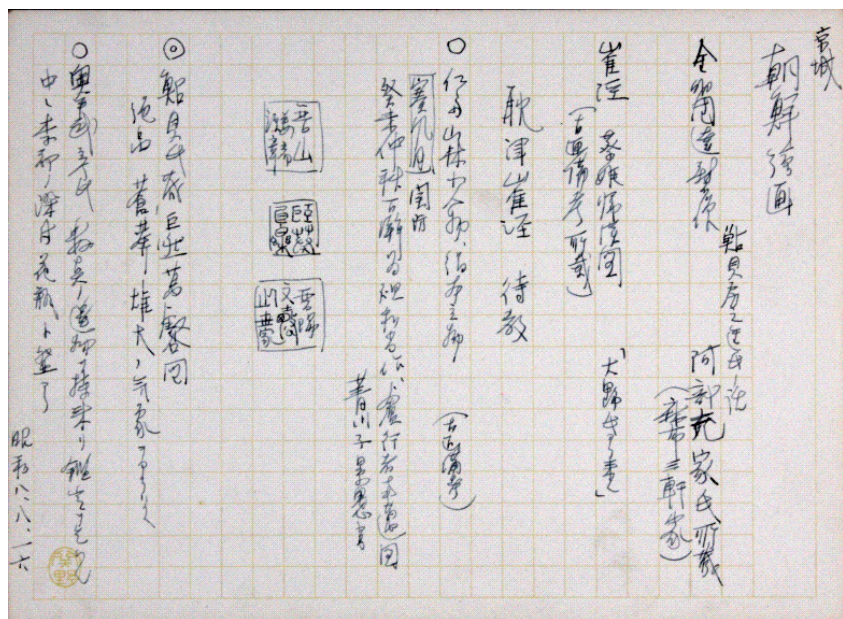
昭和8年8月17（16カ）日（日記）后〇時四十分京城発、小川君ト共ニ鳥致院下車。（調査カード）東旭趙氏及竹熊武男氏蔵絵画

昭和8年8月18日（日記）趙氏持参ノ絵画ヲ見（中略）山ヨリノ帰途、劉復烈氏所蔵ノ絵画数十点ヲ見ル。（調査カード）劉復烈氏蔵絵画

昭和8年8月20日（日記）前九時小川君ト森悟一氏邸ニ至リ、鮮画一覽。（調査カード）森悟一氏蔵絵画

昭和8年8月21日（日記）午後、本町二丁目古城氏蔵品ヲ見、（調査カード）古城氏蔵絵画及工芸品（故梅溪氏蒐集）

昭和8年8月22日（日記）前九時徳光美福博士ヲ訪ヒ、



4 関野調査カード「京城朝鮮絵画」(東京文化財研究所)

同氏蔵画ヲ見ル、其蒐集ノ豊富ニ驚ク。午後、富田商会ノ蔵画ヲ見ル。(調査カード) 富田商会蔵絵画、徳光美福氏蔵絵画

昭和8年8月23日(日記) 兪課長、小川君ト共ニ張澤相氏及金容鎮氏蔵幅ヲ見(調査カード) 張澤相氏蔵絵画、金容鎮氏蔵絵画

昭和8年8月24日(日記) 鮎貝氏邸ニテ安奎応氏持参ノ絵画ヲ見ル(調査カード) 「朴榮喆氏蔵絵画」「鮎貝氏邸ニテ展観絵画」安奎応氏蔵、高文龍氏蔵、鮎貝氏蔵

昭和8年8月25日(日記) 午後、李漢福氏方ニ至リ絵画ヲ見ル(調査カード) 「李漢福氏蔵絵画」

昭和8年8月26日(日記) 午後、李漢福氏ノ案内ニテ李秉直氏所蔵ノ絵画ヲ見ル、其蒐集ノ豊富ニ驚ク。(調査カード) 李秉直氏蔵絵画

昭和8年8月27日(日記) 午後、安奎應氏ノ案内ニテ小川君ト李胤榮ヲ訪ヒ、蒐集画ヲ見ル。(調査カード) 李胤榮氏蔵絵画

昭和8年8月28日(日記) 朝、林尚鐘氏来訪、絵画法帖等持参。(調査カード) 李漢福氏蔵絵画、林尚鐘氏蔵絵画

昭和8年8月30日(日記) 后、李漢福氏ノ東道ニテ李

鍾翊氏宅ヲ見ル。(中略) 又鮮画若干ヲ見ル。(調査カード) 諸岡栄治氏持参セリ、李鍾翊氏藏絵画

昭和8年8月31日(日記) 前九時、安奎應氏ノ案内ニテ柳來禎氏ノ絵画ヲ見、博物館ニ至リ、後二時小川君ト徳光博士宅ニ至リ、同氏藏絵画ヲ見ル。

(調査カード) 徳光美福氏藏絵画、柳來禎氏藏絵画

以上のように見ていくと、関野が京城の所蔵家の人脈を通じて、絵画調査を行ったことがうかがえる。こうした人脈が当時京城の書画収集家のなかでどのような位置を占めるのか、有名な収集家李禧^{イヒシ}變^{ヒン}や咸錫泰の名がみえないのには、関野とつながる人物とそうでない人物がいたのかもしれない。今後の検討課題である。

これら調査の対象はほとんど朝鮮時代後期の絵画である。関野は京城の収集家の所蔵品で絵画を抽出して調査している。1930年の「古書画珍藏品展」で見えるように京城の所蔵家は書も収蔵しているが、関野はあえて絵画にのみ集中して調査している。関野はそうした朝鮮時代の書画の文化的背景まで踏み込むことができなかったのかもしれない。しかし、絵画のみにしても朝鮮時代後期には文化が衰退して見るべきものがないという、いわゆる「朝鮮文化衰退論」とする視点にとどまっておらず、

朝鮮時代絵画の様相をできるだけ見ていこうとする姿勢がうかがえるのではないだろうか。

惜しむらくはこうした関野の調査の一端ではあるが、調査のフィールドノートや調査写真を用いて、朝鮮時代絵画について探究する後継者があらわれなかったことである。関野はそれを期待しつつ、美術研究所に調査の成果を残したように思われる。逆に近代日本において朝鮮時代絵画を実際に数多く調査して、その記録、理解に努めたのは、関野の活動をさらに検証する必要があると感じる。

2 調査の背景となる植民地期朝鮮における 朝鮮時代絵画の収集と展示

関野の調査の舞台となった近代朝鮮での朝鮮時代絵画の主な所蔵施設である李王家博物館と朝鮮総督府博物館の開設から運営、その他京城を中心とした収集と展示活動について、近年の研究の成果を踏まえて、また、実際に現地での調査から述べる。

1 李王家博物館

李王家博物館については日本での研究がほとんど見ら

れなかったが、近年、博物館活動や日本の当地の植民地下の文治統制について関心が高まり、急速に研究も進んできた。しかし、美術史の面からその活動を具体的に位置づけることは今後の課題と思われる（注13）。

以下、『李王家博物館所蔵品写真帖』（大正元・1912年）の緒言の記述内容からその設立について概観する。朝鮮新皇帝の純宗皇帝（李王）が徳寿宮から昌徳宮に移るのに、皇帝が「新たな御生活に興味を感じざるる様」新たな施設の整備を行うこととなった。これは明治40年（1907）11月4日、李王家次官小宮三保松が韓国内閣総理大臣李完用、宮内府大丞李允用の進言によって構想した。そのため博物館のほか、動物園、植物園を昌徳宮（現在の昌慶宮の場所）内に開設することとした。翌年9月、管理部局である御苑事務局を新設する。動物園は城内に私立動物園を経営していた劉漢性の動物を買収し、劉ほか1名を職員として採用した。植物園の温室施設は子爵福羽内苑頭の指導を受けた。すなわち日比谷公園西洋花壇や新宿御苑を設計した福羽逸人（1856—1921）の設計で東洋初の温室であった（注14）。ガラス張りの大型の温室（5346㎡）は現在も残っているが、これら多くの建築物は1980年代に改修のさい

CHEONGHAK



5 大温室昌慶宮（2016年7月）

に取り壊された。温室もドーム型の温室である西室、蘭館のほか標本館があり、動物園では獅子舎、猛獣舎、麒麟舎、駱駝舎、大水禽舎、紅鶴舎、火食鳥舎があつた（注15）。

博物館の事業は小宮、末松熊彦（謙澄）、下郡山誠一が計画した。「当時或る事情の爲前後無比多重に発掘されたる高麗陶磁器同銅器類を購入し、尚絵画仏像等朝鮮製各種の芸術品を買収したり」と博物館の資料収集について述べる。明治42年（1909）11月1日にこれら施設のある昌慶苑を公開した。これは（李王は）一方に衆と偕（とも）に楽しむ趣意を以て他の一方に公衆の智識開発に資する目的を以て」したとする。ただし毎週木曜日は王自身の遊覧のため苑を閉ざした。

場所は現在の昌慶宮で、昌徳宮に隣接する地であるが、ガイドブック、パンフレットなど敷地地図にも博物館については触れられていない。写真などからその場所を推定すると、昌慶宮内の欽慶殿のわきから階段を上った位置にあつたと思われる。この地はもともと慈慶殿という正祖の母恵慶宮洪氏（「閑中録 作者」の御殿であつたが、19世紀後半にとりこわされ、近代統治時代に図書館蔵書閣であつたと今日、昌慶宮では説明する。また、動物園

があつたことは今日もソウルの市民には伝えられている。この蔵書閣は1992年に解体された。それ以前の昌慶宮の景観写真にはその外観をうかがうことができる（注16）。1930年代の京城地図には動物園が昌慶苑の南、植物園が北と記される。昌慶苑は桜の名所としても知られ、1924年からは夜桜照明で夜間公開された（注17）。

李王家博物館の陶磁器収集については、李王家職員であつた下郡山誠一が対談で述べている（注18）。これによると李王家にはもともと家宝はまったくなく、李王職員の小宮をはじめ、下郡山が集めたということであつた。また、近年、韓国で出版された丁奎洪（チョンギョウホン）『文化財搬出史』には、こうした日本の植民地朝鮮での資料蒐集について資料を集めているとの教示を徳成女子大学校朴銀順教授よりいただいた。伊藤純氏は資料の収集について、小川敬吉（総督府博物館）が「閔野貞が」開城に於ける陵墓の盗掘せられ、出土の高麗焼其他の遺物が散逸するのを惜しまれて、之れが蒐集と保護保存を当局者に進言した。また、浅川伯教（あさかわのりたか）が「伊藤公が統監として朝鮮にこられた時にも朝鮮美術の復興に力を用ゐた動機となつたと思ふ。さうして李王家に於て博物館、美術品製作所等を創設された」という証言を紹介している（注19）。



6 現在 (2016年7月)



李王家蔵書閣

7 解体前

この博物館の文化的な目的やその成果については、日本の統治政策との関連性、さらに文化による統治の装置といった見方がされる。もちろんこの背景には日本による統治の政策があり、関野の朝鮮における調査研究活動の根本的な必然性について、その背景があることは否定できない。

李王家博物館の収蔵品は、当時発掘された考古遺物などが集められ、一面には国外流出を防いだともされるが、もう一面には市場の価格を上げたり、盗掘を促すなどの弊害もあつたとする。大正元年（1912）12月25日には、所蔵品は総計12230点を数えた。先の緒言によると小宮はこれら資料の写真帖を作ったが、これは「学者研究の資料を提供し、兼て好古家の一粲を博せむと欲するのみ」と李王家博物館には専門家が所属しないことを伝えている。ただし、この写真帖がすべて日本語で書かれていることや、非常に豪華な作りであることは、植民地期朝鮮の一般大衆に向けて、制作されたものでないことは明らかである。

李王家博物館は次第に収集品を増やしていくのだが、関野が最初に絵画の調査をするのは大正10年（1921）である。そののち日本で「朝鮮名画展覧会」を開催した

後も関野は昭和7年（1932）、8年と2度当館を調査しており、昭和6年の日本での「朝鮮名画展覧会」開催の段階では、まだ李王家博物館や朝鮮総督府博物館の所蔵品を関野が完全に把握して開催していなかったことがうかがえる。これは関野がこの博物館の絵画等の収集に深く関わっていなかったことも示すのではないと思われる。

では誰がその収集の手引きをしたかと考えると、この緒言の中にも紹介され、絵画の概説を記述した鮎貝房之進あたりではないかと推察する。鮎貝は自身も作品を収集し、なお李王家博物館の委員（朝鮮名画展覧会委員名簿）にも就任していた。李王家博物館の作品がすぐれた鑑識のもとに選ばれていることには、それを選ぶ力が備わっていたと思われる、朝鮮時代絵画についての認識の高かった鮎貝の力があつたかと考えたい。

鮎貝については、李王家職の下郡山誠一が鮎貝の甥にあたり、その生涯にふれている（注20）。これによると鮎貝は落合直文おちあいのちひなみの弟で歌人でもあつた。外国語学校の朝鮮語科を出て、朝鮮に語学学校を開いたが、事業に着手し、それを資本に韓国美術や図書の収集により研究をすすめた。鮎貝の朝鮮時代絵画への言及については後述するが、



8 朝鮮總督府博物館 (景福宮内)

CHEONGHAK

朝鮮時代絵画作品の位置づけは今後の検討を要する。

李王家美術館は1910年に徳寿宮内に建てられた石造殿で、1933年に展示が行われるようになった。しかし、これは近代の日本美術品の展示であった。1938年に新しく西館が建てられ、ここに李王家博物館の資料を移動した。

2 朝鮮總督府博物館

朝鮮總督府博物館についても近年、多くの研究が発表されたり、韓国中央博物館においてシンポジウムが開催されるなど、設立の経緯、運営の展開などが明らかにされている(注21)。簡明に言えば1915年9月に景福宮^{キョボクソン}で開催された始政5年記念朝鮮物産共進会(朝鮮博覧会)のなかの美術館の建物を共進会終了後、博物館として開館したのである。

共進会は朝鮮各地から物産品の出品や展示を行い、販売を促進した。入場者数は合計37万人であった。すでに1912年より景福宮は朝鮮總督府に移管され、總督府庁舎の建設が開始されていた。共進会場内に建てられた美術館は総建坪166坪、耐火構造の恒久建造物であった。ここに美術品228点、考古資料1069点が展示された。記事では「石造二階造の美術館に至れば、御影

石の獅子一雙南面して広庭を睥睨す。（中略）正面には慶州南山の薬師如来の石像あり、其の後ろには甘山寺の弥陀如来、弥勒菩薩の二石像を安置す。（中略）階下左室には螺鈿の櫃文匣、塗漆の硯箱、朝鮮往時の甲冑、銅鉄香炉、古梵鐘、古鏡、板鐘、五鈎、花瓶等の古美術品を陳列し、右室には青磁、三島焼、其の他の陶磁器、古瓦、緑釉陶瓷、碧釉陶板及小形金銅仏像等の古器を陳列す。階上の東室には古画を数十幅を懸け、西室には古人の名画を屏風に仕立てたるもの又は絵巻物、金泥仏經、画帖等を排列す」（『朝鮮彙報』大正4年10月1日「共進会」とある。これらのうち甘山寺の二石像は今日、韓国国立中央博物館に所蔵され、展示されている。

また、現代美術もこの会場内に展示された。景福宮の「康寧殿の東側にある慶成、膺社の二殿は美術館第一第二分館にして、在朝鮮各画家の出品百五十余点を算す。内地人側には棚橋溪雲、三浦広洋、佐藤紫峰、高野洋雲、中嶋春城、清水東雲、本多貞翠、島成琴女史、島田才涯、鈴木春帰、大橋恒蔵、早川天望、和田一海、徳田玉龍、朝鮮人側には金心元、安中植、李綱承、趙錫晋、金圭鎮、姜弼周、権泰鍊、高義東、呉一英、白濁亮、金殷鎬等の揮毫あり」（『朝鮮彙報』大正4年10月1日「共進会」）

とする。また、欽敬閣には写真作品を飾っていた。なお、会期中10月1日には閑院宮載仁親王殿下の訪問に際して、旅館にて「朝鮮の画家安中植、趙錫晋、金心元、日本画家佐久間鉄園の四名を召させ給ひて親しく揮毫をいと興深く御覧あり」と揮毫に画家が出席したことも記す（『朝鮮彙報』大正4年11月1日「閑院宮殿下の御台臨」）。

共進会は10月31日で閉幕し、美術館の建物を流用した総督府博物館が12月1日開館した。博物館は施設が不足して、そのほか景福宮の勤政殿、思政殿、修政殿が充てられた。大出氏によると「修政殿には大谷光瑞が西域探検の際に収集した発掘品が展示された」。また、古蹟調査事業を関野ら古蹟調査委員とし、朝鮮総督府博物館の職員が発掘調査を担当したとする。彼ら以外で発掘することは「私掘」と見做された。さらに朝鮮総督府博物館では開館時には共進会の展示品や総督寺内正毅の寄付金によって購入した鮎貝房之進や三宅長策など日本人コレクターの収集品、古蹟調査で発掘した遺物、山田鈇次郎、関口半らの寄贈品、その他古物店からの購入品を展示したという収蔵品は、1933年に12908点の展示品を備えた。このうち書画は91点であったという（注22）。

これらが共進会で会場の2階東西の部屋を飾っていた

のであろう。朝鮮総督府博物館は、共進会（博覧会）の開催から恒久な施設である博物館を生み出すという、日本の近代における博覧会の開催ののち博物館を開設するという構図をまさにそのまま描いた成立である。また、「朝鮮総督府による古蹟調査事業と博物館活動が不可分の関係にあった。博物館が大眾の文化享受をコントロールし、ひいては統治者による植民地経営のイデオロギー装置となった」（注23）という風にとらえられている。

1939年5月には総督府美術館が竣工した。これは6月4日から開館した（『東亜日報』1939年5月15日）。当初、総合博物館の計画であったが、美術館のみで、しかも1階建てという規模に縮小された。ここでそれまで専用の展示場を持たなかった朝鮮美術展覧会が開かれた。関野は先述したように、まず大学の調査として朝鮮へ渡ったが、総督府の調査として任せられ、その後『朝鮮古蹟図譜』の編集・刊行を総督府事業として遂行した。これはどこまで総督府が望んだかは不明であるが、当初の建築のみの調査から遺蹟の調査を行い、さらには絵画、工芸品の調査へと及んだ。

総督府博物館の建物は現在残っていないが、第二次大戦終戦後はアメリカ軍政下において国立博物館として活

用された。こののち建物は取り壊され、その北側の敷地に国立博物館を新築し、現在は国立民族学博物館として活用している。

3 朝鮮時代書画の収集熱

朝鮮時代後期からの書画、貴重書の収集については、広通橋周辺に書店、書画店が集まり、さかんであったことが2016年のソウル市歴史博物館の展覧会「広通橋書画肆」に示されている（注24）。広通橋（ソウル市鐘路区）は現在も石橋が清溪川に架かり、面影を残しているが、本来の南大門から景福宮にのびる道には沿っておらず、位置を変更しているようだ。

1906年の「朝鮮珍書刊行会」の発足、そして、1910年の「朝鮮古書刊行会」の発足も「朝鮮研究者の便利と朝鮮古文明紹介の一助として」、「朝鮮の古書珍本を廉価に頒たんとすの計画」であったとするが（注25）、この背景に朝鮮古書の価値の見直し、具体的には稀少本の価値の高騰があったものと思われる。

「朝鮮古書刊行会」は日本人による朝鮮古書の稀観書を刊行するために設立したが、これは朝鮮時代の書籍研究でもあり、むやみに稀観書の値が吊り上がってしまうことを封じるためでもあったと思われる。それほど古書あ



9 現在の広通橋（2016年10月）

るいは古畫画の取引が盛んになったのであろう。ただしこの事業は一部の研究者には感謝されるが、「一般の社会には余り歓迎されざる事業なり」（釈尾春仍『新朝鮮』大正5年（1916））と評された。

前掲の権氏論文によれば1920年代より朝鮮でも資本主義化が進み、流通業や商業が発達した。これと1931年の満州事変による特需景気により京城は近代商業都市となった。1932年、三越百貨店、1934年、ファシン百貨店、1938年、三中井百貨店、1941年、丁子屋百貨店と百貨店が開店し、それぞれに画廊が設けられ作品が展示された。

ここには当時の作家の作品が並び販売を目的とした展示であった。こうした傾向に対して、古美術市場については1920年代までの古墳盗掘などによる高麗青磁の流通の時代を経て、知識人を中心とした古美術品の賞玩趣向が流行した。

これは単なる商品としてではなく、消えゆく伝統の産物である古畫画を収集し、人々が鑑賞できるようにすることが目的であったとされる。この中心にいたのが呉世昌^{オセ}であり、呉鳳彬であった。権氏によれば、この時期には李王家博物館も朝鮮総督府博物館も収集活動をおさ

て、展示や広報活動に力を入れ始めたという。

4 吳世昌『樞域書畫徵』の刊行

韓国における数少ない書畫画人伝『樞域書畫徵』の成立と編者・吳世昌については、五十嵐公一が『古畫備考』の考察に際して述べているのが、日本ではほぼ唯一の研究である（注26）。父吳慶錫と吳世昌の生涯を示し、吳世昌の書畫への造詣を述べる。吳慶錫は朝鮮時代後期の高名な文人秋史（阮堂）金正喜の教えを受けた、いわば朝鮮時代の文人の中心的な系譜にあつた人物である。彼らが書畫を収集するのは無論、利益のためではなく、書畫を余技としながら、そこに文人としての精神性を発露した先人の遺墨を見ようとしたものではないかと考える。吳世昌の古書畫の蒐集は1909年頃から始まったとする。その後、「書畫美術會」が主催する展覽會に出品した。これに「書畫研究會」の勢力が合わさって、「書畫協會」が発足する。この機関誌『書畫協會報』に掲載した「畫家列伝」、「書家列伝」が『樞域書畫徵』のもととなる。吳世昌は蒐集家・全鏐弼の書畫蒐集に協力した。全鏐弼の蒐集品は葆華閣、さらに今日も継続する潤松美術館を形成した。『樞域書畫徵』は1917年に脱稿したことが記されることから、これが成立の時期とされるが、

公刊されたのは1928年5月である。この『樞域書畫徵』の刊行が当時の古書畫蒐集に拍車をかけ、また、蒐集した書畫の価値付けを行ったと思われる。関野も調査カードに『樞域書畫徵』を見たことを記しており、関野の調査にも活用されたと思われる（注27）。

5 京城を中心とする展示

この古書畫の見直しは1930年代になり、朝鮮全土に広がったものとされる。なかでも吳鳳彬は朝鮮美術館を運営し、多くの書畫を集めた。吳鳳彬は東亜日報社の後援で「朝鮮書畫展」を開催した。

『東亜日報』によれば1929年の6月8日、9日、13日に府内日善行記念館で朝鮮美術館主催で「古今書畫展覧」が開催された。

1930年10月の「古書畫珍藏品展」は東亜日報社（現在の世宗通りの社屋であるが、当時は3階建てであつた）。関野はこの展覽會を観覧して、調査カードも作成している。

そして、吳鳳彬と日本での開催を約した。その後の主な展覽會は『東亜日報』の記事によると以下の通りである。

1932年10月1日〜4日 古書畫珍藏品展

東亜日報本社楼上東亜日報学芸部後援朝鮮美術館主催

1934年2月24、25日 書画展覧会

6月30日〜7月1日

古今書画展覧 東亜日報平壤支局

1938年6月18日〜6月22日

朝鮮名画展覧会景福宮後苑陳列館

1940年5月28日〜31日

十大家朝鮮美術館主催山水風景画展 府民館3層講堂

このほか陶磁の展示会なども京城やそれ以外の都市でも開催され、この時期、伝統的美術品が収集や展示の対象となったことがうかがえる。

この背景には李王家博物館、朝鮮總督府博物館の設立をはじめとして朝鮮時代書画を収集した施設が展示を行ったことも活動が盛んになった一つの要素であろう。権氏が指摘するように1930年代は朝鮮の京城を中心とした名士の間に収集、展示活動がさかんになったといえよう。ただし、1930年代の展示は販売のためのものと伝統文化の顕彰という、大きく二つの目的を持っていたと思われる。

6 朝鮮美術展覧会の発足

近代韓国における公募による創作展の嚆矢が、總督府

博物館の創始ともかわる1915年の始政五年朝鮮物産共進会であつたことは偶然ではないであろう。博覧会場内の美術館に、前述した古書画とともに公募でよせられた作品が飾られていたのである。審査されたのは143点89人の作品であつた。「古格古法を伝ふるもの甚だ少く、新進氣鋭の士は概ね現代の内地式画法を一意模倣する傾向あり先進古老には筆致醇雅なる作品なきに非ざるも向上発展の氣勢を欠き神韻生氣の伴はざるは時勢の変転より來れる現象ならん」(『朝鮮彙報』附録「審査概評」1915年)とやや酷評である。昌慶宮にあつた李王家博物館は手狭でもあり、この朝鮮美術展覧会の会場としても新しく徳寿宮内に石藏殿を作り、そこで新旧の作品を飾った。のちにこの石藏殿に隣接して、新しく美術館を建設する。

1919年3月1日三・一独立運動が起きて、2ヶ月ほどの間、約200万人が参加したが、鎮圧されてしまふ。しかし、この後日本は「文化統治あるいは政治」と政策上の転換を図つたとする。そして、1921年に書画協会美術展覧会と、1922年に朝鮮美術展覧会(鮮展)が創設された。「鮮展は衰退しきつた朝鮮の美術が、再び息を吹き返し、成長の道へと進むことができるよう

にと配慮して、朝鮮の美術人との話し合いのういで創つた文化行事」(注28)と位置づけられた。韓国の文化創造があくまでも治世者日本の意図により制御されながら行われた。そして、それさえも過去の文化の否定のもとに推進されたという二重の負債を負いながら進められた。その後、「1930年代朝鮮画壇が成熟するにつれ、日本人の要請とは別に朝鮮人画家たちのなかから、朝鮮性や民族性とはなにかを模索する議論が生まれた」(注29)。同時に伝統的な朝鮮時代の書画の収集、展示が盛んになったのである。

3 近代日本人による韓国美術への視点

1 関野以前の朝鮮時代絵画研究

関野以前に、ジャーナリストや韓国学者、言語学者など、はやく朝鮮にわたったわずかな人によつて韓国の絵画が語られた。彼らは雑誌『朝鮮』、『朝鮮及満州』に記事を書いた。まず大岡力が『朝鮮』、『朝鮮の絵画について』(3回、1909年4月1日、8月1日、9月1日)、鮎貝房之進が『朝鮮』、『朝鮮の絵画』(3回、1911年6月1日、7月1日、9月1日)、八木熒三郎が『朝鮮及

CHEONGHAK

満州』に「支那の南北画より見たる朝鮮の絵画」(1914年4月1日)を発表した。これらはいずれも短い文章で、詳しい論文としての体裁を備えたものではない。

八木は美術雑誌『国華』169号に「韓国の美術」を発表したが、絵画については触れていない。美術全般について「李朝に入りては本邦の見るが如き平安、藤原、鎌倉等の変化なく、僅に朝鮮式の余喘を保つに過ぎず」といった朝鮮時代美術について「停滞論」を主張した(『韓国の美術』『考古界』4-2 1904年7月)。

また、八木は「支那の南北画より見たる朝鮮の絵画」(『朝鮮及満州』第81号1914年4月)において成倪の「慵斎叢話」や魚叔権の「稗官雜記」を挙げて、中国の南北画の指摘がないことを朝鮮時代の人の認識の不足と考えたようだ。これは鮎貝が朝鮮時代の絵画制作の考え方をその実情に即して考察したのに対して、江戸時代の日本の南北画論による視点を無理に適用させようとしたこととの相違であろう。

大岡は朝鮮通信使に付随した画員金明国(キムミョクグ)について「彼の手法を観るに、彼は全く日本渡来中に東山の明蹟を見て深く之を研究したものだと思はれます」とし、日本の画家を基準に評定し、李朝時代の絵画については「其国初

より二百余年間に於ける極めて少数の製作に於て僅に見るべきあるのみで爾來三百年間の製作には殆んど見るべきものはありません」（『朝鮮の絵画に就て（承前）』『朝鮮』4巻第1号 1909年9月）というような視点でその活動を評している。1910年には『朝鮮美術大観』が執筆され、大岡力がその概論を書いている。豊臣秀吉の壬辰の役により「大打撃」をうけ、「中期以後二於ケル美術工芸、亦タ全ク絶滅シタルニアラズ画家ノ如キ、今日尚ホ無数ノ名ヲ存シ、其遺跡亦タ渺カラズト雖モ、其技倆ノ幼稚ニシテ、其品格ノ卑俗ナル、殆ンド一顧ノ勞ニ価スルモノ渺シ、之ヲ美術眼ヨリ觀察セバ、朝鮮ノ美術思想ハ李朝中期ニ至リテ全ク滅亡ヲ告ゲタリト謂フモ過言ニアラザルベシ」というように、すでに朝鮮時代絵画を衰退した価値のないものと貶めている。大岡は新聞社を主宰し、京城在住のジャーナリストとしてこの文を草したと思われる。

鮎貝は、朝鮮時代絵画を二派に分け、「儒画及院画」とし、「儒画は儒者即ち上流士君子が六芸の亞なりとして文学の余暇墨戯として娯楽の為に書きたるものなり。院画は中流以下の人の家職即ち画局図書署の画員として画たるものなり」と朝鮮時代絵画の分類を行い、「李朝

儒画の泰斗は姜仁齋希顔なり。院画の泰斗は安立洞子堅なり」と画人の分類を行い、図書署の官制を挙げるも、鮎貝が系譜をたどろうと探索したが、「一の得るところあらざりき」という結果であつた。また、儒者も「之を能くしたるものは悉く賤技として之を秘し之を恥ぢたる傾あり」。これは「画は六芸以外の末技にして人士の弄ぶべきものに非ず」ということだとする。このように鮎貝は朝鮮時代絵画の特性をよく理解していた。そして古来より名画を収集し、研究するものも多く、「宗室に安平大君、朗善公子あり。儒流に申叔舟、姜希孟、崔岬立、許穆、金正喜、權敦仁、申緯、趙成夏等あり。何れも時流を脱し、画を以つて六芸以外の賤技と為さず、高人雅士の神を怡ばし、性を養ふ神聖なる技芸とし、大いに之が奨励に務めたる人々なり」（『朝鮮の絵画（前号の続）』『朝鮮』第41号 1911年7月）と述べる。また、その絵の特徴は「如何にも飾気なく、人に媚びず、世に阿ねらず、甚だ無頓着な点」とし、好意を持つて朝鮮時代絵画を評する。

また、先述した李王家博物館写真帖の解説は鮎貝の原案によるとするが、それも単なる朝鮮時代文化停滞論とは異なる今日の絵画論にも通じた、多くの文献をもとに

朝鮮時代の画家について比較的正確に述べたものとみたい。記述には朝鮮時代初期の「仁斎、安堅アンギョンの如きは日本にありて画聖雪舟せうしゅう若しくは周文等しゅうぶんに比して敢て遜色そんしきなしと謂つへし」と述べ、やはり、日本の画家を基準にするが、豊臣秀吉の出兵により「各般美術工芸品を破壊せられたるのみならず名工は拉し去られ工場は破壊せられ殆んど根底より打撃を加へられ再び起つ能はざるに至れり」、しかし、その「壬辰役頃以後は大家と称し得へきものは稀なるも絵画を描きしものは殆んど枚挙に遑あらず」と多くの書画家の存在を指摘する。これら多くの画家も「画員を除くの外は、日本の如く純然たる専門画家として数ふべきもの甚だ稀なり。其作物は唯学者及文武官吏の余技に過ぎず。之れ李朝に至て芸術を卑みたる結果、専門画家の出現せざりし所以なり」と朝鮮時代の価値観より絵画の位置づけを客観的に述べる。

これらの先駆者の記述は関野の『朝鮮美術史』の記述にも影響があつたと思われるが、彼らは美術の専門家ではなかつた。しかし、今日から見ると彼らの間には、朝鮮時代絵画を当地の価値観に即して見ようとするものと、日本の価値観に当てはめてみようとする考えがあつたとがわかる。一部には朝鮮時代絵画を貶める評を与え、

CHEONGHAK

それが朝鮮時代文化衰亡の視点とあいまって、それらが絵画に価値を与えることなく終わっているものもあつたといえよう。

2 関野貞『朝鮮美術史』

関野も明治43年（1910）に序文が書かれる『朝鮮芸術之研究』のなかで「韓国芸術の変遷に就て」と題した文を寄せ、多くは建築史の記述であるが、朝鮮時代の芸術を振り返って「前期に於ては猶観るべきの芸術を存せしも後期に於ては総ての工芸を通して著しく衰退墮落の徴候をあらはし時代益進み技巧退くの奇観を呈せり」と朝鮮時代後期における停滞説を述べる。

しかし、のちに関野は絵画の調査を経て、その価値を認めたために「朝鮮名画展覧会」を開催したものであり、それらを評価する朝鮮の人物たちと価値を共有したものである。『朝鮮美術史』は「朝鮮名画展覧会」開催の翌年（1932年）に出版された。それまでの関野の朝鮮美術論を集約したものである。朝鮮時代絵画については「初期のものは宋・元の余流をくみ、筆力豪宕ほうとう、当時の中国・日本画に接踵せつしゅうしようとするものも無くはない」、「後期に入り、（中略）絵画は徒らに儒流の余技に過ぎないものとなつた。その萎靡不振いひびは当然の結果とい

わねばならない。それでもその間に在って、往々頭角を露わし、李朝後期のため気焰^{きえん}を吐いたものもあつた」と十分な研究には至っていないことを前提ではあるが、李王家博物館、総督府博物館での調査を中心に実際に調査した絵画について位置づけを試みており、この段階での関野の認識といえよう。これが公になった第二次大戦前の日本人の朝鮮時代絵画の認識の到達点であつたといえるのではないだろうか。さらに1934年に『朝鮮古蹟図譜』十四を刊行し、「朝鮮名画展覧会」開催以降の調査の成果を写真で披露しているが、これには残念ながら解説が付されていない。関野は朝鮮時代絵画の調査の成果をよくあわらわすことなく翌年没してしまふ。おそらくは「朝鮮美術史」よりもさらに具体的に明確に朝鮮時代絵画の様相を描くことができたのではないかと察する。

3 柳宗悦の朝鮮時代美術理解

関野と柳との交渉はいまだ明確ではないが、朝鮮名画展覧会に柳が所蔵する姜世晃^{カンセフン}の蓮花図を出品したり、名画展の朝鮮側委員として柳との交友が知られる浅川伯教が名を連ねることなどから、当然交流があつたものと考ええる。

また、1921年5月、東京の神田流逸荘において「朝

鮮民族美術展覧会」を開催し、1924年4月9日には、景福宮内緞敬堂内に朝鮮民族美術館を開館させた。柳は「私はこの美術館に於て、人々に朝鮮の美を伝へたい。さうしてそこに現はれる民族の人情を目前に呼び起こしたい。そのみならず、私は之が消えようとする民族美術の、消えない持続と新たな復活との動因になる事を希ふ」とその設立の動機を語る(注30)。

朝鮮総督府ほか日本の植民地における文治政策の具体的な研究者としての関野と柳を大きく官と民の立場で対比する見方は多い。柳の朝鮮時代絵画にたいする系統的な視点はほとんど見られない。

柳の朝鮮美術への視点は「悲哀の美」の美しさをたたえることから、その特質を述べ、「私はここに線が朝鮮芸術の殆んど凡てを支配してゐる特質であるのを指摘した」(注31)として、朝鮮の芸術の中に形と色の要素に乏しいとも述べる。こうした言葉に具体的な作品での根拠は見出せない。また、漢代絵画に就いて型を用いた製作の美しさを訴えると同時に「絵画は純粹絵画以外に大きな分野を有つてゐる。私共のいふ工芸的絵画、民画がその領域である」と述べる(「楽浪出土漢代画に就いて」)。わずかに挿図の説明に申思任堂の「花と虫」について、「花



10 景福宮緞敬堂 (2016年10月)

CHEONGHAK

や蛙や蝶や蛇や蝗が画題である。静かに自然を見つめながら穏やかに描いている。一見写真実風ではあるが、寧ろ見えない世界を写真しているのだ、という方が当らう。決して強さ大きさの絵ではないが、静かに身に近づいてくるものがある」。この図のことかは不明だが「朝鮮自ら生んだ絵画がある事がよく知られてゐないためである。特に民画にでもなれば、非常に独自なものだと言つてよい」とつづっている(柳前掲書「挿絵小註」)。

ここには作者の確認や作品の描写の特質など、美術史的な関心は見られない。自身の感性に見合ったものを取り入れるという柳の美意識が盛り込まれているが、ここから作品の文化的な背景や関連作品を収集しようという意識は見出せない。すなわち、関野や朝鮮時代書画を系統立てて調査したり、収集しようとする同時代の植民地期朝鮮の人々の傾向とは大きく異なる。

逆に次第に盛んになっていった朝鮮時代書画の収集ブームから漏れた作者未詳の作品に心奪われていったとも考えられる。さらにそこに柳特有の美意識を見出し、「民画」という言い方、分類を創始したのかもしれない。柳の言葉だけを読んだ場合、こうした絵画が朝鮮の人の心情を表現する、あるいは朝鮮時代を代表する絵画だ

という認識が日本に長く広まったことはまちがいない。

関野が調査した朝鮮時代絵画については、関野の報告書や著書として公刊され、調査カードとして美術研究所（文化財研究所）に保存されたが、世に広まらず、柳の朝鮮美術についての見方が定着したのではないかと思われる。

まとめ

現代においても朝鮮時代絵画を専門に研究する日本の研究者は数えるほどしかない。そうしたなか、植民地であった朝鮮で積極的に朝鮮時代絵画の調査を行ったのが関野貞であった。関野の調査について、植民地の文化的統治の先導とみる見方も多い。今回、関野の朝鮮時代絵画の調査カードを閲覧して、その調査の具体的な様相を見るに彼が日本、朝鮮で逐一、自身で調査して回ったことがうかがえた。それは李王家博物館や朝鮮総督府博物館など、いわば国家的な政策を背景に設置した施設もあるが、京城の個人の作品を一件一件、調査して回ることは、そうした権威ばかりではかなわないものであったかと思われる。

それは東京府美術館での朝鮮名画展覧会の開催にも端的にあらわれている。関野は京城で朝鮮美術館を運営していた呉鳳彬と知り合い、前年に開催された古書画珍藏品展を観覧して、日本での開催を約した。その約束どおり、東京で展覧会を開催した。これを「内鮮融和」を目的とした、といわれるが、存外に評判を呼ぶことなく、閉会することとなった。これは関野の朝鮮での調査研究の成果を示す『朝鮮古蹟図譜』への編集のためではなく、純粹に朝鮮時代絵画を展示しようとしたように思える。無論、背景に関野の朝鮮での活動や文化財保護などでの地位があつたことは当然であるが、多く建築や古墳の発掘に邁進まいしんしたなかで、伝世の朝鮮時代の絵画を調査対象にしているのは、異例に見えた。

しかし、当時、関野の周辺でそのような調査を行っている日本人はいなかった。わずかに韓国学者や言語学者など朝鮮に在住した学者が作品を蒐集しながら、韓国の絵画史にふれることはあつた。

関野が調査した1930年代は京城を中心に、朝鮮で古書画を売買し入手して、展示することが盛んになった。それには利益を目的とした売買と伝統的な文化遺産を残し、公開するという二つの目的があつたようだ。関野は

どちらかといえば後者の人物と交流が多かったように思われる。

今日、韓国国立中央博物館に閔野が調査した朝鮮時代絵画が多く所蔵され、常設展示において展示されている。それらは早くに李王家博物館や朝鮮総督府博物館に所蔵された作品もあるが、閔野が調査した折には京城などの個人蔵であつた作品もある。第二次大戦後、朝鮮半島は南北に分かれて戦乱が起こり、人々は再び戦火を被るこゝとなつた。しかし、文化財を担当した職員はこれらを釜山へと避難させ、よく守つた（『疎開目録』国立中央博物館）。

このようにその存在が確認されながら、日本がその収集に大いに関わつたにもかかわらず、日本においては朝鮮時代絵画の作品自体の研究や作者の画家論も、1960年代に安輝濬氏^{アンヒジュン}らによつて確立していくまで芽生えなかつた。こうした状況をふりかえり、残された資料によつて、閔野の調査活動を明らかにし、収集された作品の動きやその背景を追つて、20世紀前半の朝鮮時代絵画の収集や展示活動を確認し、日本と韓国の文化活動のなかで位置づけることができばと考える。

今日、植民地期における文化活動の研究については韓

CHEONGHAK

国で非常に盛んになっていると聞き、日本においてもそれを空白の時期などとして放置、忌避^{きひ}するのではなく、資料の提供を行い、両国の研究者により見解を披瀝^{ひれき}しあうことが望まれる。

最後にこの調査の延長で本年度もソウルへ調査へ行くことになつた。飛行機の中で「解語花」という映画を見た（日本未公開）。「トニイ」というドラマでも有名な人気女優ハン・ヒョジュさんが出演している。舞台は植民地期の京城、解語花というのは言葉解する花、すなわち妓生^{きせい}のことで、幼いころから共に育つた二人が一人は新しい歌謡の歌手として注目を浴び、もう一人は伝統的歌謡の跡取りであるが、相手に嫉妬し、日本の朝鮮総監の愛人となり、歌手への道を妨げるといふ話である。その二人の有様は悲しくも美しく、改めて日本による支配のやるせなさを感じたのだが、私達は美術という一面だけで当時の文化を図ろうとしている。しかし、ほんとうの大衆は何を求めたのかは、もう少し広く見てみたいといけないと思つた。当時の広い意味の文化活動、娯楽、生活などをよく把握したうえで、われわれの考察も進めるべきこともこの映画は教えてくれた気がする。ちなみにこの映画は2017年に日本でも公開されるそうである。

- 1 「朝鮮画山水屏風」『国華』290号 1914年、「伝李澄筆雪峰江閣図解」『国華』501号 1932年、「李上佐筆雨中猛虎図」『国華』634号 1943年、「李希園筆米法山水図」『国華』636号 1943年、他
- 2 「東京大学コレクション」 関野貞アジア調査『東京大学総合研究博物館 2005年
- 3 『関野貞日記』関野貞研究会 中央公論美術出版 2009年
- 4 渡邊雄二「関野貞の朝鮮時代絵画調査と朝鮮名画展覧会」『東京文化財研究所所蔵の調査カードから』『九州産業大学芸術学研究報告』47号 2016年
- 5 「朝鮮仏画徴」『朝鮮字報』44号 1967年、「龍藏院藏葉師三尊画像に就いて」『仏教芸術』69号 1968年、「図版解説善導寺藏地藏菩薩画像」『美術研究』265号 1970年、「九州所在大陸伝来の仏画」『仏教芸術』76号 1970年、他
- 6 『博物館という装置 帝国・植民地・アイデンティティ』石井正己編 勉誠出版 2016年
- 7 大橋敏博「韓国における文化財保護システムの成立と展開—関野貞調査(1902年)から韓国文化財保護法制定(1962年)まで—」『総合政策論叢』第8号 島根県立大学総合政策学会 2004年
- 8 「朝鮮古墳の壁画について」『美術新報』13ノ5 1914年、「高句麗時代の壁画(1)」(3)『国華』294号、297号、298号 1914年、1915年、「新たに発見せられたる高句麗時代の絵画」『国華』327号 1917年
- 9 関野貞「高句麗時代の壁画(三)」『国華』298号 1917年
- 10 権幸佳「1930年代古書画展覧会と京城の美術市場吳鳳彬の朝鮮美術館を中心に」『日韓近代美術史シンポジウム都市と視覚空間—1930年代の東京とソウル報告書』明治美術学会、韓国近現代美術史学会 2008年
- 11 吳鳳彬の展覧会報告『東亜日報』1931年4月10日
- 12 脇本菜之軒「日本水墨画に及ぼせる朝鮮画の影響」『美術研究』28号 1934年
- 13 伊藤純「李王家博物館開設前後の状況と初期の活動」『考古学史研究』第9号 2001年、李成市「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」『植民地近代の視座 朝鮮と日本』岩波書店 2004年
- 14 『福羽逸人回顧録』財団法人国民公園協会新宿御苑 2006年
- 15 『重建報告書昌慶宮』大韓民国文化公報部文化財管理局 1987年12月
- 16 『韓国の古宮建築(日本語版)』悦話堂 1988年
- 17 金炫淑「昌慶苑「夜の花見」と「ヨザクラ(夜桜)」」『日韓近代美術史シンポジウム都市と視覚空間—1930年代の東京とソウル報告書』明治美術学会 韓国近現代美術史学会 2008年
- 18 「座談会李王家の蒐集について—下郡山誠一氏に聞く—(上)(中)(下)」『やきもの趣味』第1巻2号、3号、4号 徳間書店 昭和39年4月、5月、6月 ソウル大学留学中の田代裕一郎氏に教示いただいた。
- 19 注13 伊藤論文
- 20 下郡山誠一「槐園鮎貝房之進の思い出」『水壘』第50巻第9号
- 21 金泰運「朝鮮総督府博物館の設立と運営について—19105年

- 22 〃1920年を中心に」『佛教大学大学院紀要』文学研究科
 篇 第43号 2015年3月 韓国国立中央博物館シンポジ
 ウム「朝鮮總督府博物館資料再照明」韓国中央博物館 20
 15年10月30日
 大出尚子「日本の旧植民地における歴史・考古学系博物館の
 持つ政治性」朝鮮總督府博物館及び「満州国」国立（中央）
 博物館を事例として」『東洋文化研究』14号 2012年
 注6
 24 23 ソウル市歴史博物館開催「강동고서화사 広通橋書画肆」2
 016年4月22日〜7月3日
 25 白井順「前間恭作と鮎貝房之進の交流」『年報朝鮮学』第15
 号 2013年2月26日五十嵐公一
 26 『権域書画徴』における『古画備考』の位置『江戸時代に
 おける〈書画情報〉の総合的研究―『古画備考』を中心に平
 成15年度〜17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）研究成
 果報告書）』平成18年3月、なお韓国では洪善杓が「吳世昌
 と権域書画徴」を『権域書画徴』（シゴンサ1998年）に
 載せる。
 27 〃権域書画徴ニ播磨龍城氏ノ三清帖ノ事ヲ灘隱ノ項ニ載セタ
 ルヲ発見ス（昭和8年8月17日）
 28 喜多恵美子「朝鮮美術展覧会と朝鮮における『美術』受容」『大
 谷学報』85号 2008年
 29 金恵信『韓国近代美術研究植民地「朝鮮美術展覧会」にみる
 異文化支配と文化表象』ブリュッケ 2005年
 30 柳宗悦「朝鮮民族美術館」の設立について『白樺』192
 1年1月号
 31 「朝鮮の美術」『朝鮮とその芸術』日本民芸協会 1972年
 新装

CHEONGHAK

挿図リスト

- 1 関野貞調査カード（東京文化財研究所）
 2 東亜日報社旧社屋（2016年10月）渡邊撮影
 3 朝鮮時代絵画写真カード（東京文化財研究所）
 4 関野調査カード「京城朝鮮絵画」（東京文化財研究所）
 5 大温室慶昌宮（2016年7月）渡邊撮影
 6 慶昌宮蔵書閣現在（2016年7月）渡邊撮影
 7 慶昌宮蔵書閣解体前（韓国の古宮）より転載）
 8 朝鮮總督府博物館（景福宮内）『국립중앙박물관 National
 Museum of Korea』国立中央博物館 2007年より転載
 9 現在の広通橋（2016年10月）渡邊撮影
 10 景福宮絹敬堂（2016年10月）渡邊撮影

研究報告：押川方義と朝鮮

——朝鮮伝道計画の前後史

東北学院大学教養学部准教授

松谷基和

はじめに

押川方義（おしかわまさよし）（1850—1928）は明治初期を代表するキリスト教の牧師であり、東北学院（在仙台）の設立にも尽力した教育者である。また、彼は早い時期から朝鮮*に関心を寄せ、日清戦争後に大日本海外教育会という民間の教育団体を設立し、朝鮮の首都ソウルに「京城学けいじょうがく堂」という日本語による近代教育を施す学校を創設する運動の中心人物であったことでも知られる。

この京城学堂については教育史分野の研究者によって一定の研究がなされているが、史料の不足もあって、その設立経緯や教育内容の詳細については不明な点も多い。

既存の研究では、大日本海外教育会と京城学堂の設立が、日清戦争直後であったという政治史的な文脈に照らして、押川の動きは、日本の対外膨張政策に乗じた帝国主義的な動機に基づくものと評価されている。*しかし、確かにそうした側面があったにせよ、当時の日本を代表するキリスト教の指導者であった押川が、突如、朝鮮での教育事業に乗り出したかについての明確な理由は提示されてこなかった。

そこで、筆者は、それまで押川がキリスト教教育界のリーダーであったことを重視し、彼のキリスト教的な背景と彼の朝鮮に対する関心には、何らかの繋がりがあるのではないかと仮説的見通しの下、当時の日本におけ

るキリスト教運動に目配りしながら、押川の行動の背景を探ってみた。その結果、予想に違わず、押川の朝鮮に対する関心は、やはり彼のキリスト教的な背景と直接の繋がりがあったことが見えてきた。そこで、本稿では、これまでの調査で明らかになったキリスト教を通じた押川と朝鮮の繋がりについて、その概要を紹介したい。

押川方義の略歴

最初に、押川の初期の人生について簡単に整理しておく。押川は1850年に松山藩士の家に生まれた。その後、1869年、押川は松山藩から留学生として英学修行のために横浜に派遣され、そこで米国長老派宣教師であるJ・H・バラに出会い、キリスト教に改宗した。1872年、押川は、他の受洗者と共に日本で初めてのプロテスタント教会「にほんきりすとしんがかい日本基督教会」を立ち上げ、1876年には新潟に移動して伝道を行った。さらに1880年には伝道の拠点を仙台に移し、ドイツ改革派教会（長老派）ミッションと協力して、仙台を中心とした東北地方に広く伝道を行うと共に、けんちやう仙台神学校（後の東北学院）を設立するなど伝道と教育面で顕著な働きを見せた。

CHEONGHAK

ちなみに、後に大正デモクラシーの旗手として知られる吉野作造よしのさくぞうも青年時代を過ごした仙台で押川方義の説教を聞いており、その印象を次のように回想している。

私（吉野）が中学に入ったのは明治25年（1892年）であるが、時勢が道德的になりつつあったので、感心しながら押川先生の説教を聞いた……*3

今でも英雄というと、押川氏を思います。風紀頹廃ふうきたいはいを難じ其の弁鋭く……押川先生の説教が如何に立派であったかが解る。*4

このように押川は、仙台を中心とした東北地方を活動拠点に、その名を全国に知られたカリスマ的なキリスト教のリーダーであり、青年層からの人気は抜群であった。

押川方義と李樹廷との邂逅かいこう

かんげん管見の限り、押川本人が朝鮮に関心を持つに至った理由を明確に述べている資料は見当たらない。しかし、押川が30代の初めに、ある朝鮮人と出会っていたことは確認できる。この朝鮮人とは李樹廷という朝鮮国の政府か

ら日本に派遣された官吏である。当時の朝鮮国は1876年に日本と開港条約を交わして以降、日本の近代化を学ぶべく政治指導者や官吏を数次に亘って視察団を派遣しており、李樹廷はこうした視察団の一員として西洋の農業技術を学ぶ予定で来日した。しかし、李は滞在中に親しくなった津田仙（西洋農業科学の第一人者であり、後に津田塾大学を創設する津田梅子の実父）の影響でクリスチャンとなり洗礼を受けた。当時の朝鮮国は未だクリスチャンとなつた李樹廷は、日本のクリスチャンにも大きな感激を与え、彼は1883年に東京で開催された「基督教大親睦会」（全国のクリスト教徒による交流行事）に招待され、日本人クリスチャンから大歓迎を受けた。実はこの会合には押川方義も参加しており、その時の記念写真からも李の後方に押川の姿が確認できる。

【写真参照】^{*6}

この時、果たして押川が李樹廷と直接に会話を交わしたかは資料上では確認できないが、李はこの集会で朝鮮語で祈禱を捧げており、その場に同席していた押川にも異国の言葉でなされた祈りが深い印象を与えたであろうことは想像に難くない。また、李樹廷の入信後、日本人

クリスチャンの間では津田仙を中心として、朝鮮への伝道可能性を模索する動きが広まった。例えば、津田仙は1883年夏に朝鮮に渡航して、現地の視察を行つてゐる。押川は直接はこうした朝鮮への伝道計画に係わつた形跡はないが、クリスチャンのネットワークを通じて朝鮮伝道への関心や情報を共有していた可能性が高い。

島貫兵太夫の朝鮮渡航と朝鮮伝道決議

李樹廷との邂逅後、押川は仙台で東北学院設立に向けて奔走しており、1891年から1年間の欧米外遊に出たこともあり、直接に朝鮮に関する目立つた行動は見られない。しかし、彼が帰国し、1892年に東北学院の院長に就任すると、それと時を同じくして、押川の学院での一番弟子ともいふべき島貫兵太夫が朝鮮に渡航している。島貫の渡航目的は伝道であり、現地で米国人宣教師や朝鮮人のクリスチャンと接触し、帰国後は押川や島貫が所属していた教団である日本基督教会の第8回大会（1892年11月）に朝鮮伝道を開始すべきとの決議を行った。その建議の具体的内容は二つあり、一つは朝鮮に在住する日本人向けに伝道者を派遣すること、もう一



出典：『植村正久と其の時代 第二巻』（教文館、1976年）568頁。押川は前から4列目、右から3番目の人物。

CHEONGHAK

つは、朝鮮の有望な若者を日本に招待し、日本のミッションスクールで学ばせた上で、将来の朝鮮のクリスチャンリーダー、すなわち「他日朝鮮文明の先導者、朝鮮基督教会の基」とたらしめることであつた。^{*10}

ちなみに、この建議は、島貫の個人名ではなく、押川が主導する宮城中会^{みやぎちゅうかい}の名義で提出されており、押川の賛同を受けていたものであるとみて間違いない。実際、朝鮮人の若者を日本で教育し、「他日朝鮮文明の先導者、朝鮮基督教会の基」とする構想は、島貫自身が「押川氏の考えも又之に同じく」と当時から認めており、押川の意向が反映されたものであつた。^{*12}

しかし、押川と島貫の尽力により提出された朝鮮伝道に関する建議は、必ずしも当時の日本基督教会全体からの積極的支持を得るものではなかつた。最初にこの建議が提出された第8回大会では、大会の伝道局で調査して可能な限り実行するという決議がなされたが、次回大会（1894年）では、「事務多端にして之を調査する事能^{あた}ず」と却下され、何ら実行に移されることがなかつた。^{*14} こうした日本基督教会の消極的姿勢を目の当たりにして、島貫は「朝鮮伝道は左程に困難なるか。又左程に冷淡に遇すべきものか」と慨嘆^{がいたん}し、「朝鮮伝道の議は冷淡に待

遇せられて終りたり」と失望を禁じ得なかつた。^{*15}

朝鮮伝道計画と大日本海外教育会の連続性

ここで興味深いのが、押川と島貫の教会を通じた朝鮮伝道計画が頓挫するのと同様として設立されたのが、後に京城学堂を設立する母体となる「大日本海外教育会」であつたという点である。大日本海外教育会は、日本語を通じて近代教育を海外にも広める目的で設立されたものであり、教会やキリスト教の伝道とは直接関係のない組織であつたが、この教育会の立役者である押川がそれまでは教会内で朝鮮伝道計画の旗振り役であつたことを考えるならば、この両者には何らかの繋がりがあつたと見るべきであらう。

この視点から筆者が、大日本海外教育会設立時の賛同人名簿を見ると、その多くがクリスチャンであり、押川方義、島貫兵太夫は勿論のこと、津田仙をはじめとして、それまで朝鮮伝道計画に係わつてきた主要な人物が全て名を連ねている。つまり、朝鮮伝道計画を推進して来た人物たちは、教会を通じての朝鮮伝道計画が頓挫した後、揃つて大日本海外教育会の設立に参加しているのである。

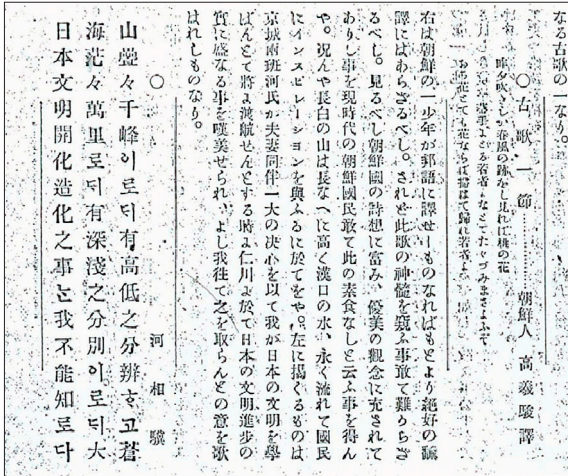
実は、この両組織における人的連続性は、当時のキリスト教会の関係者には周知のことであり、例えば、植村正久（押川方義と同時期に受洗した明治期を代表する有力な牧師）は、大日本海外教育会について「文明的教育は何人の手に於てするも伝道に大関係なしとせず。況や基督教の精神を抱ける諸氏の教育事業に於てをや。其の方法宜しきに適ひ、当局者其の人を得れば、其の朝鮮伝道に影響を及ぼすことを知るべきのみ」と述べ、教育会の中核メンバーがクリスチャンである以上、その教育事業が伝道に貢献するだろうと一定の期待を寄せていたのである。^{*16}

さらに押川自身も後年、大日本海外教育会の発足について、次のような回想を残しており、両組織に連続性があつたことを自ら認めている。

私は初めから基督教主義の精神教育を理想としてるもので、朝鮮問題の如きもこれで解決したいものだと思つておつたのである。しかのみならず伝道という区域の中に限るなれば、種々の不都合があつた。先ず第一に朝鮮に於ける外国宣教師等の反感である。これは伝道を標榜して行けば必ず衝突するを逸れない。第二は一般国民の

同情如何、従つて資金募集に及ぼす影響如何である。そこで私は純然たる教育事業のみにしたのであつた。^{*17}

この証言からは、在朝鮮の外国ミッシンとの摩擦や競合を避け、またキリスト教徒以外の日本人の協賛と寄附を得るために、敢えて「伝道」ではなく「教育」を前



出典：『救世』第5号(明治28年7月)22頁

CHEONGHAK

面に押し出したことが窺える。実際、この証言は、大日本海外教育会の当初の名称が「大日本海外伝道会」であつたにもかかわらず、最終的に「伝道会」を看板からはずし、「教育会」と入れ替えたという事実と符合しており、^{*18}信憑性が高い。

押川の朝鮮渡航と朝鮮人留学生

大日本海外教育会の設立直後の1894年12月、押川方義は初めて朝鮮を訪問し、帰国の際に朝鮮の学部衙門(日本の文部省に該当)からの派遣留学生として姜璟熙(21歳)、高義駿(17歳^{*19})の2名を連れて帰った。この若い留学生2名を身元引受人として自宅に住まわせて世話をしたのが、当時、仙台から東京に活動拠点を移していた島貫兵太夫である。^{*20} 島貫はこの2名の留学生を世話しつつ自ら主宰する伝道雑誌『救世』に朝鮮に関する記事を継続的に掲載し、クリスチャン読者の朝鮮に対する関心を高める努力を行う一方、姜と高が日本語に不自由しくなると、彼ら自身の声を紙面に紹介している。^{*21} 島貫には朝鮮の文化にも真摯な関心を寄せており、当時ではまだ珍しかったハングル活字を紙面に用いて朝鮮の詩歌

や文学の紹介も行っている【写真参照】^{*22}。こうした姿勢からは、島貫が朝鮮を日本と対等な文化を持つ国と見て、朝鮮人にも敬意を払って交際していたことが窺える。

他方、押川は、朝鮮視察後の講演の中で「日本が朝鮮を預かれる、医者が大病人を預かりたるが如し、船頭が破船を救はんとするが如し」と日本と朝鮮の国家間の優劣関係を強調しつつも、一般の日本人が「朝鮮に猜疑心多し」と偏見を持つことに對しては、果たして「日本国民は猜疑心なきや否や」と問い返し、また「朝鮮に公心の心なしといふ」言説に對しても、「日本国民は公心の心あるや否や、是れ自省すべき問題なり」と、朝鮮人を劣った国民として見なす日本社会の風潮には異を唱えていた。このように島貫と押川は共に朝鮮人を日本人と對等な存在として見ようとする視点を持っており、おそらくそこには、彼らが教育を通じて「他日朝鮮文明の先導者、朝鮮基督教会の基」となる人材を育成しようとするビジョンを持っていたことが影響していると思われる。

おわりに

これまでの研究では、押川の持つクリスチャンとして

のアイデンティティやネットワークや、実際に彼らが朝鮮伝道計画に深く関与してきた事実が見逃される傾向にあった。それゆえに、押川と朝鮮を結びつけた契機は、日清戦争に始まる日本の朝鮮進出に求められ、その内的な動機も彼個人の政治的野心やナショナリズムに還元して理解する見方が主であった。

しかしながら、本稿が明らかにする通り、押川とその周辺の人物に強いナショナリズムや帝国主義への同調姿勢が見られたにせよ、彼らは明治期のクリスチャン第一世代としての独自の理念やアイデンティティを有しており、朝鮮への関与においても、彼らのクリスチャンとしての使命感や教会を通じた国境や民族を超えるインターナショナルな交流関係が、彼らの行動や判断に少なからぬ影響を及ぼしていたのである。

押川に限らず日本のキリスト教系知識人の対朝鮮関係を分析・評価する際には、「政治」のみならず「宗教」的次元も視野に入れた総合的・多元的な評価が必要なのではないであろうか。

- * 1 本稿が対象とする時期の日本語資料では、朝鮮王朝（1392-1910）を指して「朝鮮」「朝鮮国」、同国の人々を指して「朝鮮人」「韓人」という名称が使用されている。以下、本稿では記述上の煩雑さや混乱を避けるため、一次資料からの直接の引用の場合を除き、「朝鮮」「朝鮮人」の語を使用する。
- * 2 例えば、藤一也は、大日本海外教育会について、「それは当時の国内でのキリスト教圧迫に対する打開策であった。が、それは同時に政治的、経済的面で日本の海外進出——すでに始まっていた対韓帝国主義的植民地政策——に歩調を合わせるものであった」と評している。『押川方義』109頁。
- * 3 『教会に対する昔の青年と今の青年の態度』『開拓者』（1926年7月）16頁。
- * 4 『教会に対する昔の青年と今の青年の態度』15頁。
- * 5 『韓人受洗』『七一雑報』第8巻19号（明治16年5月11日）28、29頁。なお、李樹廷と彼を取り巻く人物たちのネットワーク形成過程については、松谷基和『明治クリスチャンと朝鮮開化派——キリスト教と「アジア主義」の交錯』松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか』（ミネルヴァ書房、2013年）に詳しい。
- * 6 『植村正久と其の時代 第二巻』（教文館、1976年）568頁。
- * 7 『七一雑報』（明治16年5月25日）
- * 8 松谷基和『明治クリスチャンと朝鮮開化派——キリスト教と「アジア主義」の交錯』414頁。
- * 9 相沢源七『島貫兵太夫伝』（教文館、1986年）55頁に掲載されている当時の島貫の渡航ビザの写真を参照。
- * 10 山本秀煌編『日本基督教大会記録 第8回』（明治25年11

CHEONGHAK

- * 11 月）38、39頁。
宮城中会は、押川が開拓した仙台、岩沼、石巻、古川の四つの教会で構成されており、1885年に日本基督一致教会に加入した。山本秀煌『日本基督教会史』（日本基督教会事務所、1929年）87頁。
- * 12 『救世』第4号、4頁。
- * 13 『日本基督教大会記録 第8回』（明治25年11月）39、40頁。
- * 14 『救世』第4号、5頁。
- * 15 『救世』第4号、5頁。
- * 16 『福音新報』第196号（明治27年12月14日）藤一也『押川方義』108頁より再引用。
- * 17 『海外教育会と本多庸一』道（明治45年5月1日）。川合『押川方義管見（明治編）』102頁より再引用。
- * 18 藤一也『押川方義』109頁。
- * 19 高は日本の朝鮮併合を推進し、植民地期を通じて日本支配に協力的であった。朝鮮の独立には否定的であったが、1919年の3・1独立運動後には、帝国臣民としての朝鮮人に参政権付与を請願する運動を展開した。今日の韓国では、いわゆる『親日派』として極めて否定的な評価を受けている。親日人名辞典編纂委員会編『親日派人名辞典1』（『韓国語』（民族文化研究所、2009年）173、175頁。
- * 20 『東北文学』第9号（明治28年4月25日）50頁。
- * 21 『救世』第2号、15、16頁。『救世』第5号、17頁。
- * 22 『救世』第5号（明治28年7月）22、23頁。
- * 23 『芙蓉峰』第2号（明治29年6月）16、17頁。

磨製石剣からみた 韓半島青銅器時代社会

島根大学法文学部准教授

平郡達哉

はじめに

青銅器時代には本格的な農耕社会が形成されはじめると共に、次第に社会の複合度が高まっていくものとされている（李盛周2000、武末2002、裴眞晟2006b、安在晧2006、李相吉2006、金承玉2007、金鐘一2007、庄田慎矢2007、李熙濬2011など）。筆者はこれまで墳墓資料からこのような農耕社会の形成・発展に対してアプローチする作業を進めてきた。墳墓資料から当時の社会を復元しようという試みは数多くの研究者によって進められている。

墳墓資料自体は新石器時代から見られるが、青銅器時

代のそれは定型化した墳墓構造・副葬品の多様性、そして一連の葬送儀礼の挙行など複数の要素において相違点がある。副葬品について見ると、新石器時代には見られなかった琵琶形銅剣・銅矛・銅鏃、磨製石剣・石鏃といった武器の形態をなす副葬品が出現する。この中でも支石墓や石棺墓などの墳墓の副葬品として製作された磨製石剣は中国東北部から沿海州、韓半島、北部九州・瀬戸内西部において見られるが、分布と出土数量、形態の多様性などからみてその中心地は韓半島にあるといえる。ここではこれまでの磨製石剣研究の流れを振り返り、その課題を提示した後、韓半島青銅器時代社会において磨製石剣がいかにして使われ、どのような意味を持った器物であったのかについて考えてみる。磨製石剣は住居址と

いった生活遺構からも出土するが、大部分が墳墓の副葬品として出土しており、本稿では墓制研究の側面から当時の社会の性格について論ずるため、墳墓出土品に対する検討を行う。

1 研究動向と課題

現時点で韓半島磨製石剣に対する最も古い言及は、1886（明治19）年に神田孝平が開城から出土したと伝わる磨製石剣を『東京人類学会報告』の「雑記」にスケッチと共に紹介したものと考えられる（神田孝平1886）。しかし、磨製石剣が韓半島の歴史を物語る歴史資料として認識されはじめたのは、20世紀の初め、朝鮮統監部及び朝鮮総督府による植民地経営事業の一環として行われた文化遺跡調査が開始してからである。この時期には磨製石剣に対する初步的な分類を試みられたが（梅原末治1922、高橋健自1925）、明確な分類基準があつたわけではなく形態分類に近いものであつた（有光教一1956）。

その中で韓半島出土磨製石剣に対する最初の本格的な論考を発表したのは有光教一であつた。1939年と1

CHEONGHAK

955年の論考において基部の形状による分類（A形式（有茎式）、B形式（有柄式）、C形式（無茎無柄式）、D形式（柳葉形）および剣身の樋の有無という要素を加えて型式を細分させ、有樋のものから無樋のものへの変化を考えた（有光教一1955）。有光は磨製石剣の祖型として細形銅剣又は鉄剣を挙げた。分布状況にも違いがあるとし、A形式は韓半島西北部を中心分布域とし、B形式は漢江流域以南に広く分布するとした（有光教一1939）。上記の一連の研究をまとめたものが1959年の『朝鮮磨製石剣の研究』である。205点の磨製石剣の図面を提示し、それを基に型式分類と分布、出土遺構（埋葬遺構）について検討するなど体系的な研究を行った。そして、磨製石剣が持つ歴史的・社会的意味について、支石墓のような巨大な建造物の構築が可能な社会が存在していたことを前提にしつつも、磨製石器を作ることに長じていた韓半島土着の石器時代人が、より高度な文明を所持していた征服者の道具を模倣したものという観点からの議論であつたと評価される（田村晃一1988）。これ以降、韓半島出土磨製石剣の研究は有光教一の研究成果を軸にして、その内容の賛否を問う形、あるいは批判的に継承していく形で進んできた。

1967年に『韓国支石墓研究』が刊行されたが、この研究報告書は単に青銅器時代墓制研究の転換点となっただけでなく、磨製石剣研究にも重要な意味を持った。つまり、京畿道坡州玉石里遺跡の卓子式支石墓調査時、その下層で確認された長方形住居址から血溝を持つ有段柄式石剣が出土し、これと共伴した建築部材と考えられる木炭片に対するC14年代測定値(3590±105 B.P.)が公表された。その結果、磨製石剣の年代が遅くとも紀元前6世紀後半に遡る可能性が提示され、細形銅剣の年代よりさかのぼることから有光が提示した細形銅剣祖型説が否定された(金載元・尹武炳1967)。

その後、『韓国支石墓研究』での調査・研究成果を基に韓国人研究者を中心に型式分類と磨製石剣の祖型をめぐる論考が1990年代半ばまで持続的に発表されていた。特に型式分類については多くの研究者によって見解が提示されているが、その大枠は有光が提示した基部形態の違いによつて有茎と有柄に大別するという点では一致していた。その中でも田村晃一と沈奉勤の研究は有光の研究成果を批判的に検討・継承しつつ、分類と編年の枠組みを明確にした点で1990年代までの研究を総括する成果を示した(田村晃一1988; 沈奉勤1989)。

1990年代以降続く大規模発掘調査の正式報告書が刊行されるとともに磨製石剣資料が増加し、出土遺構の種類や詳細な出土状態が分かる事例が増えたことをうけて、磨製石剣の出土状況を基に副葬行為や儀礼行為の復元を試みる研究が試みられた(趙榮濟1998、河仁秀2000、李相吉2000、後藤直2000、平郡2008:2009)。

また、この時期は有柄式石剣の編年研究が進むとともに、副葬状態に対する検討を基に青銅器時代社会において磨製石剣が有した意味・意義付けが試みられた時期である(裴眞晟2006a、黄昌漢2008、張・平郡2009)。また、韓半島内の地域ごとにおける磨製石剣の様相に対する研究(成璟瑯2005、劉美香2006、孫峻鎬2009、姜元杓2006)、沿海州出土石剣の集成・再検討など研究対象地域の細分化・拡大がみられる(姜仁旭2011、Okana Yanshin-a Shinya Shoda 2013)。

それまで多くの研究者によつて磨製石剣の分類と編年研究が進められてきたが、既存の有柄式石剣の型式分類案・編年案をより具体的に提示するとともに墳墓での共伴遺物による型式変遷の妥当性を検討し、研究水準を一

段階高めたのは朴宣映の研究である（朴宣映2004..2009）。

もう一つの論点として、韓半島出土磨製石剣の起源に對するものがある。新石器時代には見られず、青銅器時代になって出現する磨製石剣が何らかの青銅剣をモデルにして製作されたとする観点もやはり研究開始当初から提起されてきた。

有光教一は細形銅剣と磨製石剣との分布が一致する点を根拠に細形銅剣を祖型としたが、この見解については、先ほど述べた京畿道坡州玉石里遺跡での長方形住居址出土磨製石剣の年代から否定されることとなった。その後、多くの研究者がオルドス式銅剣、中国式銅剣等を磨製石剣の祖型と想定してきたが、具体的な比較資料を提示しつつ祖型を提示したのは金邱軍であった。彼は磨製石剣に對する詳細な型式分類を行い、分布論や銅剣と石剣の劍身の比較、石剣が描かれた岩刻画などを提示しつつ、磨製石剣の祖型として琵琶形銅剣を挙げている（金邱軍1996）。

近藤喬一は慶尚南道義昌郡（現、昌原市馬山会原区内西邑）平城里や蔚山彦陽面東部里180番地出土の有樋有段柄式石剣は遼寧省寧城小黑石溝M8501石槨墓出

CHEONGHAK

土琵琶形銅剣をモデルにしたものと指摘し、より直接的な根拠資料をしており、祖型に関する論議において近藤喬一説の影響は強い（近藤2000）。

宮本一夫は東北アジアにおける磨製石剣の出現過程を簡潔明瞭に説明している。有茎式石剣は鈴首剣（宮本分類のB1式銅剣）を模倣して遼東・韓半島北部で成立し、有段柄式石剣は近藤喬一が示したように遼西の琵琶形銅剣（宮本分類のC1式銅剣）と関連づけた（宮本2004）。

今後の課題のひとつとして、磨製石剣の製作・流通に関する問題がある。数多くの磨製石剣が出土しているが、出土遺構の大部分は支石墓、石棺墓などの埋葬遺構である。住居址からの出土品も存在するが（李ジェウン2011）、磨製石剣製作の一連の過程を示すような資料は現在のところ未確認である。今後も資料の持続的増加によって製作と関連した資料の発見も期待され、それらの資料を基に磨製石剣の製作と流通についても言及することが可能となろう。

研究視角・目的の大きなビジョンとして庄田慎矢・寺前直人が指摘しているように「内的には武器、武威の社会的機能やその所有による階層化の進展、外的には素材

獲得と生産技術の高度化による物流を介した中心・周辺関係の形成」(庄田・寺前2012)などを見通した研究目的の設定が必要であろう。

また、近年では青銅器の模倣という側面から東北アジアにおける磨製石剣の社会的位置付けを行う研究もあり、今後の研究が展開してゆくべき方向性を示している(庄田2016)。

2 型式分類と編年

韓半島磨製石剣研究の初期段階から重要な位置を占めていたのは型式分類に対する検討であった。その中で最も影響力を持つものが研究史でも述べたように、有光教一の提示した分類案であった。これまで日韓の研究者によって様々な型式分類・編年案が提示されてきた*。

まず、有光が指摘したように磨製石剣は柄部の有無によって、つまり柄を剣身と同時に表現した有柄式と、柄を木など別の有機物で製作する有茎式に大別される。

有茎式石剣は田村晃一、李栄文、中村大介が提示しているように、分類基準は茎部の長さ・幅、挟りの有無が挙げられる(田村1988、李栄文1997、中村20

12)。中村による分類で有茎式石剣を簡潔明快に説明できるためこの分類に従う。

有茎Ⅰ…剣身に比べ茎部が細いもの。血溝の有無で細分される。

有茎Ⅱ…茎部が挟りなどによって多段をなすもの。

有茎Ⅲ…茎部の段が減り、逆T字形をなすもの。

有茎Ⅳ…茎部が方形で幅広の突起があるもの。

無茎式…茎部が無く、剣身のみもの。

さらに有柄式は柄部の形態的特徴、つまり柄が上段・下段に分かれ、これを繋ぐ段連結部を有する有段柄式(有節式)石剣と、柄部が上段・下段に分かれない無段柄式石剣に分けられる(図1)。有段柄式石剣は柄の中央にみられる段連結部の長さ・断面形態、鏝部の突出度、柄頭部の形態、剣身の形態、剣身と柄部の連結形態、血溝の有無によって、Ⅰ～Ⅵ型式に分けられる(表1)。中でも段連結部に注目し、各型式の相伴遺物に対する検討から、Ⅰ↓Ⅵ型式への変遷が提示されている(朴宣映2004・2009)。Ⅰ・Ⅱ型式のうち、柄部に円形の小穴があげられたものや把頭が付いた装飾性の高いもの

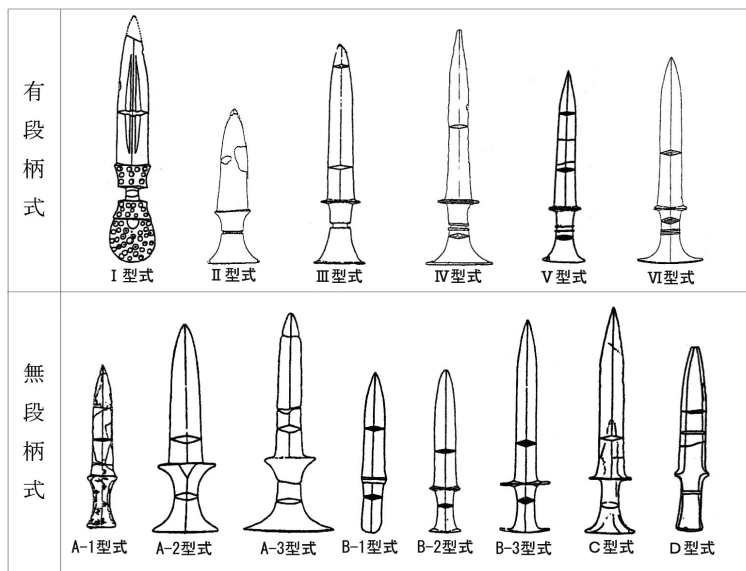


図1 有柄式磨製石剣分類図 (朴宣映2004を基に作成)

CHEONGHAK

を「裝飾石剣」と呼び、青銅器時代前期に製作・副葬された^{*2} (黄昌漢2008)。さらにIV・V・VI型式は柄の上・下段に帯状の節を持つ有節柄式に該当し、前期末から後期後半にかけて製作・副葬された。有段IV式は共伴遺物として平根一段茎式石鏃 (上紫浦里4号支石墓) と尖根一段茎式石鏃 (如意谷30号支石墓) が見られることから前期末から後期前半、有段V式でも平根一段茎式石鏃が見られるが、有段V式の中心地域は大邱地域にあり、この地域では平根一段茎式石鏃が後期前半まで残る (李秀鴻2005、庄田2007)。有段VI式は尖根一段茎式石鏃が共伴するため後期後半に該当する (張龍俊・平郡2009)。

次に無段柄式石剣は、剣身と柄部との連結形態によってA・B・C・Dの4型式に分ける。さらにA・Bを鏃部の突出度によって、それぞれ表2のようにA1・A2・A3、B1・B2・B3式に分けられる (朴宣映2004・2009)。

そして、各型式の共伴遺物の検討からA1↓A3式、B1↓B3式への変化を提示するとともに、A型とB型の併行関係についても言及されており、それらを整理したものが表3である。

表1 有段柄式石剣の分類と分期(朴2004より作成)

分期	要素	段連結部長さ	段連結部断面形態	帯状の節
	型式			
Ⅰ期	Ⅰ型式	1.5cm以上	円形・楕円形	無し
	Ⅱ型式	1～1.5cm	長楕円形・隅丸長方形	無し
Ⅱ期	Ⅲ型式	1cm未満	レンズ形・菱形、レンズ形多い	有り
	Ⅳ型式(有節式)	1cm未満	レンズ形多い	明確に。柄部幅より外に突出
Ⅲ期	Ⅴ型式(有節式)	1cm未満	レンズ形・菱形、同じ割合	さらに明確に。側面の突出も明確
	Ⅵ型式(有節式)	節1条と同じ	菱形多い	柄部の表裏のみあり、側面研磨

表2 無段柄式石剣の分類(朴2004より作成)

型式	分類基準	
A	剣身と鐔部の連結はほぼ直角に曲がり、段をなす反面、鐔部と柄部の連結は段や節なく、緩慢に連結するもの	A1:剣身と柄部が区別できるほど短く突出
		A2:鐔部が1cmほど突出
		A3:鐔部が2cm以上突出
B	剣身と鐔部、鐔部と柄部の連結が両側ともに緩慢に連結して、鐔部が節の形態をなすもの。平面からみた場合、鐔部から剣身と柄部への連結が対称となるもの。	B1:剣身と柄部が区別できるほど短く突出
		B2:鐔部が1cmほど突出
		B3:鐔部が2cm以上突出
C	剣身と柄部の連結部が節の形態をなす。平面からみた場合、鐔部から剣身へは緩慢に連結する反面、鐔部から柄部は急に角をなして連結し、非対称的なもの。	
D	鐔部が表現されておらず、平面からみた場合、剣身と柄部の連結に段や節がなく、面でつながるもの	

表3 各型式磨製石剣の時間的相対関係(朴2004改変)

分期	型式	有段柄式 石劍	一段柄式石劍				有茎式
			A	B	C	D	
1期	I 型式	I				有茎式	
	II 型式						
2期	III 型式	II	I、II		C		D
	IV 型式						
3期	V 型式	III	III				
	VI 型式						

上記のような型式分類と変遷を基に、副葬される磨製石剣の特徴と意義づけを以下で行う。

3 磨製石剣の副葬とその特徴

ここでは、韓半島出土磨製石剣の主な用途・機能と考えられる副葬行為について調べてみよう。青銅器時代墓制における副葬行為に対する研究は、墓制資料が増加し始めた2000年代になって進展を見せた。その先駆的な研究としては李栄文のものがあり、支石墓出土品の性格づけを行った。彼は遺物の出土位置を基準に埋葬主体部内から出土する副葬用と埋葬主体部の外側や周辺に構築された積石施設の間から出土する儀礼用に大別し、さらに儀礼用を用途によって被葬者の死を哀悼する意味を持つ葬送用と支石墓築造と関連した祭儀用とに細分している(李栄文2002)。これを受けて筆者も副葬遺物を下記のように区分した(平郡2009)。特に、副葬用遺物は埋葬主体部への遺体安置時に共に納める棺内副葬遺物と、意図的に埋葬主体部の外側に納める棺外副葬遺物に分けられるが、両者には琵琶形銅剣、管玉、磨製石剣・石鏃、赤色磨研土器が共通して出土している。

CHEONGHAK

墳墓出土遺物

副葬用遺物

棺内副葬遺物(埋葬主体部への遺体安置時に被葬者と共に副葬)

棺外副葬遺物(埋葬主体部構築前あるいは構築後に副葬)

構築後に副葬)

儀礼用遺物

葬送用遺物(被葬者の死を哀悼)

祭儀用遺物(墳墓築造過程での祭祀と関連)

まず、磨製石剣の棺内副葬について見てみよう。韓半島青銅器時代の墳墓、特に支石墓における副葬が希少な行為であり、その数少ない副葬品の中でも大多数を占めるものが石剣であることは指摘されてきた(後藤直2000)。韓半島南部に多くの青銅器時代墳墓遺構が調査・報告されている全羅南道と嶺南地域(慶尚北道・慶尚南道)の場合、全埋葬遺構に対する磨製石剣の副葬率はそれぞれ7.3%、8.4%と非常に低い(平郡2012)。

このような磨製石剣がどのように副葬されるのかについて、埋葬主体部内での出土状況から言及可能である。埋葬遺構での詳細な出土状況の分かる資料が多く確保されている嶺南地域の磨製石剣62点について以下のように

副葬類型を設定した(図2)。

I 類型…埋葬主体部の長壁に沿った中央(30点)

II 類型…埋葬主体部の長壁に沿った短壁寄り(8点)

III 類型…短壁沿い(4点)

IV 類型…石室中央(12点)

V 類型…不定・曖昧なもの(4点)

62点中38点が長壁に沿って出土しており、そのうち長壁中央から30点確認されているが、この位置は被葬者の腰部分に当たることから佩用状態を示すものと解釈でき、磨製石剣の基本的副葬パターンであると考えられる。これから出土する磨製石剣は全長が35cm以上のものが多く、剣身と柄部の長さの比率が3・1をなすような非常に長い剣身を持つことが特徴である。このような長い剣身を持つものは武器としての機能を有するというよりは、副葬用に製作されたものといえる(平郡2008・2012)。

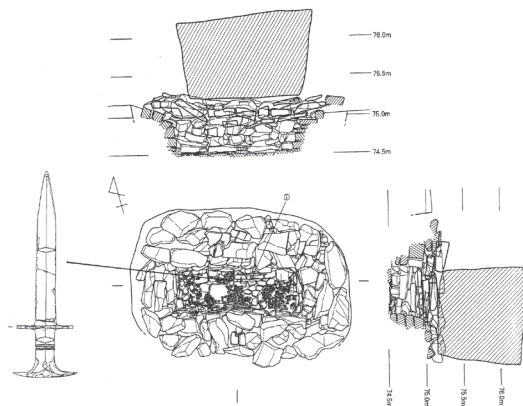
より具体的に磨製石剣の副葬位置・状況を知るためには、磨製石剣と人骨が共に調査される事例についても調べてみる必要がある。関連資料の数は少ないが、埋葬

主体部内での磨製石剣と人骨の重複関係から見ると、埋葬主体部内に遺体を安置する前に磨製石剣を長壁に沿った床面に置いたことが達城坪村里3号・20号・28号石棺墓の事例から分かる(図3)。また、晋州中川里Ⅲ-1号石棺の場合、上半身は右腕を真つ直ぐ伸ばし、左手を腹部に置き、下半身は脛骨を45度ほど傾けた屈葬状態をなす人骨が検出された(図4)。磨製石剣は被葬者の右腹部上部に柄を頭部に向けて副葬されているが、人骨との重複関係が不明なため、遺体の安置前に床面に置いたかどうかは不明である(ウリ文化財研究院2009)。しかし、磨製石剣の佩用状態を意識した副葬であることは分かる。

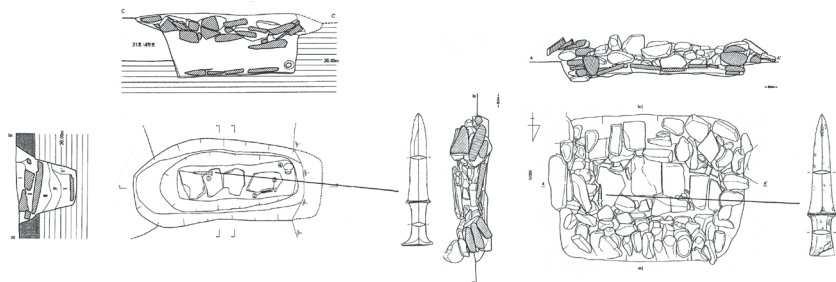
この他にも忠清北道堤原郡黄石里13号支石墓、晋州本村里1号・2号石棺墓でも磨製石剣と人骨が共に調査された事例がある。

忠清北道堤原郡黄石里13号支石墓では人骨の右膝関節の横から鋒を被葬者の頭側に向けて磨製石剣が出土している。年齢や性別については鑑定が行われていない(金載元・尹武炳1967)。この場合、先ほど述べた磨製石剣副葬のII類型に属するものとなる。

晋州本村里1・2号石棺墓は並列して築造されており、

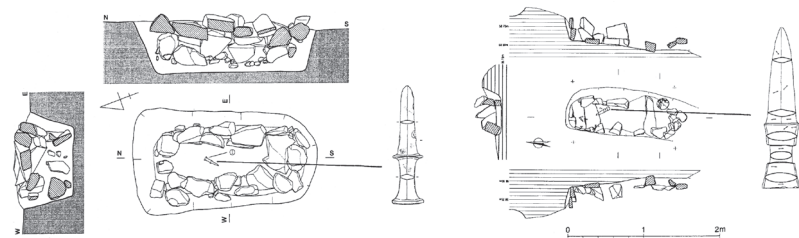


I 類型 清道 陳羅里1号墓



II 類型 梁山 所土里40号墓

III 類型 晋州 玉房1地区5号墓



IV 類型 泗川 梨琴洞C-1号墓

V 類型 龜尾 月谷里1号墓

図2 磨製石剣の棺内副葬類型

1号からは磨製石剣、2号からは磨製石剣と石鏃が出土している。

1号石棺墓では頭蓋骨と脚部が残存していた。頭蓋骨のそばには人為的に割られた磨製石剣の身部片が副葬されていた。残りの鋒部と柄部は東壁石と蓋石の間に副葬、つまり棺外副葬されていた。これら棺外副葬遺物は全て壁石の上部部から確認されており、蓋石を築造する過程で副葬したと報告されている（慶尚大学校博物館2011）（図5）。1号石棺墓からは左右の大腿骨が検出されているものの、性別と年齢は不明である。

2号石棺墓では人骨の痕跡は比較的良好に残存しており、頭蓋骨は南短壁、脚部は北短壁に密着しており、仰臥屈伸葬をなす。磨製石剣は北短壁外側の蓋石の間から人為的に3片に割られて重なつたまま出土している。人骨は頭蓋骨と左右の四肢骨、軀幹骨が確認されており、左右の前腕骨の肘関節は曲がつて胸部側に合わせている（図6）。性別と年齢については成年後半（30代）の女性と鑑定されている（慶尚大学校博物館2011）。特に、本村里1号石棺墓のような石剣の副葬は、慶尚南道泗川市梨琴洞A-1号でも確認される。ここでは磨

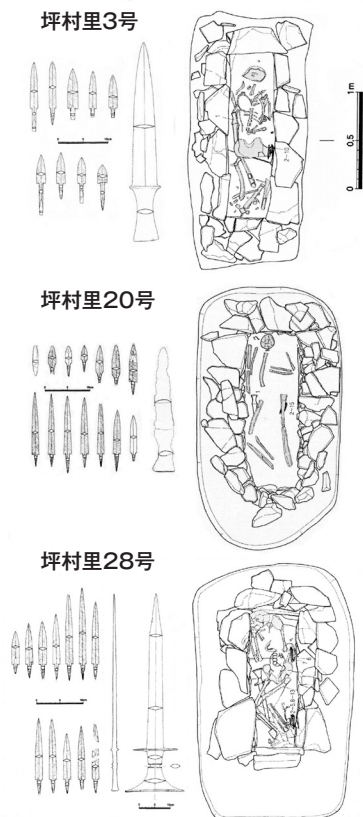


図3 達城坪村里3・20・28号石棺墓

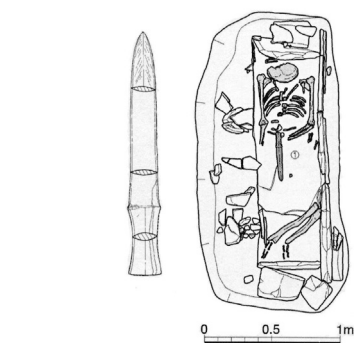


図4 中川里Ⅲ-1号石棺

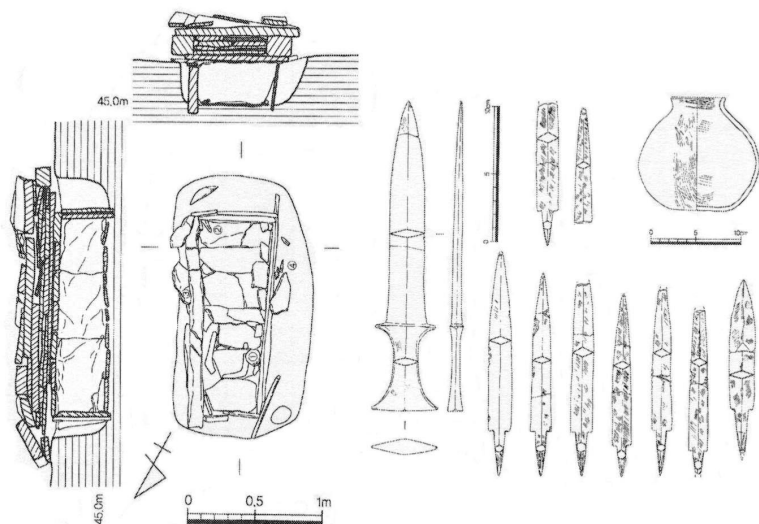


図5 本村里カ-1号石棺墓

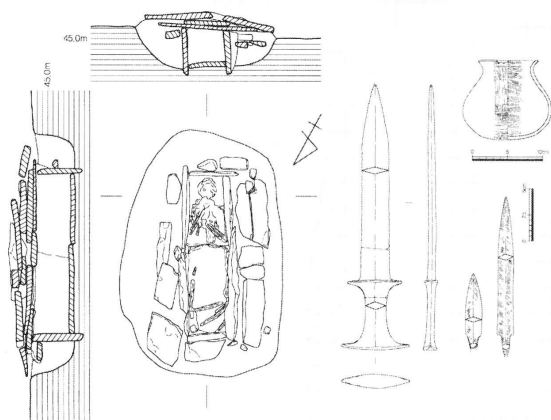


図6 本村里カ-2号石棺墓

製石剣を人為的に割って鋒先・身部・柄部の3片に分けて長壁外側の補強空間に棺外副葬した。鋒先片は補強石最下位から、身部片は補強石中位から、そして柄部は1次蓋石と同じ高さの補強石上位から出土したと報告されている(慶南考古学研究所1997)。副葬位置が長壁中央から短壁寄りの地点であることは棺外副葬される磨

製石剣の特徴を示している。

次に同じ武器形の副葬品である琵琶形銅剣の副葬様相との比較を行い、磨製石剣の副葬様相との関連性について言及してみよう。現時点で青銅器時代墳墓から出土し、その詳しい出土状況の分かる琵琶形銅剣は17点ある。琵琶形銅剣の副葬様相について、被葬者の年齢・性別を知ることがりとなる人骨資料とともに出土した事例は磨製石剣以上に少なく、広州駅洞マ―1号墓のものがあるが頭位や埋葬姿勢が分かるほど人骨は残存していない。ただ、最近調査された江原道平昌郡下里遺跡2号墓で、琵琶形銅剣と良好な状態で残存している人骨が埋葬主体部内から検出されており、琵琶形銅剣の副葬方法について重要な情報を提供している。詳細については正式報告書の刊行を待つこととしたいが、略報告書から分かる限りで言えば、下里遺跡2号墓は板石を立てて棺を構築し板石1枚で蓋石としている。棺内からは人骨（頭蓋骨、上下顎骨、歯、上下腕骨、大腿骨、脛骨、腓骨）が検出され、琵琶形銅剣は被葬者の左腕付近から体に平行するように鋒を足先に、茎部を頭側にして身部中間部分で2つに割れた状態で出土している（江原考古文化研究院2016）（図7）。石棺内は長辺163×短辺53cm、深さ

25cmを測り、その規模や人骨の出土状況から見ても被葬者は1名であると言える。

琵琶形銅剣と人骨が共伴しない場合でも、被葬者の頭位が分かれば被葬者と琵琶形銅剣の副葬位置の関係を知らることができるであろう。そのためには棺内副葬遺物、特に管玉など首飾りの部材と考えられる遺物が出土する事例（忠清南道扶余郡松菊里石棺墓、忠清南道舒川郡烏石里周溝石棺墓、全羅南道順天市牛山里内牛8号、慶尚南道泗川市梨琴洞D-4号墓）を基に、管玉が出土する場所に頭位がある可能性が高いと指摘し、琵琶形銅剣は鋒を脚側に向け、茎部を頭側にして副葬した、つまり茎部側に頭位があるとみた（平郡2012）。

琵琶形銅剣と人骨の出土例から見ると、茎部や柄部の方を頭位の基準とすることができよう。これを基準にすると韓半島青銅器時代墳墓出土の琵琶形銅剣17点中、埋葬主体部の長壁に沿って出土したものは12点となり、棺内出土琵琶形銅剣の70%を占めることから、基本的な副葬方法であったと考えられる（図8）。長壁に沿って出土するものをもう少し分けてみると、長壁中央に沿った床面に置かれる、つまり被葬者の腰の右側から7点、頭の左側から3点、胴部左側と左脚付近で各1点となる。



図7 平昌郡平昌邑下里2号墓 人骨および琵琶形銅剣出土状況
(江原考古文化研究院2016より転載)

CHEONGHAK

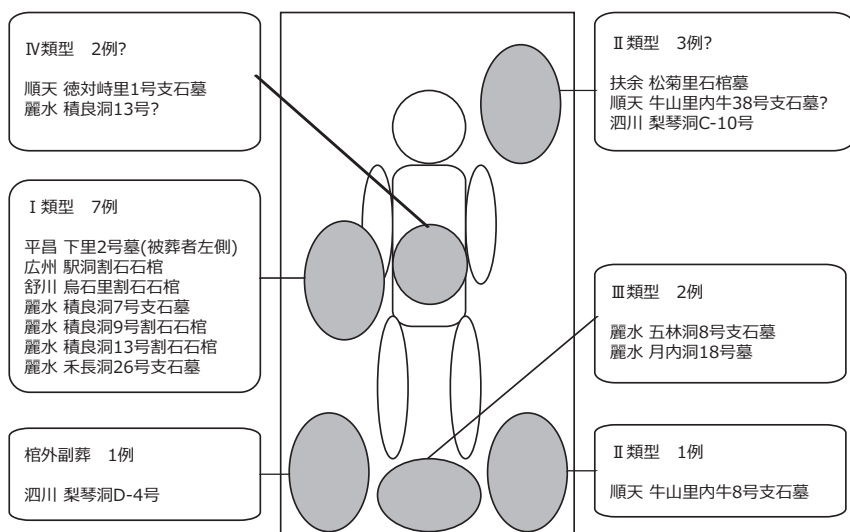


図8 青銅器副葬位置模式図

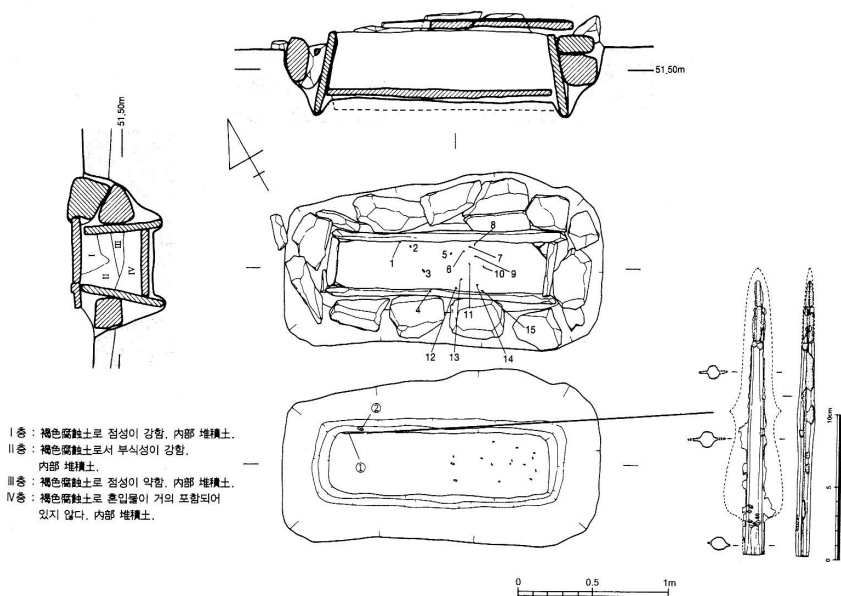


図9 棺外副葬された琵琶形銅劍(梨琴洞D-4号石棺墓)

厳密に規則化された副葬方法があるとは言えないが、埋葬主体部の床面に置かれている点は共通しており、被葬者の腰付近、つまり腰の右側に劍を佩用する様子を表現しており、これが琵琶形銅劍副葬の特徴である(平郡2012)。発掘調査時には琵琶形銅劍の劍身部分のみが出土するが、全羅南道の麗水積良洞7号支石墓・21号石槨、宝城徳峙里1号支石墓出土琵琶形銅劍の周辺では木質の痕跡が確認されており、木製の鞘に入れて副葬されたものと考えられる(李栄文・鄭基鎮1993・尹徳香1988)。

もう一つの副葬風習である棺外副葬における琵琶形銅劍と磨製石劍の比較を行ってみよう。唯一の青銅劍の棺外副葬事例である梨琴洞D-4号石棺墓では被葬者の右足元で鋒を足先方向に向けて、石棺の床石を敷く前の儀礼行為に伴って棺外副葬されている(図9)。一方、磨製石劍は長壁側から出土している。磨製石劍が本来持っている武器としての機能と梨琴洞A-1号の例以外は完形品であることを勘案して僻邪の意味を持っていたと解釈した(平郡2009)。

以上のように、磨製石劍副葬の特徴として、被葬者の腰部分への副葬、つまり劍の佩用状態を意識しているこ



図10 韓半島新石器時代と青銅器時代墓制における共通点と相違点

CHEONGHAK

これを挙げることで、これは磨製石剣より出土数が少なく希少性の高さが想定される琵琶形銅剣の副葬パターンと共通点を有していることが分かる。

前章で磨製石剣の副葬行為の特徴を調べてみた。次に青銅器時代になると現れる磨製石剣が持つ歴史的・社会的意義について考えてみる。

定住生活が始まり集落構成員の「死」を哀悼し遺体処理を行い埋葬する行為自体は、新石器時代から見られる。ここでも副葬行為は行われ、耳飾りなどの玉製品、貝製腕輪・足輪、生業関連遺物(釣針、石斧、石槍、砥石、石鏃)が出土している(任鶴鍾 2003)。

これが青銅器時代になると、石材を利用して一定した外部構造(上石、支石、敷石・積石)・内部構造(埋葬主体部)を有する墳墓が築造されるようになり墓制の定型化がみられるようになる。そして、副葬の面では琵琶形銅剣・銅矛・銅鏃の副葬、磨製石剣+石鏃+赤色磨研土器のセット副葬、茄子文土器・碧玉製管玉の副葬といった点が特徴であるが、両時代には土器・石鏃の副葬

4 磨製石剣と青銅器時代社会

とを挙げることで、これは磨製石剣より出土数が少なく希少性の高さが想定される琵琶形銅剣の副葬パターンと共通点を有していることが分かる。

という共通点も見られる(図10)。

青銅器時代になって新たに現れる多様な副葬品の中で、劍(銅劍・石劍)、鏃(銅鏃・石鏃)といった武器の形態を呈する副葬品について「武器形副葬品」と規定したことがある(平郡2012)。その中でも被葬者が生前に保有・管理していたと推定される棺内副葬遺物として、琵琶形銅劍・銅矛・銅鏃、磨製石劍・石鏃といった武器形副葬品が発見される点は重要である。

つまり、琵琶形銅劍と磨製石劍は1基の埋葬主体部から1点のみ出土することが基本的な副葬風習である(扶余松菊里石棺墓の場合、琵琶形銅劍と磨製石劍が共伴する唯一の例となる(図11))。韓半島青銅器時代の墳墓の埋葬主体部はその規模からみて、1基の埋葬主体部に埋葬される人数は1人である。もちろん、1体の埋葬のみ可能な空間に複数の遺体を2次葬のような形で納めることも可能であるが、これまでのところそのような2次葬あるいは追葬を物語る資料は皆無である。基本的に1基の埋葬主体部に1名の埋葬、そして1点の劍の形態を呈する副葬品に複数の鏃の形態を呈する副葬品が副葬されることが、磨製石劍の性格を推測するうえで重要な手がかりを示している。

上記の点から青銅器時代社会において琵琶形銅劍や磨製石劍といった武器形副葬品は特定の個人(被葬者)のための物品であったと考えられる。では、どのような被葬者がこのような属人性の強い物品を副葬できたのであろうかという疑問、つまり生前の被葬者の社会的地位を知るための重要な手掛かりとなるのは、被葬者の性別、年齢といった被葬者個人にまつわる情報となろう。

武器形副葬品と被葬者の年齢や性別の関係について調べるためには、原位置を維持した副葬品の出土はもちろん、良好な人骨資料の確保が必須となる。韓半島の土壌が強い酸性を帯びることから青銅器時代の人骨資料が残ることは非常に珍しいが、稀に保存条件が備わったいくつかの遺跡では多くはないものの墳墓遺構から人骨が出土している。これまで細かな人骨片まで含めると約60体分の人骨が知られており、そのうち約30体分で性別あるいは年齢に関する情報が得られている(平郡達哉2014)。

これまで数多くの青銅器時代墳墓遺跡が調査されてきたが、1遺跡で複数の人骨資料が副葬品と共に確認された事例は少ない。その中でも良好な残存状態を見せる人骨とこれと共伴した磨製石劍・石鏃といった副葬品、そ

れらが埋納された個別の埋葬遺構、そして個別の埋葬遺構が有機的な関係を維持しながら築造された墓区が確認されている達城坪村里遺跡は、当時の墓制・葬制を考えるうえで重要な資料となっている。ここではこの遺跡での磨製石剣副葬の様相についてやや詳しく見てみよう。

達城坪村里遺跡では青銅器時代後期後半の墳墓（石棺墓）28基が確認された。このうち、人骨が残存していた

のは19基である（1、3、6、7、11、12、13、14、15、16、17、19、20、21、22、23、25、27、28号墓）。これら人骨に対する形質人類学的調査が実施され、1、3、11、15号墓出土人骨は性別が不明であったが、残りの人骨は全て男性であった（朴善周2010）。これら被葬者の年齢についても報告されており、12〜18歳（1、7、25号）、20〜24歳（12号）、25〜29歳（13、15号）、30〜

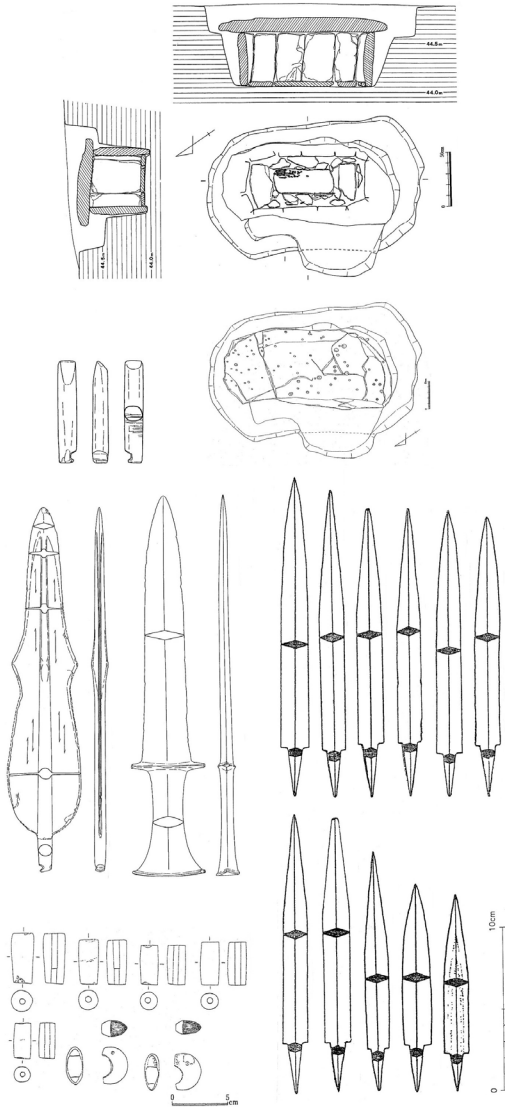


図11 扶余 松菊里石棺墓と副葬遺物

34歳(3、17、20、22、28号)、35〜45歳(6号)、45〜55歳(11、16号)、50歳以上(21号)と鑑定されている(朴善周2010)。

人骨が残っており、なおかつ磨製石剣の副葬が確認されたのは、3、12、13、17、20、23、25、28号墓の8基である。さらに年齢との関連を見ると、12〜18歳(25号)、20〜24歳(12号)、25〜29歳(13号)、30〜34歳(3、17、20、28号)、45〜55歳(11、16号)となり、磨製石剣が副葬される年齢としては30〜34歳つまり30代前半が中心をなすが、これより若い年齢や45〜55歳の被葬者にも副葬されており、年齢というカテゴリーが必ずしも磨製石剣副葬の明確な基準であるとは言い難い。むしろ、この遺跡でみる限り、被葬者が全員男性であったことを勘案すれば、性別が磨製石剣を副葬できるかどうかの基準であったと考えられる。ただ、晋州本村里2号石棺墓で検出された人骨は30代女性と鑑定されており(慶尚大学校博物館2011)、坪村里の傾向を韓半島全域に敷衍することはできない点に注意したい。

また、達村里の墓区は人骨が確認された埋葬遺構の主軸方向と隣接様相を基に、7つのグループに分けることができる(図12)(平郡2012)。これをみると各グルー

プごとに石剣+石鏃をセットで副葬する墓が存在し、それらは列状配置を見せるが、その列状配置の中にもグループごとに若干の距離を置いており、かなりの比率で石剣+石鏃がセットをなすことが分かる。

このように青銅器時代の副葬遺物・副葬行為の特徴としては、属人性が強い武器形副葬品である銅剣・石剣1点、石鏃数点を1名の被葬者のために副葬したという点と、前章で述べたように全ての被葬者に副葬するのではなく、一部の被葬者のみに行われたという点を挙げることができる。

青銅器時代の副葬行為、特に磨製石剣副葬の意義について、後藤直は「武器として他の共同体との交渉における優位を獲得する力、人々を結集させる力、共同体を害する諸々の邪悪を払う力の象徴物であり、死後にも不可欠のものとして副葬される必要」があり、「武威を含意する儀礼、言説が諸問題の解決に不可欠の社会であったことを推定させる」とした(後藤直2000)。また、裴眞晟は問題解決者としてのリーダーの地位を表示する特権的な装置・特別な威信財としても琵琶形銅剣やその代用物として磨製石剣が使用されたとしている(裴眞晟2006a)。

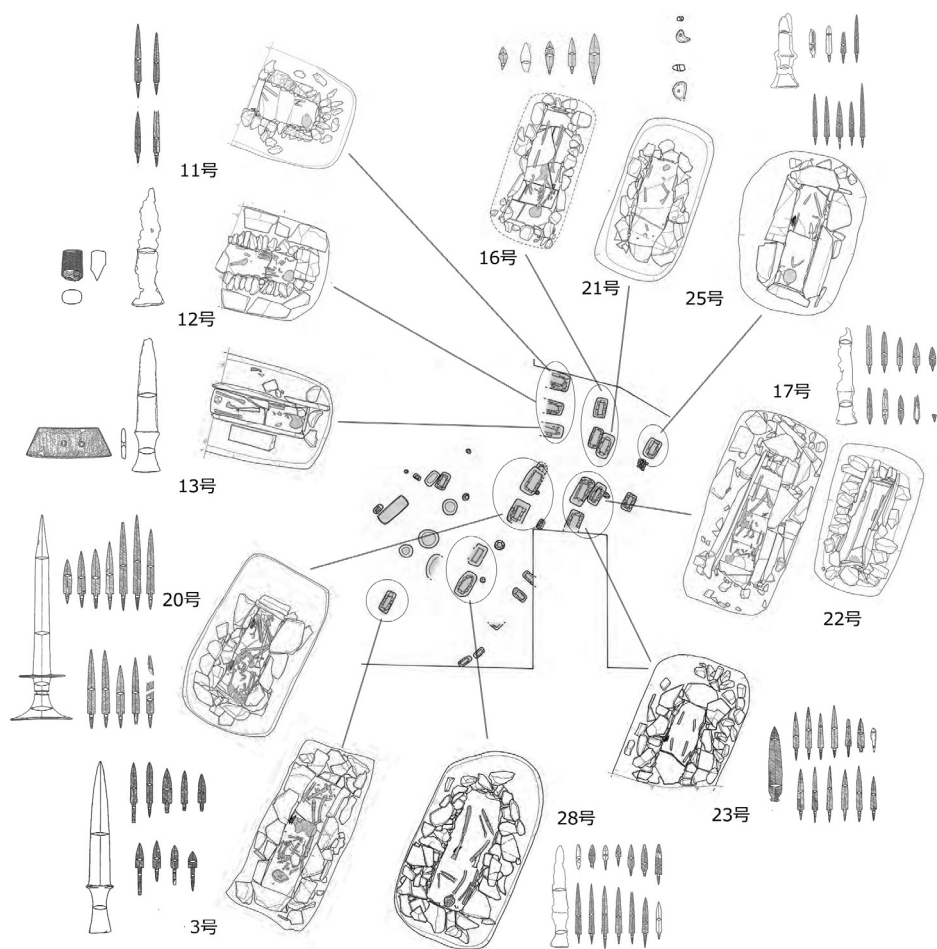


図12 達城坪村里埋葬遺構配置図（慶尚北道文化財研究院2010に加筆）

出土位置から見た場合、佩用の状態を見せるものについては、生前に使用していた物品を副葬するものから副葬用として製作したものと考えられる大型品・儀器化したものを副葬することへの変化を指摘できる（平郡2009）。このような変化は磨製石剣が人を攻撃・殺傷するための道具であるというより、本来の機能である武器として有していた象徴性がより強調された物質資料であつたためと考えられる。磨製石剣は青銅器時代社会で生じる様々な問題（集落構成員あるいは集落間の不和、葛藤などの緊張関係）を解決しなければならぬ状況で、問題解決者が武威を象徴するために保有したものであつたと推定される。

そして、このような性格を持つ磨製石剣が特定地域にのみ存在するのではなく、韓半島のほぼ全域で見られる点は複数の集団間の交流・交渉関係を基盤にして、墓制が共有されていたことを物語っているであろう。特に、韓半島南部において磨製石剣を用いた埋葬儀礼が広い範囲に拡散していることは有節柄式石剣に対する検討から想定できる。全長と剣身部の形態に高い規格性・類似性を持つ有節柄式石剣が250～300 km離れた遠隔地間でも出土している。この型式の石剣は支石墓などの墳墓

遺構から副葬品として出土するが、被葬者の腰付近から出土する点、他の型式の石剣には見られない人為的に柄部突出部を破砕するなどの副葬慣習を持つ。このような副葬慣習が韓半島南部地域で広範囲に見られることから、青銅器時代前期末～後期にかけて磨製石剣と関連した流通網と情報伝達網が存在し、埋葬儀礼が共有されていたと考えた（張龍俊・平郡達哉2009）。

結語

新石器時代から始まった定住生活のサイクルにおいて死者を埋葬し、葬儀を執り行う行為が本格的に行われるようになり、当時の人々は死者と生者という2つの立場の密接な関係性を有するようになった。青銅器時代には石材を用いた墳墓が構築されるようになり、既存の生業道具中心の副葬品から琵琶形銅剣や磨製石剣などの武器型副葬品が新たに登場したことは先ほど述べた。副葬品の種類に見られるこのような変化は、青銅器時代における農耕社会の形成と進展、つまり新石器時代の狩猟採集が主要な生業であつた時代から稲作という食料生産が主要な生業となる社会へ移行していった中で現れる現象で

あると考える。先述したように、磨製石剣は青銅器時代の集落構成員、あるいは集落間の不和、葛藤などの緊張関係など様々な問題を解決するために問題解決者が武威を象徴するために保有したものであった。そして、それが被葬者の生前の身分・地位を示すために1点副葬されたものと考えられる。達城坪村里遺跡での事例を参考にすれば、磨製石剣が副葬されるかどうかの基準は、年齢というよりも男性という性差によるものである可能性がある。

ここで注目されるのは韓半島青銅器時代の開始と共にこれら武器形副葬品の副葬が始まるのではなく、青銅器時代前期後半に墳墓築造の開始つまり、計画的および伝統的に墓区を営むことを前提にした造墓が行われる段階に、磨製石剣の副葬が始まる点である。前期後半には各墳墓の規模や構造上の卓越性はまだ見られないが、やはり墳墓を築造できる人は制限的であったと考えられる。韓半島磨製石剣の起源については研究史の部分でも言及したが、有柄式石剣については中国遼西地域から求めることができ、有茎式については遼東・韓半島北部での成立が指摘されている（近藤喬一2000、宮本一夫2004、中村大介2012）。庄田は坪村里遺跡での磨

CHEONGHAK

製石剣の副葬状況に中国東北部の十二台營子における青銅短剣との共通性を指摘し、遼西から韓半島南部へ短剣が伝播した際に短剣使用にまつわる概念もともにもたらされたのであろうと述べている（庄田2016）。

このように韓半島出土磨製石剣は中国東北部地域からの青銅器時代文化の流入と青銅器の模倣や、韓半島での農耕社会の形成・展開過程との連動、さらには日本列島の弥生時代開始期における渡来文化の一要素としても見られるものであり、広く東北アジアにおける文化の流れを物語る物質資料であることを再認識させるものである。今後は集成研究を基にした広い視点からの研究が求められる。

韓国・日本での資料調査において、多くの方々への援助を受けた。末尾ながら感謝いたします。

釜山大学校考古学科・博物館（申敬澈・金斗喆・安星姫）、国立扶余博物館（金美京、李惠遠）、亞洲大学校博物館（吳相卓）、江原考古文化研究院（池賢炳・尹碩寅・洪周稀）、江陵原州大学校博物館（朴榮九）、羅州博物館（申相孝）、山口県立山口博物館（佐藤嘉孝）、釜慶大学校博物館（趙晟元）（敬称略）

参考文献

韓国語論文は便宜上、題目を日本語に翻訳した。

●日本語

- 有光教一 1938 「朝鮮江原道の先史時代遺物」『考古学雑誌』第28巻第11号 日本考古学協会
- 有光教一 1939 「朝鮮に於ける磨製石剣の形式と分布」『人類学雑誌』第54巻第5号 東京人類学会
- 有光教一 1955 「南朝鮮土着文化の考古学的考察」『史林』第38巻第6号 史学研究会
- 有光教一 1956 「朝鮮出土の磨製石剣…細形銅剣を模した一群について」『京都大学文学部研究紀要』4 京都大学文学部
- 有光教一 1959 「朝鮮磨製石剣の研究」『京都大学文学部考古学叢書』第2冊
- 梅原未治 1922 「鳥取県下に於ける有史以前の遺跡」『鳥取県史蹟名勝地調査報告』第1冊 鳥取県
- 神田孝平 1886 「雑記」『東京人類学会報告』第10号 東京人類学会
- 甲元真之 1972a 「朝鮮半島の有茎式磨製石剣」『古代文化』第24巻第7号 古代学協会
- 甲元真之 1972b 「朝鮮半島の有柄式磨製石剣」『古代文化』第24巻第9号 古代学協会
- 甲元真之 1973 「東北アジアの磨製石剣」『古代文化』第25巻第9号 古代学協会
- 後藤直 2000 「朝鮮青銅器時代」『季刊考古学』第70号 雄山閣
- 近藤喬一 2000 「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史料編考』山口県
- 庄田慎矢 2016 「東北アジアにおける金属器受容と短剣形石器の出現」『青銅器の模倣Ⅱ』第65回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集成

庄田慎矢・寺前直人 2012 「特輯「東北アジアの武器形石器」に寄せて」『古代文化』第64巻第1号 財団法人古代学協会

孫陵鎬(庄田慎矢訳) 2006 「韓国青銅器時代磨製石剣研究の回顧と展望」『古文化叢書』第55集 九州古文化研究会

孫陵鎬(庄田慎矢訳) 2008 「朝鮮半島における磨製石剣の展開と起源について」『地域・文化の考古学 下條信行先生退任記念文集』下條信行先生退任記念事業会

孫陵鎬(庄田慎矢訳) 2012 「朝鮮半島の銅剣模倣石剣」『古代文化』第64巻第1号 財団法人古代学協会

高橋健自 1925 「第十一章 石剣との関係」『銅鉾銅剣の研究』聚精堂書店

武末純一 2004 「弥生時代前半期の暦年代―北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念

田村晃一 1963 「朝鮮半島の角形土器とその石器」『考古学研究』10-2

田村晃一 1988 「朝鮮半島出土の磨製石剣について」『東京国立博物館美術誌 MUSEUM』No.452

中村大介 2012 「弥生文化形成と東アジア社会」『塙書房』

平郡達哉 2008 「朝鮮半島嶺南地域における副葬磨製石剣の性格」『王権と武器と信仰』(菅谷文則編) 同成社

平郡達哉 2009 「朝鮮半島無文土器時代の棺外副葬―慶南地域の事例―」『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』花園大学考古学研究室

平郡達哉 2014 「列島における支石墓の受容と変容」『平成26年度瀬戸内海考古学研究』発表要旨

朴宣映 2009 「朝鮮半島中南部における有柄式石剣の編年と地域性」『考古学研究』第56巻第1号 考古学研究会

宮本一夫 2004 「中国大陸からの視点」『季刊考古学』88 雄山閣

●韓国語

- 江原考古文化研究院2016『平昌平昌邑下里(24014番地一巴)建物新築敷地内遺跡発掘調査略式報告書』
- 姜元杓2006『忠北地域磨製石剣検討』『考古学誌』第15輯 韓国考古美術研究所
- 姜仁旭2011『ロシア沿海州出土石剣の研究―型式、編年および韓半島との比較を中心に―』『東北亜文化研究』第28集
- 慶尚大学校博物館2011『泗川本村里遺跡』慶尚大学校博物館研究叢書 第33輯
- 慶尚北道文化財研究院2010『達城坪村里遺跡』
- 金邱寧1996『韓国式石剣の研究(1)』『湖巖美術館研究論文集』1、湖巖美術館、17〜84頁
- 金承玉2007『墳墓資料を通してみた青銅器時代社会組織と変遷』『階層社会と支配者の出現』韓国考古学会
- 金元龍1971『韓国磨製石剣の起源に関する一考察』『白山学報』10号 白山学会
- 金載元・尹武炳1967『韓国支石墓研究』国立博物館考古調査報告書 第6冊
- 金宰賢2002『人骨からみた南江大坪人』『青銅器時代の大坪・大坪人』国立晋州博物館特別展示図録
- 金鐘一2007『階層社会と支配者の出現』を越えて』『韓国考古学報』63輯、韓国考古学会
- 武末純一2002『遼寧式銅剣墓と国の形成―積良洞遺跡と松菊里遺跡を中心に―』『清溪史学』16・17合輯、韓国精神文化研究院
- 朴宣映2004『南韓出土有柄式石剣研究』慶北大学校大学院考古人類学科学位論文
- 朴善周2010『大邱達城郡坪村里出土青銅器時代人骨の人類学

CHEONGHAK

- 的調査』『達城坪村里遺跡』慶尚北道文化財研究院
- 裴眞晟2006a『石剣出現のイデオロギー』『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』釜山考古学研究会論叢刊行委員会
- 裴眞晟2006b『無文土器社会の威勢品副葬と階層化』『階層社会と支配者の出現』韓国考古学会創立30周年記念韓国考古学全国大会発表要旨 韓国考古学会
- 成璟瑯2005『韓国南西部地域支石墓出土石剣』全南大学校大学院碩学位論文
- 孫陵鎬2006『青銅器時代磨製石剣研究』書景文化社
- 孫陵鎬2009『湖西地域磨製石剣の変化相』『湖西考古学』20 湖西考古学会
- 宋華燮1994『先史時代岩刻画にあらわれた石剣・石鏃の様式と象徴』『韓国考古学報』31 韓国考古学会
- 沈奉謹1989『日本弥生文化初期の磨製石器に対する研究―韓国の磨製石剣と関連して―』『嶺南考古学』6 嶺南考古学会
- 安在晤2006『青銅器時代集落研究』釜山大学校大学院博士學位論文
- ウリ文化財研究院2009『晋州中川里遺跡』
- 劉美香2006『青銅器時代錦江流域出土磨製石剣に対する分析―支石墓と石棺墓・(石蓋)土壙墓出土品を中心に―』『研究論文集』第7号 湖南文化財研究院
- 尹德香1988『德峙里신기支石墓』『住岩ダム水没地域文化遺産発掘調査報告書』
- 尹昊弼2009『青銅器時代墓域支石墓に関する研究』『慶南研究』創刊号、慶南発展研究院歴史文化センター
- 李相吉2000『青銅器時代儀礼に関する考古学的研究』大邱曉星カトリック大学校大学院博士學位論文
- 李相吉2006『区画墓とその社会』『錦江・松菊里型文化の形成と発展』湖南・湖西考古学会合同学術大会発表要旨

李盛周2000「パ・支石墓…農耕社会の記念物」『韓国支石墓研究の理論と方法―階級社会の発生』崔夢龍・金仙宇編 周留城

李盛周2006「韓国青銅器時代」社会、考古学の問題』『古文化』68 韓国大学博物館協会

李秀鴻2005「検丹里式土器の時空間的位置と性格に対する一考察」『嶺南考古学』36 嶺南考古学会

李栄文1997「全南地方出土磨製石剣に関する研究」『韓国古史学报』24 韓国古史学会

李栄文2002「韓国青銅器時代研究」学研文化社

李栄文・鄭基鎮1993「麗川積良洞上積支石墓」全南大学校博物館・麗川市

李ジェウン2011「南韓地域青銅器時代住居址出土石剣研究」木浦大学校考古人類学科碩士學位論文

李熙濬2011「韓半島南部青銅器…原三国時代首長の権力基盤とその変遷」『嶺南考古学』58 嶺南考古学会

任鶴鐘2003「南海岸新石器時代の埋葬遺構」『先史と古代』18輯、韓国古代学会(訳・平郡達哉2007「韓半島南海岸新石器時代の埋葬遺構」『古代文化』vol.50-II)

張龍俊・平郡達哉2009「有節柄式石剣からみた無文土器時代埋葬儀礼の共有」『韓国考古学报』72集 韓国考古学会

庄田慎矢2007「南韓地域青銅器時代の生産活動と社会」学研文化社

趙栄済1998「泗川本村里遺跡」『南江ダム水没地区の発掘成果』嶺南考古学会

平郡達哉2012「墳墓資料からみた青銅器時代社会」釜山大学校大学院博士論文

平郡達哉2015「韓半島出土磨製石剣研究の動向と課題」『牛行李相吉教授追慕論集』

河仁秀2000「南江流域無文土器時代の墓制」『晋州南江遺跡と古代日本』慶尚南道・仁済大学校加耶文化研究所

黄昌漢2008「青銅器時代裝飾石剣の検討」『科技考古研究』第14号 亜州大学校博物館(平郡達哉訳2015「朝鮮半島青銅器時代における裝飾石剣の検討」『社会文化論集』第11号 島根大学法文学部社会文化学科)

●英文

Oksana Yanshina・Shinya Shoda2013『Weapon-Shaped Stone Tools from the Russian Far East: The Museum Collections』

*1 磨製石剣の型式分類に対する詳細な研究史については、以下の文献で整理されており参照されたい(田村1998、

金邱軍1996、孫2006・2008)。

*2 黄昌漢は裝飾石剣の分布地域が嶺南地域にのみ限定され、さらに支石墓の上石に磨製石剣が表現されている岩刻画

の分布と重複する点から、当時の磨製石剣が副葬用だけでなく崇拜の対象として扱われていたと指摘している(黄昌漢2008)。

*3 尹吳弼は個別の埋葬遺構の範囲を示す敷石・積石を「墓域」とし、複数の埋葬遺構が群集している墳墓群の領域を「墓区」と定義しており、本稿でもこの概念を用いる(尹吳弼2009)。

青鶴8

2017年3月14日 発行

発行人 韓昌祐
編集人 芦崎治
事務局 金度亨 清水聖子
発行 (公財) 韓昌祐・哲文化財団
〒100-6228 東京都千代田区丸の内1-11-1
パシフィックセンチュリープレイス丸の内31階
電話 03-5221-7973
ファクス 03-5221-7984

<http://www.hanchangwoo-tetsu.or.jp>

DTP制作 株式会社センターメディア
電子ブック制作 株式会社ページワン

本文の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©2017 HANCHANGWOO-TETSU CALUTURAL FOUNDATION
Printed in Japan

